

AMGER (BANDAI (BUSHIROAD
AQUAPLUS MARMALADE
GIGA EANSAMBLE
RECETTE)

セケ・レフーSK・RFー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺はいろいろな所に友達がいいた。俺の友達はその出来事が起こるまでは普通に過ごしていた。だが、その出来事が起こって以来、悩むことが多くなり、普通に過ごすことが苦痛になっていった。俺はそんな彼らを助けたかった。そんなある日、俺の友達はSNSでその悩みを持っている人がいたことを知った。これは俺の友達と彼女達の絆と愛の物語である。

原作名ですが、オリジナル主人公との関わりが深い作品がBang Dream!のキャラなので、Bang Dream!にさせていただきました。

この作品は、WHITE ALBUM、WHITE ALBUM2、こみつくパー

ティール、To Heart、To Heart 2（↑この5作品はAQUAPLUSから）、THE IDOLM@STER（MILLIONSTARS）、アイドルマスターシンデレラガールズ、Bang Dream!、ラブライブ!、ラブライブ!サンシャイン!!?、ラブライブ!虹ヶ崎学園スクールアイドル同好会（↑この7作品はBANANA NAMCO（BUSHEROAD含む）から）、けいおん!、ご注文はうさぎですか?、キスシリーズ（ホチキス、キスベル、キスアト、ハルキス、リップキス、フルキス（S）、メルキス、アイキス）、パサージュー!、ラブクリア、アオナツライン、彼女（あのコ）はオレからはなれない、甘えかたは彼女なりに、君の瞳にヒットミー（↑この15作品は戯画から）、PRIMAL×HERTS（2）、おうちに帰るまでがましまろです、スタディステディ（↑この4作品はまくまれえどから）、恋する気持ちのかさねかた、恋はそつと咲く花のように（↑この2作品はENSAMBLEから）、しゅがてん!（RECEPTE）とコラボした作品です。そのうちの○を除く前者13作品はアニメ化しています。後者の22作品はゲームです。

目次

同じ悩みを持つ男同士の出会い	1
同じ思いを持つ女同士の出会い	34
女子が知りたくなかった衝撃の真実	92
繋げ！届け！輝け！私達の思いと夢	119
輝きを追いかけて、きらめけ！私達の夢	133
男子と女子の思いのすれ違い	170
久しぶりの再会と隠されていた思い	201
光輔の過去、男達の思い	232

彼女達の心境、強まる恋心	253
アイドル&バンドメンバーの告白、波乱の恋	331

同じ悩みを持つ男同士の出会い

「うーす。お疲れ。どうだった？」

俺こと、曾田 光輔（そた こうすけ）は学年末テスト終了後、俺の親友である、藤

田 浩之（ふじた ひろゆき）と佐藤 雅史（さとう まさし）に声をかけた。

「ぼちぼちかな？悪くはないけどな。」

と浩之が答えると、

「俺もそんな感じかな。悪くはなかったね。」

と雅史も答えた。

「そうか。俺もそんな感じかな？この後どうする？貴明と雄二に会うか？」

俺は2人に聞いてみた。

「貴明の方も今日か。なら、会うか。」

「俺も賛成だな。」

2人はそう答えた。ちなみに、貴明こと、河野 貴明（こうの たかあき）と雄二こと、向坂 雄二（こうさか ゆうじ）は俺の親友であり、浩之と雅史の親友でもある。

「じゃあ、行くか。あの2人にも声をかけておくよ。」

「了解。」

俺ら3人は貴明達の所へ向かった。

「貴明、雄二。お疲れ様。どうだった？」

それから、数分後、俺らは貴明達の学校に到着した。ちなみに、浩之、雅史が通っている姉ヶ桜高校と貴明と雄二が通っている妹ヶ桜高校は姉妹校だ。ちなみに俺が通っているのは、央心高校だ。

「まあまあかな？雄二は今回は珍しく、まあまあって言っていたけど。」

「確かに、珍しくだな。貴明はいつも通りだけだな。」

と貴明、雄二がそれぞれそう言った。

「それじゃあ、喫茶店に行きますか。あつ、各自、自腹で頼むよ。」

「抜け目がないなあ……（笑）」

浩之、雅史、貴明、雄二はそう言いながら、俺と共に喫茶店に向かった。

「じゃあ、3学期、お疲れ様でした。乾杯。」

「乾杯。」

俺達は喫茶店に着いた後、コーヒーを頼んで、お疲れ会を開いた。

「まあ、こうして、みんなが問題なく、3学期を終えることが出来たから、よかったです。」

「そうだな。あれを除くけど…」

「俺もあれは除くけどね…」

浩之と貴明はそう呟いた。

「あれってというのは、まさか…」

俺には心当たりがあつた。

「そう。彼女達のこと。それだけは…ね。」

2人はそういった。

「確か、浩之が13人で…」

「貴明は24人だよな。」

雅史と雄二はそう言った。そう。浩之は13人、貴明は24人も彼女がいるのだ。ただ、浩之、貴明の彼女のうち、それぞれ3人ずつは特殊だが。

「しかし、何がどうなつたら、そんなことになるんだ？別に、2人は普通に当たり前のことをしただけだよな？」

俺はそう言った。2人が当たり前のことをしていたのは知っていた。彼女達には普通に接していた。

「そうなんだよなあ…何でこんなことになったんだろうなあ…はあ…」

浩之と貴明はため息をつきながら言った。

「それが分かれば、苦労はしないんだよなあ…」

俺と雅史、雄二もそう答えるしかなかった。

「今も彼女達、2人にアタックしているんだよなあ？実際、どうなの？そこは？」

俺は2人に聞いてみた。

「俺は何とか。ただ、接触を避けていることに勘ぐられているからなあ…でも、彼女達とは今は関わりたくないって言うか…」

浩之はそう言った。浩之の現状は確かに、そんな感じだった。

「俺もそんな感じかなあ…家にはシルファちゃんがいるけど、それに関しては、普段は問題ないけど、アタックしてくるときがあつて、それはかわしている。」

「なるほど。そうか…」

貴明は家にメイドロボットのシルファがいる。貴明の家に行くときに、俺も世話になったことがある。先ほど言った特殊な彼女の1人だ。と、そういえば…

「ちよつと、SNSチェックするわ。そういう人がいたような気がするなあ…」

「マジで!？」

浩之、雅史、貴明、雄二が驚いている中、俺はSNSで俺の親友の情報をチェックした。やはりな…

「予想通りだ。浩之、貴明と同じ悩みを持っている人が14人もいる。」

「14人も!?!多くないか!?!」

「しかも、全員、俺の幼馴染で、親友なんだよなあ…」

「マジで!?!さすがすぎるだろ…お前の親友…」

実際、自分でも驚いている。まさか、こんなことになっていたなんてなあ…

「それを言ったら、お前達もそうじゃん。実際、こんなことになっているんだし。」

「あつ。そうだった。」

「まあ、それは置いといて、どうする?彼ら全員に会ってみたい?」

俺は浩之と貴明に聞いてみた。

「そりゃあ、出来れば、会いたい…だけど、どこにいる人なんだ?」

「4人は東京にいるんだけど…1人が神奈川、千葉、長野、愛知、和歌山、兵庫、2人が埼玉、群馬にいるんだよな…」

「中部地方に1人、関西地方に2人いるって…来られるのか?」

浩之、雅史、貴明、雄二は不安そうに言った。

「たまに東京に来るらしいよ。実を言うと、近く、東京にまた来るらしい。会うなら、今しかないんだけど…」

その事をSNS上にUPしていた。

「じゃあ、会おう。」

「分かった。他のメンバーにも伝えておく。連絡先は会ってからでいいか？」

「ああ、構わないよ。」

浩之と貴明は承諾した。

「あつ、その14人の連絡先だけど、会った後、俺達ももらっていいか？」

雅史と雄二がそう聞いてきた。

「構わないよ。」

「Thank you.」

「それじゃあ、その14人に連絡しておくわ。なるべく、全員の都合に合わせてみせる。最優先は兵庫にいる人にするから。それでいいか？」

俺は4人に確認した。

「了解。」

「それじゃあ、お疲れ会の続きをしつつ、俺の親友について、いろいろ話すわ。」

「OK.」

こうして、俺達は俺の親友について、いろいろと語ったのだった。

それから数日後、兵庫にいたる親友にこのことを伝えると、浩之、貴明と同じ答えが返ってきて、本人がこの日なら大丈夫と言うことで、俺達は待ち合わせ場所である、東京駅の銀の鈴広場に来ていた。ちなみに、他のメンバーにもこのことを伝えたら、大丈夫ということだったので、全員集合ってことになった。

「確か、兵庫から来る人は12:53に東京に着くから、余裕を持って、13:15にここ集合にしたけど…最初は誰かな？」

ちなみに、浩之、雅史、貴明、雄二は俺と一緒に来たので、残りは14人の予定だが

…

「もしかしたら、増えると聞きました…」

「ああ、その14人も親友がいるからね。ついてくるかもしれない。もちろん、俺も知っているし、幼馴染で、親友だからね。」

「すごいなあ…」

そんなことを話していると、6人の男子がこつちに来た。

「おつ、春希、武也、親志、孝宏、冬弥、彰。お疲れ。」

俺達以外に集合場所の1番乗りは北原 春希(きたはら はるき)、飯塚 武也(いいづか たけや)、早坂 親志(はやさか ちかし)、小木曾 孝宏(おぎそ たかひろ)、藤井 冬弥(ふじい とうや)、七瀬 彰(ななせ あきら)だ。

「お疲れ。もしかして、光輔の後ろにいる人達がおれと同じ悩みを持っている人達かな？」

会つて1番、春希が俺に聞いてきた。

「全員ではないけどね。2人がそうだ。」

俺は浩之と貴明を指した。

「なるほど。今日はよろしく。」

「よろしく。」

春希、浩之、貴明の3人は軽く挨拶を交わした。

「なるほど…俺から見れば、この3人がそうなんだ。今日はよろしく。」

「よろしく。」

冬弥も軽く挨拶を交わした。その後にもまた7人の男子がこつちに来た。

「おつ、今度は和樹、大志、雄蔵、鶴彦、蒂磨、市生、清詞か。お疲れ。」

今度は千堂 和樹(せんどう かずき)、九品仏 大志(くほんぶつ たいし)、立川

雄蔵（たちかわ ゆうぞう）、縦王子 鶴彦（じゆうおうじ つるひこ）、横蔵院 蓓磨（おうぞういん へたまろ）、江田 市生（えだ いちお）、堀之内 清詞（ほりのうち せいじ）が集合場所に到着した。

「お疲れ。光輔の後ろにいる人達がおれと同じ悩みを持っている人達かな？」

春希と同様、和樹もそう聞いてきた。

「全員ではないけどね。この4人がそうだ。」

俺はそう言つて、春希、冬弥、浩之、貴明を指した。

「なるほど。今日はよろしく。」

「こちらこそ、よろしく。」

和樹も4人に軽く挨拶を交わした。

「俺から見れば、この5人つてことだね。今日はよろしく。」

「こちらこそ、よろしく。」

市生も軽く挨拶を交わした。その後、意外なことに、残りのメンバーが来た。

「予想外だな……まあ、早めの全員集合も悪くないな。とりあえず、お疲れ。」

最後に鳴神（帯刀） 和馬（なるがみ（たてわき） かずま）、五明 孝明（ごみょう

たかあき）、御座入 紀洋（みぎのり のりひろ）、幸塚 大智（こうづか だいち）、敷

島 秀彦（しきしま ひでひこ）、八斗島 清司（やったじま きよし）、山田 九郎（や

まだ くろう)、ガトー・ネージュ、遊馬(宮原) 亮(あすま(みやはら) りよう)、毛呂 久太郎(もろ きゆうたろう)、川越 太一(かわごえ たいち)、元山 茂(もとやま しげる)、中津 幸太郎(なかつ こうたろう)、浅間 真(あさま まこと)、岡陽太(おか ようた)、瀬戸 修司(せと しゅうじ)、日比野 浩一(ひびの こういち)、立石 総司(たていし そうじ)、平山 圭助(ひらやま けいすけ)、市原 昌晴(いちはら まさはる)、佐野 幸大(さの こうだい)、織原 諒一(おりはら りょういち)、岩出 清貴(いわで きよたか)が集合場所に到着した。ちなみに、現在の時刻は13:05だ。

「お疲れ。これで全員集合って言うていたけど、光輔の後ろにいる人達がそうか?」

和馬が俺の言っていたことを聞いて、そう聞いてきた。

「全員ではないけどね。この6人がそうだ。」

俺はそう言つて、春希、冬弥、和樹、浩之、貴明、市生を指した。

「なるほど。今日はよろしく。」

「(ちら)そ、よろしく。」

和馬も6人に軽く挨拶を交わした。

「俺達から見れば、7人だね。今日はよろしく。」

「(ちら)そ、よろしく。」

大智、九郎、亮、茂、真、修司、総司、昌晴、諒一も7人に軽く挨拶を交わした。

「それじゃあ、全員集まったし、別の所で、改めて自己紹介しますか。」

「了解。」

俺がそう言った後、俺以外の男子はそう答えて、俺達は東京駅近くの喫茶店に移動した。

「じゃあ、自己紹介でも始めますか。」

東京駅のある店に着いて、席に着いた後、俺はそう言った。

「そうですね!」

俺以外の男子はそう答えた。

「俺は全員知っているから、省略で。最初は春希でいいか?」

俺は春希にそう伝えた。

「分かった。」

春希はそう言った後、自己紹介を始めた。

「改めて、皆さん、初めまして。峰城大学(ほうじょうだいがく)文学部3年生の北原春希です。高校の時に軽音楽同好会でギターを弾いていました。大学でも軽音サーク

ルに入って、ギターを弾いています。編集社でバイトしています。よろしくお願いします。」

(北原以外 拍手)

「じゃあ、次は、武也。いいか？」

俺は武也にそう伝えた。

「了解。皆さん、初めました。同じく、峰城大学政経学部3年生の飯塚 武也です。春希の親友です。春希と同じで、高校の時に軽音楽同好会でギター弾いていました。現在も大学の軽音サークルで弾いています。よろしくお願いします。」

(飯塚以外 拍手)

「じゃあ、次は、親志。いいか？」

俺は親志にそう伝えた。

「OK. 皆さん、初めまして。同じく、峰城大学文学部3年生の早坂 親志です。春希、武也の親友です。僕は高校時代は部活は入っていませんでしたが、大学で軽音サークルに入り、ベース担当しています。よろしくお願いします。」

(早坂以外 拍手)

「じゃあ、次は、孝宏。いいか？」

俺は孝宏にそう伝えた。

「構わないよ。皆さん、初めまして。峰城大学付属高校3年生の小木曾 孝宏です。春希先輩、武也先輩、親志先輩の親友です。部活は入っていませんが、大学に入ったら、軽音サークルに入ろうと思っています。よろしく願います。」

（小木曾以外 拍手）

「次は、冬弥。いいか？」

「分かった。皆さん、初めまして。悠風大学（ゆうなぎだいがく）理工学部2年生の藤井 冬弥です。塾でバイトをしています。部活は所属していません。よろしく願います。」

（藤井以外 拍手）

「次は、彰。いいか？」

「了解。皆さん、初めまして。同じく、悠風大学理工学部2年生の七瀬 彰です。冬弥の親友です。実家が喫茶店で、そこでバイトがてら仕事しています。部活はそのせいで所属していません。よろしく願います。」

（七瀬以外 拍手）

「次は、和樹。いいか？」

「分かった。皆さん、初めまして。音美大学（おんびだいがく）美術学部1年生の千堂 和樹です。同人誌を書いていて、コミックイベントの時に書いた同人誌を売っていま

す。部活は所属していません。よろしく願います。」

(千堂以外 拍手)

「次は、大志。いいか？」

「OK. 皆さん、初めまして。同じく、音美大学美術学部1年生の九品仏 大志です。和樹の親友で、和樹のことは『マイブラザー』、『同志和樹』と呼んでいたります。同じく、同人誌を書いています。部活は所属していません。よろしく願います。」

(九品仏以外 拍手)

「次は、雄蔵。いいか？」

「分かった。皆さん、初めまして。同じく、音美大学美術学部1年生の立川 雄蔵です。和樹、大志の親友です。同人誌は書いていませんが、書こうかなと考えています。よろしく願います。」

(立川以外 拍手)

「次は、鶴彦。いいか？」

「了解です。皆さん、初めまして。同じく、音美大学美術学部1年生の縦王子 鶴彦です。コードネームを持っていて、『おたくタテ』です。和樹、大志、雄蔵の親友です。同人誌は書いていませんが、コミックイベントが好きで、よく同人誌を買います。よろしく願います。」

(縦王子以外 拍手)

「次は、蒂磨。いいか?」

「了解です。皆さん、初めまして。同じく、音美大学美術学部1年生の横蔵院 蒂磨です。コードネームを持っていて、『おたくヨコ』です。和樹、大志、雄蔵、鶴彦の親友です。同人誌は書いていませんが、コミックイベントが好きで、買うことは多いです。よろしくお願いします。」

(横蔵院以外 拍手)

「次は、浩之。よろしく。」

「分かった。皆さん、初めまして。姉ヶ桜高校(あねがさくらこうこう)3年生の藤田 浩之です。部活は武術部で、大学は中央大学理工学部ロボット学科を志望しました。よろしくお願いします。」

(藤田以外 拍手)

「次は、雅史。よろしく。」

「了解。皆さん、初めまして。同じく、姉ヶ桜高校3年生の佐藤 雅史です。浩之の幼馴染であり、親友です。部活はサッカー部で、浩之と同じく、大学は中央大学スポーツ部を志望しました。よろしくお願いします。」

(佐藤以外 拍手)

「次は、貴族の貴明。よろしく。」

たかあきは2人いるので、どちらか明確にするため、最初の漢字1字から始まる熟語で区別している。

「俺ね。分かった。皆さん、初めまして。妹ヶ桜高校（まいがさくらこうこう）2年生の河野 貴明です。藤田先輩と佐藤先輩の幼馴染です。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

（河野以外 拍手）

「次は、雄二。よろしく。」

「了解。皆さん、初めまして。同じく、妹ヶ桜高校2年生の向坂 雄二です。藤田先輩、佐藤先輩、貴明の幼馴染で、親友です。部活は貴明と同じく、所属していません。よろしくお願いします。」

（向坂以外 拍手）

「次は、和馬。よろしく。」

「分かった。皆さん、初めまして。群馬県で鳴神流という格闘技を教えています、鳴神流の当主、帯刀 和馬です。本名は鳴神 和馬ですが、どちらで呼んでも構いません。23歳です。間ノ島学園（あいのしまがくえん）在学時は月天和という生徒会の会長も務めていました。よろしくお願いします。」

(帯刀以外 拍手)

「次は、孝行の孝明。よろしく。」

「僕か。承った。皆さん、初めまして。和馬君の元で鳴神流の手伝いをしています、五明孝明です。間ノ島学園在学時は月華会副会長を務めていました。和馬君の親友で、和馬君と同じ年です。よろしくお願いします。」

(五明以外 拍手)

「次は、紀洋。よろしく。」

「OK. 皆さん、初めまして。同じく、和馬氏の元で鳴神流の手伝いをしています、群馬のテレビ局に勤めています、御座入 紀洋です。間ノ島学園在学時は天道会書記を務めていました。和馬氏の親友で、和馬氏と孝明氏と同じ年です。よろしくお願いします。」

(御座入以外 拍手)

「次は、大智。よろしく。」

「分かった。皆さん、初めまして。間ノ島学園の高校2年生、幸塚 大智です。部活は所属はしていませんが、月天和という生徒会の2代目会長を務めていました。当主の和馬さんのところで鳴神流は習っていました。よろしくお願いします。」

(幸塚以外 拍手)

「次は、秀彦。よろしく。」

「うむ。皆さん、初めまして。同じく、間ノ島学園の高校2年生、敷島 秀彦です。月華会書記所属、筋トレが趣味で、大智の親友です。よろしく願います。」

(敷島以外 拍手)

「次は、清司。よろしく。」

「ういつす。皆さん、初めまして。同じく、間ノ島学園の高校2年生、八斗島 清司です。天道会会計所属です。ギターが趣味で、大智と秀彦の親友です。よろしく願います。」

(八斗島以外 拍手)

「次は、九郎。よろしく。」

「分かった。皆さん、初めまして。埼玉県のマシユマロ・クロールというケーキ屋でパティシエリーダーを務めています、山田 九郎です。22歳です。神扇学園(かみおうぎがくえん)在学時は生徒会長を務めました。よろしく願います。」

(山田以外 拍手)

「次は、ガトー。よろしく。」

「了解。皆さん、初めまして。埼玉県でホテル事業しています、ガトー・ネージュです。マシユマロ・クロールで手伝いもしています。神扇学園在学時は生徒会副会長を務めていました。九郎君と同じ年です。よろしく願います。」

(ガトー以外 拍手)

「次は、亮。よろしく。」

「分かった。皆さん、初めまして。神扇学園の高校2年生の宮原 亮です。本名は遊馬 亮ですが、和馬さんと同様に、どちらで呼んでも構いません。九郎さんと同じく、マシユマロ・クロールでパティシエを務めています。よろしくお願いします。」

(遊馬以外 拍手)

「次は、久太郎。よろしく。」

「了解。皆さん、初めまして。同じく、神扇学園の高校2年生、毛呂 久太郎です。亮の親友であり、ライバルでもあります。家は弁護士関係です。また、マシユマロ・クロールで手伝いをしています。よろしくお願いします。」

(毛呂以外 拍手)

「次は、太一君。よろしく。」

「分かった。皆さん、初めまして。神扇学園の小学4年生、川越 太一です。亮兄ちゃんとか久太郎兄ちゃんの親友です。実家は酒屋ですが、マシユマロ・クロールの手伝いもしています。よろしくお願いします。」

(川越以外 拍手)

「次は、茂。よろしく。」

「分かった。皆さん、初めまして。垣楠学園（こうなんがくえん）の高校2年生、元山茂です。学園生活相互研究会の会長を務めています。実家は神戸で花屋を営んでいます。よろしくお願ひします。」

（元山以外 拍手）

「次は、幸太郎。よろしく。」

「了解。皆さん、初めまして。同じく、垣楠学園の高校2年生、中津 幸太郎です。学園生活相互研究会の副会長を務めています。茂の幼馴染で親友です。よろしくお願ひします。」

（中津以外 拍手）

「次は、市生。よろしく。」

「分かった。皆さん、初めまして。江子田学園（えこだがくえん）の高校2年生、江田市生です。クリスマス委員会に所属していました。お祭り好きです。よろしくお願ひします。」

（江田以外 拍手）

「次は、清詞。よろしく。」

「了解。皆さん、初めまして。同じく、江子田学園の高校2年生、堀之内 清詞です。弓道部で、クリスマス委員会のサポートをしていました。市生の親友です。よろしくお願ひ

いします。」

(堀之内以外 拍手)

「次は、真。よろしく。」

「分かった。皆さん、初めまして。有杜美術学園(ありもりびじゅつがくえん)の高校2年生、浅間 真です。学園の名前の通り、美術が得意で、絵を描くことが趣味です。また、喫茶店モデュロールの店員もしています。もよろしく願います。」

(浅間以外 拍手)

「次は、陽太。よろしく。」

「了解。皆さん、初めまして。同じく、有杜美術学園の高校3年生、岡 陽太です。真の親友です。大学は中央大学美術学部を志望しました。よろしく願います。」

(岡以外 拍手)

「次は、修司。よろしく。」

「分かった。皆さん、初めまして。望花学園(ぼうかがくえん)の高校2年生、瀬戸 修司です。光輔の従兄弟で、部活は水泳部のマネージャーと柔道部に所属しています。よろしく願います。」

(瀬戸以外 拍手)

「次は、浩一。よろしく。」

「分かりました。皆さん、初めまして。同じく、望花大学の高校2年生、日比野 浩一です。部活は所属していません。実家は名古屋で病院経営しています。よろしくお願ひします。」

(日比野以外 拍手)

「次は、総司。よろしく。」

「分かった。皆さん、初めまして。光葉台学園(みつばだいがかえん)の高校2年生、立石 総司です。部活はテニス部に所属しています。よろしくお願ひします。」

(立石以外 拍手)

「次は、圭助。よろしく。」

「了解。皆さん、初めまして。同じく、光葉台学園の高校2年生、平山 圭助です。総司の親友です。部活は所属していません。よろしくお願ひします。」

(平山以外 拍手)

「次は、昌晴。よろしく。」

「分かった。皆さん、初めまして。桃櫻井学園(ももざくらいがかえん)の高校2年生、市原 昌晴です。学園祭実行委員会に所属していました。よろしくお願ひします。」

(市原以外 拍手)

「次は、幸大。よろしく。」

「了解。皆さん、初めまして。同じく、桃櫻井学園の高校2年生、佐野 幸大です。昌晴の親友です。部活は所属していません。よろしく願います。」

(佐野以外 拍手)

「次は、諒一。よろしく。」

「分かった。皆さん、初めまして。四季創学園(しきそうがくえん)の高校2年生、織原 諒一です。実家は和歌山で洋裁店と洋裁教室を営んでいます。部活は所属していません。よろしく願います。」

(織原以外 拍手)

「最後に、清貴。よろしく。」

「分かりました。皆さん、初めまして。同じく、四季創学園の高校2年生、岩出 清貴です。部活は所属していません。よろしく願います。」

(岩出以外 拍手)

「これで、全員終わったね。何か、誰かに聞きたいことはあるか？」

「なら、俺から、1ついいか？」

俺がそう言った後、和馬が1つ聞いてきた。

「太一君は、小学生と言ったけど、両親は今日、ここに行くって事は知っているのか？」
「はい。知っています。このことは、亮兄ちゃんと久太郎兄ちゃんも知っていますの

で。」

太一君はそう答えた。亮と久太郎も頷いた。

「俺からもーついいか？」

今度は、浩之が聞いてきた。

「光輔、修司と従兄弟だったのか？初めて聞いたんだが…」

「あつ、そうそう。俺も知らなかった。」

「僕も知りませんでしたよ。修司が光輔と従兄弟だったなんて…」

同様に、雅史、貴明、雄二が俺に、浩一が修司に聞いてきた。

「あれ？前に話したはずなんだけど…覚えてない？」

「いや、全く。」

「そうか…」

話したと思っていたのだが…

「まあ、いいや。もう一回話すか。俺と修司は従兄弟関係で、俺の本名の姓が修司と同じなんだよ。」

「そうそう。名だけは全く別だけどね。あと、兄弟ではないんだ。血のつながりはないから。」

「名まで一緒だったら、奇跡だよ…そして、ごめん。話したね。」

「だろう？まあ、いいけど……」

俺と修司の関係を話し終わったので、俺は話を戻した。

「他に何かあるか？なければ、次の話題に移すけど……」

「大丈夫です。」

全員、承諾したので、俺は次の話題に移した。

「そうしたら、俺ら、今後、どう呼んでいく？1番上が23で、1番下が10とかなり歳が離れているんだけど……友達みたいに呼んでも大丈夫か？」

「俺は大丈夫です。」

和馬と太一君はそう答えた。

「他のみんなもそれでいいか？それでも5〜6くらい歳が離れているんだけど……」

「全然、大丈夫です。そうしましょう！」

和馬と太一君以外の男子もそう答えた。

「じゃあ、そうしよつか。そうしたら、本題に移ろうか。」

俺はそう言って、本題に移った。

「同じ悩みを持っていたのは、春希、冬弥、和樹、浩之、貴明、和馬、大智、九郎、亮、茂、市生、真、修司、総司、昌晴、諒一だよね？」

「はい。そうです。」

その悩みを持っている春希、冬弥、和樹、浩之、貴明、和馬、大智、九郎、亮、茂、市生、真、修司、総司、昌晴、諒一はそう答えた。

「同じ悩みって言うのは、彼女達のつきあいつて事でいいんだね？」

「はい。」

同様に、彼らは答えた。

「実際、こうなつて、どう？」

俺は彼らに聞いてみた。

「…後悔はしていないけど、気分はあまりよくない感じ。重苦しいですね…」

「同感です。」

春希がそう答えた後、同じ悩みを持つ他の人達もそう答えた。

「なるほど。それで、武也、親志、孝宏、彰、大志、雄蔵、鶴彦、蒂磨、雅史、雄二、孝明、紀洋、秀彦、清司、ネージュ、久太郎、太一君、幸太郎、清詞、陽太、浩一、圭助、幸大、清貴はこれに関して、どう？」

「正直、何故、こうなつてしまったのか…よく分かりません。ですが、今の彼を助けたいとは思っています。」

「やはりか…俺も彼らをどうにかしたいんだけどなあ…」

ここに居るみんなはそれぞれ同じ考えを持つていた。すると、貴明がふと思ひ出した

ように呟いた。

「…そういえば、彼女達はどうしているんだろう?」

「…気にはするか。」

俺は貴明にそう言った。

「…そうですね。気にならないと言えば、嘘にはなりますね…何も言わずにここまで来たので…」

「それは俺もそうだな…」

同じ悩みを持つ他の人達もそうだった。すると…

「?」

「修司、どうした?」

修司がズボンのポケットを探り始めた。

「携帯が鳴っているみたいで…」

「ああ。構わないよ。」

俺がそう言った後、修司は携帯を取り出して画面を見た。だが、彼は画面をタップしたあと、携帯を元の場所に戻した。

「ん? 出なくてよかったのか?」

「ええ。大丈夫でした。はあ…」

修司はため息をつきながら言った。今ので確信した。

「…もしかして、彼女か？」

「…はい。」

「…何をやっているんだが…あいつら…」

俺は苦虫をかみつぶしたように言った。

「他のみんなもそんな感じか？特に、和馬。」

「ええ。ときどき、連絡が来ますね。なんとしてでも俺に会いたいんだな…全く…」

和馬はそう言った。実際、和馬は6年間、彼女達とは会っていないらしい。会わなかった理由は山に住んでいたからだ。降りてきたとしても、接触は避けていたらしい。

「俺もそんな感じですよ。彼女達は俺に接触しようとしているよ。勘弁してくれ…」

同じ悩みを持つ他の人達もそう言った。この様子だと、状況が悪化しているな…彼らの荷物の感じからして。

「思ったのだが…和馬、大智、九郎、亮、茂、市生、真、修司、総司、昌晴、諒一。その大荷物は一体？」

「ああ。これですか？そうだ。そのことでもお願いがあるのですが…」

「…お願いが何かは分かっただけど、一応、聞こう。」

彼らが荷物を持ってここに来たって事は、これしかない。

「泊めてもらえますか？しばらくの間。正直言つて、自分の私物、ほぼ全部持ってきたんですよね…」

「マジで!？」

泊めてほしいのは予想通りだった。だが、予想外だったのは、自分の私物をほぼ全て持つてここに來たつて事だ。もしかして…

「まさか…彼女達とは…」

「ええ。実を言うと、決めていました。」

「そうか…そういうことか…」

彼らがそう言つた瞬間、彼らが彼女達をどう思つているか、分かつた。

「彼女達とは、距離を置くつて事か…別れるに近い…かな？」

「はい。実を言うと、今の心境は、もうほぼ会いたくない感じですね…」

「そうか…」

さっきの状況からして、彼女達には苦勞していたんだな…

「彼女達とは、距離を置くのか…」

そう呟いたのは、春希だ。

「春希？何か、気になるのか？」

俺は氣になつて、春希に尋ねた。

「いや、俺もそうしようかなって思ったので…」

「あつ、それは俺も思った。」

春希がそう言った後、冬弥、和樹、浩之、貴明も続けて言った。

「…そう言うとは思っていただけ、それが本心だもんな。」

「はい。」

状況からして、そんなことを言う気がしていた。

「で、泊める件だけど、全員を泊めるには多すぎるからな…修司は俺の所でいいよな？」

「ああ。最初から決めていたし。」

修司が東京に来るときは、必ず俺の家に泊まるのだ。

「後はどうするんだ？俺はあと3人は泊めることは出来る。」

「したら、俺は貴明の家に泊まってもいいか？」

茂は貴明に言った。

「俺でよければ。俺もあと2人かな？」

「じゃあ、俺もいい？」

そう言ったのは、大智と亮だ。

「了解。俺はここまでだな。」

「そうしたら、俺は浩之の家に泊まってもいいか？」

そう言ったのは、総司だ。

「分かった。俺もあと2人だな。」

「じゃあ、俺は和樹の家に泊まっていいか？」

真と昌晴は和樹に言った。

「構わないよ。俺はあと1人だ。」

「俺は冬弥の家に泊まっていいか？」

市生と諒一は冬弥に言った。

「了解。俺はここまでだな。」

「じゃあ、俺は春希の家に泊まることにするよ。いいか？」

和馬と九郎が春希に言った。

「問題ないよ。俺もここまでだな。」

「それで、孝明、紀洋、秀彦、清司、ネージュ、久太郎、太一君、幸太郎、清詞、陽太、浩一、圭助、幸大、清貴も同様に大荷物持ってきているみたいだし、泊まるって事は分かった。で、誰の家に泊まるかは決めた？」

孝明、紀洋、秀彦、清司、ネージュ、久太郎、太一君、幸太郎、清詞、陽太、浩一、圭助、幸大、清貴も大荷物だったので、彼らと同じなんだろうって事を察した。

「あつ、俺の家はOUTだ。女子いるからな…」

孝宏、雄蔵、雄二はそう言った。孝宏と雄二は姉、雄蔵は妹がいる。

「分かった。なら、僕は紀洋と一緒に親志の家に泊まることにするよ。」

「拙者もそれで大丈夫です。」

「俺でよければ、喜んで。」

孝明と紀洋は親志に言つて、親志は承諾した。

「じゃあ、僕は清司と一緒に武也の家に泊まることにするよ。」

「俺も問題ないです。」

「俺でよければ。全然構わないよ。」

秀彦と清司は武也に言つて、武也も承諾した。

「そしたら、僕は久太郎と太一君と一緒に彰の家に泊まることにするよ。」

「俺は大丈夫だ。」

「俺も大丈夫だよ。」

「OK。」

ガトー、久太郎、太一君は彰に言つて、彰も承諾した。

「だったら、俺は大志の家に泊まることにするよ。」

「我輩の家でよければ。」

陽太は大志に言つて、大志も承諾した。

「俺は圭助と一緒に鶴彦の家に泊まるよ。」

「俺は問題なし。」

「拙者も大丈夫だ。」

幸太郎と圭助は鶴彦に言つて、鶴彦も承諾した。

「僕は幸大と一緒に蒂麿の家に泊まるよ。」

「俺は問題は無い。」

「拙者も問題なし。」

清詞と幸大は蒂麿に言つて、蒂麿も承諾した。

「僕は雅史の家に泊まるよ。」

「俺は全然構わないよ。」

浩一は雅史に言つて、雅史も承諾した。

「これで、全員、泊まる場所が決まったね。それじゃあ、今後もよろしく！」

「よろしく！」

こうして、俺達の出会いが始まった。

〜次回に続く〜

同じ思いを持つ女同士の出会い

「はあ…」

私こと、向坂 環（こうさか たまき）は悩んでいた。その理由は、私が好きな人の行動が最近、よそよそしい態度を取ることが多くなってきた。

「環さん、どうかしたの？」

声をかけてきたのは、クラスメイトで私の親友の久寿川 ささら（くすがわ ささ）ら。生徒会長でもある。

「最近ね…よそよそしいのよ。タカ坊の態度が。私との接触を避けているし…」

「…やはりそうですか…私もです。貴明さんがどうしてあのようなことをしているのか…」

そう。私とささらさんはタカ坊こと河野 貴明のことが好き。他にもタカ坊のことが好きな人もいるけど。

「とりあえず、今日の授業が終わったら、みんなで集まりましょう。情報は多い方がいいし。」

「そうですね。」

授業終了後、私達は彼女達に連絡して、生徒会室に集合した。

「タカ坊が最近、よそよそしいんだけど、みんなの方はどうなの？」

私はみんなに聞いてみた。最初に口を開いたのは、このみこと、柚原 このみ（ゆずはら このみ）。

「タマお姉ちゃんもそう思っていたんだ。実は私も感じていたんだ…タカ君が避けていることを…」

このみは悲しそうにそう言った。次に口を開いたのは優季さんこと草壁 優季（くさかべ ゆうき）だ。本名は高城（たかしろ） 優季。私とこのみ、優季さんは幼馴染である。

「私も最近、貴明さんの様子がおかしいのは気づいていました。授業が終わると、そそくさどこかに行きますし…」

優季さんもあまり元気がない様子でそう言った。

「私もそんな風に感じます。今日もそそくさと帰って行っただけ…声をかけようとしたのですが…」

「私も同感だ。何か隠している。だけど、教えてくれない…」

「私も同じです。なんであのような行動しているのか、よく分かりません…」

小牧 愛佳（こまき まなか）さん、ルーシー・マリア・ミソラさん、羽根崎 美緒

（はねぎき みお）さんも暗い感じで言った。

「あたしも貴明がさつさと帰っていくの見たよ。雄二も一緒だったし、雄二もそそくさと帰って行ったし…」

「あたしもたかちゃんも雄二と一緒に早く帰っていくのを見たよ。あの感じ…何かあるわね…」

「雄二も一緒だったんだ…全く…雄二も言わないんだから…」

長瀬 由真（ながせ ゆま）さんと笹森 花梨（ささもり かりん）さんも元気ない感じで言った。2人の言ったことに私はため息をつきながら言った。ちなみに、雄二は私の弟。

「私もそんな感じでした。何故、あのようなことをしているのか…私には分かりません…お姉様どころか、私達までこんな思いをさせるなんて…」

「私も同じです。何があつたのか、知りたいくらいです…」

「私もです。ただ…貴明さんと雄二さん、誰かと待ち合わせをしていたような…」

桜崎 玲於菜（さくらぎき れおな）さん、雪川 薫子（ゆきかわ かおるこ）さん、

秋山 かすみ（あきやま かすみ）さんも落ち込んだ感じで言った。この3人は私の事

をお姉様と呼んでいるけど、姉妹ではない。ん？待ち合わせ…？

「待ち合わせって…？そういうえば、タカ坊、今日は誰かと待ち合わせがあったような気がするわ。誰か分かる人っている？」

私はみんなに聞いてみた。高校2年生は全員、首を横に振った。

「うちも知らんなあ…」

姫百合 珊瑚（ひめゆり）さんご）ちゃんと姫百合 瑠璃（ひめゆり）るり）ちゃんも揃って言った。ちなみに、珊瑚ちゃんと瑠璃ちゃんは双子の姉妹で、珊瑚ちゃんが姉で、瑠璃ちゃんが妹である。

「あたし…雄二が言っていたのを聞いたんだけど…」

「えっ、本当？誰か分かる？」

小牧 愛佳さんの妹、小牧 郁乃（こまき）いくの）さんが何か知っていたみたいなので、私は聞いてみた。

「ええ。雄二、光輔って人と待ち合わせがあるって言っていました。貴明もその人の名前を出していました。ところで…光輔って、誰か、分かりますか？」

「光輔!?!まさか…」

「光輔って…コウ君!?!」

「光輔って…光輔さん!?!」

私とこのみ、優季さんは揃って声を上げた。私はその名前に聞き覚えがあった。光輔は

曾田 光輔のことだ。タカ坊と雄二の幼馴染で、私とこのみ、優季さんの幼馴染でもある。

「それが本当なら……ちよつと場所を移してもいい？あの人達と一緒にの方がいいわ。今から連絡するわ。」

私はみんなに聞いてみた。これは大変なことになりそうね…

「あつ、はい！分かりました！」

全員がそう言ったので、私達は場所を移すことにした。そして、私は、あの人に連絡した後、私達と同じ考えを持っている人達に連絡した。

それから、数分後、私達はタカ坊が好きな人達と合流したあと、あの人達の所に来たのだ。

「お疲れ様。話したいことがあるって聞いたけど、どうしたの？」

そう声をかけてきたのは、私の親友、神岸 あかり（かみきし あかり）さん。私と

同様、曾田 光輔の幼馴染である。

「タカ坊と雄二が光輔と待ち合わせしていたみたいなのよ。それで、光輔のことなら、あなたに聞いた方が早いと思つて……」

「あら、偶然ね。私もあなたに光輔のことを聞きたかつたのよ。他のみんなもそうなのよ。」

あかりの後ろには、あかりの親友が集まっていた。

「光輔のことね？今、私の知っている情報は、光輔は浩之ちゃんと雅史君とも待ち合わせしていたみたいなのよ。浩之ちゃんも雅史君も授業が終わつたら、そそくさと教室を出て、光輔に会いに行つたみたい……残念ながら、待ち合わせ場所は分からなかつたわ。」

「じゃあ、タカ坊と雄二は光輔、浩之、雅史と合流した後、どこかに行つたつて事ね。前々から、タカ坊と雄二は浩之と雅史に会いに行く回数が多くなつてきていたし、今日もタカ坊が浩之に会う予定があつたみたいだから。」

浩之に会うつて事をタカ坊は私に言っていたので、そのことは知っていた。

「ところで、そつちは、浩之との関係は、上手くいっているの？」

あかりが浩之のことを好きなのは知っていた。多分、あかりの後ろにいるあかりの親友も浩之のことが好きだったと聞いている。

「ううん。上手くいってないわ。私の親友もそんな感じ……そつちは？」

「私もよ。私達の親友もそんな感じよ…」

「お互い様って事ね…はあ…」

私とあかりはため息をつきながら言った。

「やっぱり、光輔から直接、聞いた方がいいね。タカ坊と浩之の心境、全部知ってそうだし。」

「そうね。あと、光輔のSNSチェックしたんだけど、光輔、他にも幼馴染がいるそうよ。」

「えっ、他にも!?!」

そう声を上げたのは、あかりの親友、長岡 志保（ながおか しほ）だ。

「な、何人いるの?」

志保は声を震わせながら、聞いてきた。

「えっと…私も驚いたんだけど、男子だけでも40人はいるそうよ。しかも、男子は全員、親友だそうよ。」

「4、40人!?!」

これには、私も含めた女子全員が驚いた。光輔がこんなに多く親友を持っていたなんて、聞いていないんじゃないけど…

「女子も何人が幼馴染はいるそうよ。その幼馴染の女子達もやはり光輔のこと、探して

いるみたいよ。私達と同じで、光輔の幼馴染の親友に恋心を持っているみたいよ。光輔に会う前に、彼女達に会ってみない？」

私達と同じ状況にあっている人がいるんだ…これは気になるわね…

「そうね…彼女達も光輔のことを知っているみたいだし。何か分かりそうね。そうしましよう！みんなもいいわよね？」

私は確認すると、他のみんなも頷いた。

「分かったわ。だけど、1つ問題があつて、遠い人で、兵庫の人なのよね…」

「ひよ、兵庫!？」

私達はまた驚いた。光輔、兵庫にも幼馴染の親友がいるの？

「日程は兵庫にいる人の方に合わせるけど…みんな、いい？」

あかりは私達に聞いてきた。

「ええ。私は別に構わないわ。みんなもいいわよね？」

私はこのみ達に聞いてみた。このみ達は頷いた。

「私達は構いません。」

「分かったわ。日程は追つて連絡するわ。」

「了解。じゃあ、今日は解散で。あかり。いろいろありがとう。」

「お互い様よ。また後で、よろしくね。」

そう言つて、私達は今日の集会を終えた。

それから数日後、私達は東京駅の銀の鈴広場に來ていた。あかりが兵庫にいる人にこのことを伝えると、私達と同様に会つてみたいと連絡が來たので、いつがいいか連絡したところ、今日つて事になった。

「確か、他の地域の方もいるみたいですが、この日は大丈夫みたいでしたね。」

私はあかりに聞いた。そう。他にも、和歌山、愛知、神奈川、千葉、埼玉、群馬、長野に住んでいる方もいたそうだが、全員、この日は大丈夫とのことだった。

「ええ。最初から全員集合は嬉しいね。集合時間は余裕を持って、13:15にしたんだけど……あら、早速、來たみたいね。」

あかりが言つたとおり、4グループの女子メンバーがこつちに來た。

「お疲れ様。グループリーダーの小木曾 雪菜（おぎぞ せつな）さん、森川 由綺（もりかわ ゆき）さん、高瀬 瑞希（たかせ みずき）さん、高幡 ちはる（たかはたち はる）さんですね。今日はよろしくお願ひします。」

実は、メンバーが多いので、あらかじめ、グループリーダーを決めておいたのだ。

「はい。こちらこそ、今日はよろしく願います。」

軽く挨拶を交わすと、今度は3グループの女子メンバーがこっちに来た。

「お疲れ様。グループリーダーの五ヶ谷 奏撫（いつがや かなで）さん、聖代橋 氷織（ひじりばし こおり）さん、奈良原 千桜（ならはら ちさ）さんですね。今日はよろしく願います。」

「はい。こちらこそ、よろしく願います。」

軽く挨拶を交わすと、最後に5グループの女子メンバーがこっちに来た。

「あら、思ったより早かったわね…まあ、早いだけ、いいわね。とりあえず、お疲れ様。グループリーダーの倉賀野 聖良（くらがの せら）さん、星見 月夜（ほしみ つくよ）さん、八住 伊月（やすみ いつき）さん、白嶋 愛理（しらしま あいり）さん、芦川 ゆきの（あしかわ ゆきの）さんですね。今日はよろしく願います。」

「こちらこそ、今日はよろしく願います。」

「これで、全員集合ですね。改めまして、全員、よろしく願います。」

あかりは全員に改めて、軽く挨拶をした。

「そうしたら、軽くオリエンテーションでもしたいけど、全員が入れる場所がいいわね…」

集まったメンバーが合計、132人もいるのだ…あまりにも多すぎて、場所を埋めて

いる…

「だったら、近くに私のレッスンスタジオがあるんだけど、使う？そこなら、広いし。」

「由綺さん、使ってもいいのですか？そのレッスンスタジオ、何か予定があるのでは？」

あかりは由綺さんに聞いた。確かに、私達みたいな人が来ても大丈夫なのだろうか？

「今日は大丈夫。だから、遠慮しなくていいよ。」

「分かりました。ありがとうございます。」

あかりは由綺さんにお礼を言った。本人の許可があるなら、大丈夫みたいだ。

「じゃあ、行こっか？」

「了解です。」

由綺さんはそう言った後、私達は承諾して、近くのレッスンスタジオに向かったのだった。

それからしばらく歩いた後、私達は由綺さんが行っているレッスンスタジオに到着した。

「そうしたら、本題に入る前に：自己紹介、ここを始めませんか？」

あかりは私達にそう提案してきた。

「そうですね！そうした方がいいですね！」

私達はすぐに賛同した。

「そうしたら、雪菜さんからいいですか？」

「わ、私ですか？」

あかりは雪菜さんにそう言った。

「分かりました。皆さん、初めまして。峰城大学政経学部3年生の小木曾 雪菜です。高校の時に軽音楽同好会でボーカルやっていました。現在は所属していません。よろしくお願ひします。」

(小木曾以外 拍手)

「じゃあ、次は、かずさ。よろしくね。」

雪菜さんはかずささんに言った。

「わ、私か？分かった。皆さん、初めまして。同じく、峰城大学文学部3年生の冬馬 かずさ(とうま かずさ)です。高校の時に軽音楽同好会でキーボードやっていました。現在は所属していません。よろしくお願ひします。」

(冬馬以外 拍手)

「次、依緒。いい?」

かずささんは依緒さんに言った。

「私?分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、峰城大学政経学部3年生の水沢 依緒(みずさわ いお)です。高校の時にバスケットボール部で部長やっていました。現在は所属していません。よろしく願います。」

(水沢以外 拍手)

「千晶。次、いい?」

依緒さんは千晶さんに言った。

「分かった。皆さん、初めまして。同じく、峰城大学文学部3年生の和泉 千晶(いずみ

ちあき)です。演劇部です。よろしく願います。」

(和泉以外 拍手)

「次は、朋。お願いね。」

千晶さんは朋さんに言った。

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、峰城大学商学部2年生の柳原 朋(やなぎ はら とも)です。軽音楽同好会ですボーカルをやっていました。現在は放送部に所属しています。よろしく願います。」

(柳原以外 拍手)

「次は、小春ちゃん。お願いね。」

朋さんは小春さんに言った。

「わ、分かりました。皆さん、初めまして。峰城大学付属高校3年生の杉浦 小春（すぎうら こはる）です。テニス部で、副主将でした。現在は受験のため、所属していません。よろしくお願いします。」

（杉浦以外 拍手）

「じゃあ、美穂子。次、お願い。」

小春さんは美穂子さんに言った。

「分かった。皆さん、初めまして。同じく、峰城大学付属高校3年生の矢田 美穂子（やだ みほこ）です。小春ちゃんの親友です。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

（矢田以外 拍手）

「じゃあ、早百合。次、お願い。」

美穂子さんは早百合さんに言った。

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、峰城大学付属高校3年生の清水 早百合（しみず さゆり）です。小春と美穂子の親友です。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

(清水以外 拍手)

「じゃあ、亜子。次、お願い。」

早百合さんは亜子さんに言った。

「わ、分かった。皆さん、初めまして。同じく、峰城大学付属高校3年生の園田 亜子(そのだ あこ)です。小春、美穂子、早百合の親友です。部活は所属していません。よろしくお願ひします。」

(園田(あ)以外 拍手)

「じゃあ、麻理さん。次、お願ひします。」

亜子さんは麻理さんに言った。

「分かりました。皆さん、初めまして。編集社で編集長を務めています。風岡 麻理(かざおか まり)です。仕事が趣味です。よろしくお願ひします。」

(風岡以外 拍手)

「じゃあ、次は、和美さん。お願ひします。」

麻理さんは和美さんに言った。

「分かりました。皆さん、初めまして。飲食店で仕事しています。中川 和美(なかがわ かずみ)です。小春さんと同じ飲食店で働いています。よろしくお願ひします。」

(中川以外 拍手)

「それじゃあ、由綺さん。お願いします。」

「分かりました。皆さん、初めまして。悠風大学文学部2年生の森川 由綺です。アイドル活動しています。よろしくお願いします。」

(森川以外 拍手)

「じゃあ、理奈。お願い。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、悠風大学文学部2年生の緒方 理奈（おがたりな）です。同じく、アイドル活動しています。よろしくお願いします。」

(緒方以外 拍手)

「じゃあ、次は、はるか。お願い。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、悠風大学文学部2年生の河島 はるか（かわしま はるか）です。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

(河島以外 拍手)

「じゃあ、美咲さん。お願いします。」

「分かった。皆さん、初めまして。同じく、悠風大学政経学部2年生の澤倉 美咲（さわくら みさき）です。演劇部です。よろしくお願いします。」

(澤倉以外 拍手)

「じゃあ、小夜子さん。お願いね。」

「分かりました。皆さん、初めまして。同じく、悠風大学文学部1年生の如月 小夜子（きさらぎ さよこ）です。由綺や理奈と同じく、アイドル活動しています。よろしくお願ひします。」

（如月以外 拍手）

「じゃあ、まなちゃん。次、お願ひね。」

「分かりました。皆さん、初めまして。蛍ヶ崎高校3年生の観月 まな（みずき まな）です。由綺さんの親戚です。部活は所属していません。よろしくお願ひします。」

（観月以外 拍手）

「じゃあ、弥生さん。次、お願ひします。」

「分かりました。皆さん、初めまして。森川 由綺、緒方 理奈、如月 小夜子のマネージャーの篠塚 弥生（しのづか やよい）です。よろしくお願ひします。」

（篠塚以外 拍手）

「では、めのうさん。お願ひします。」

「分かりました。皆さん、初めまして。ミュージシャン活動しています、松山 めのう（まつやま めのう）です。観月 まなの姉です。よろしくお願ひします。」

（松山以外 拍手）

「じゃあ、瑞希さん。お願ひします。」

「分かりました。皆さん、初めまして。音美大学美術学部1年生の高瀬 瑞希です。テニス部に所属しています。コスプレもたまにします。よろしくお願ひします。」

(高瀬以外 拍手)

「じゃあ、由宇。お願ひ。」

「分かった。皆さん、初めまして。音美大学美術学部1年生の猪名川 由宇(いながわ ゆう)です。神戸出身です。同人誌書いています。よろしくお願ひします。」

(猪名川以外 拍手)

「次。詠美。お願ひ。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。音美高校3年生の大庭 詠美(おおば えいみ)です。由宇と同じく、同人誌書いています。よろしくお願ひします。」

(大庭以外 拍手)

「じゃあ、彩。次、お願ひ。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、音美高校3年生の長谷部 彩(はせべ あや)です。同じく、同人誌書いています。画材道具の仕事もしています。よろしくお願ひします。」

(長谷部以外 拍手)

「じゃあ、玲子さん。お願ひします。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。音美大学美術学部1年生の芳賀 玲子（はが れいこ）です。サークル「チーム一喝」のリーダーで、同人誌書いています。よろしくお願ひします。」

（芳賀以外 拍手）

「じゃあ、美穂。お願ひね。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、音美大学美術学部1年生の星野 美穂（ほしの みほ）です。玲子と同じサークルに入っていて、同じく、同人誌書いています。よろしくお願ひします。」

（星野以外 拍手）

「夕香。次、お願ひね。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、音美大学美術学部1年生の月城 夕香（つきしろ ゆか）です。玲子、美穂と同じサークルに入っていて、同じく、同人誌書いています。よろしくお願ひします。」

（月城以外 拍手）

「まゆ。次、お願ひね。」

「皆さん、初めまして。同じく、音美大学美術学部1年生の夢路 まゆ（ゆめじ まゆ）です。玲子、美穂、夕香と同じサークルに入っていて、同じく、同人誌書いています。よ

ろしくお願いします。」

(夢路以外 拍手)

「じゃあ、千紗。お願いね。」

「分かりました。皆さん、初めまして。音美高校2年生の塚本 千紗（つかもと ちさ）です。印刷業の仕事をしています。よろしくお願いします。」

(塚本以外 拍手)

「すばる。お願いね。」

御影 すばる 「分かったのです。皆さん、初めまして。同じく、音美高校2年生の御影 すばる（みかげ すばる）です。同人誌書いています。よろしくお願いします。」

(御影（す）以外 拍手)

「南さん。お願いします。」

「分かりました。皆さん、初めまして。コミックイベントの営業スタッフをしています。牧村 南（まきむら みなみ）です。よろしくお願いします。」

(牧村以外 拍手)

「では、あさひさん。お願いします。」

「分かりました。皆さん、初めまして。音美高校3年生の桜井 あさひ（さくらい あさひ）です。アイドル活動しています。コミックイベントも出ています。よろしくお願い

します。」

(桜井以外 拍手)

「じゃあ、郁美ちゃん。お願いします。」

「分かりました。皆さん、初めまして。普田中学校（ふだちゅうがっこう）3年生の立川郁美（たちかわ いくみ）です。雄蔵という兄がいます。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

(立川以外 拍手)

「じゃあ、あかりさん。改めて、お願いします。」

「分かりました。改めまして、皆さん、初めまして。姉ヶ桜高校3年生の神岸 あかりです。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

(神岸以外 拍手)

「じゃあ、志保。お願いね。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、姉ヶ桜高校3年生の長岡 志保です。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

(長岡以外 拍手)

「じゃあ、智子。お願い。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、姉ヶ桜高校3年生の保科 智子（ほしな

ともこ)です。神戸出身です。クラス委員長を務めています。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

(保科以外 拍手)

「じゃあ、レミイ。お願いね。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、姉ヶ桜高校3年生のレミイ・クリストファー・ヘレン・宮内(みやうち)です。宮内レミイとも言います。日本とアメリカのハーフです。弓道部です。よろしくお願いします。」

(宮内以外 拍手)

「じゃあ、理緒。お願いね。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、姉ヶ桜高校3年生の雛山理緒(ひなやまりお)です。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

(雛山以外 拍手)

「じゃあ、綾香。お願いね。」

「皆さん、初めまして。西園寺女学園(さいおんじじよがくえん)の高校3年生の来栖川綾香(くるすがわ あやか)です。格闘技が好きです。部活も空手部とボクシング部を兼部しています。よろしくお願いします。」

(来栖川(あ)以外 拍手)

「じゃあ、葵。お願い。」

「分かりました。皆さん、初めまして。姉ヶ桜高校2年生の松原 葵（まつばら あおい）です。綾香さんと同じく、格闘技が好きです。部活は空手部です。よろしくお願いします。」

（松原以外 拍手）

「じゃあ、琴音。お願いね。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、姉ヶ桜高校2年生の姫川 琴音（ひめかわ ことね）です。函館出身で、超能力を持っています。格闘技も興味あります。部活は空手部のマネージャーをしています。よろしくお願いします。」

（姫川以外 拍手）

「では、好恵先輩。お願いします。」

「皆さん、初めまして。同じく、姉ヶ桜高校3年生の坂下 好恵（さかした よしえ）です。綾香、葵、琴音と同じく、格闘技が好きで、空手部部長です。よろしくお願いします。」

（坂下以外 拍手）

「では、芹香先輩。お願いします。」

「皆さん、初めまして。来栖大学（くるすだいがく）文学部1年生の来栖川 芹香（くる

すがわ せりか)です。来栖川 綾香の姉です。占い好きです。部活はミステリー研究会に所属しています。よろしく願いします。」

(来栖川(せ)以外 拍手)

「では、フィールさん。お願いします。」

「分かりました。皆さん、初めまして。メイドロボットのHMX―11・フィールです。よろしく願いします。」

(フィール以外 拍手)

「じゃあ、マルチ。お願いね。」

「皆さん、初めまして。同じく、メイドロボットのHMX―12・マルチです。フィールの妹です。よろしく願いします。」

(マルチ以外 拍手)

「じゃあ、セリオ。お願い。」

「分かりました。皆さん、初めまして。同じく、メイドロボットのHMX―13・セリオです。フィール、マルチの妹です。よろしく願いします。」

(セリオ以外 拍手)

「では、このみさん。お願いします。」

「了解であります。皆さん、初めまして。妹ヶ桜高校1年生の柚原 このみです。部活

は所属していません。よろしくお願いします。」

(柚原以外 拍手)

「じゃあ、優お姉ちゃん。お願い。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、妹ヶ桜高校2年生の草壁 優季です。本名は高城 優季ですが、どちらで呼んでも構いません。部活は天文部です。よろしくお願
いします。」

(草壁以外 拍手)

「じゃあ、環さん。お願いします。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、妹ヶ桜高校3年生の向坂 環です。雄二と
いう弟がいます。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

(向坂以外 拍手)

「じゃあ、愛佳さん。お願いね。」

「分かりました。皆さん、初めまして。同じく、妹ヶ桜高校2年生の小牧 愛佳です。ク
ラス委員長を務めています。部活は文芸部で、図書委員に所属しています。よろしくお
願いします。」

(小牧(ま)以外 拍手)

「じゃあ、由真。お願いね。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、妹ヶ桜高校2年生の長瀬 由真です。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

(長瀬以外 拍手)

「じゃあ、花梨。お願い。」

「了解。皆さん、初めまして。同じく、妹ヶ桜高校2年生の笹森 花梨です。ミステリーと超常現象が好きです。部活はミステリー研究部です。よろしくお願いします。」

(笹森以外 拍手)

「じゃあ、るー子。お願いします。」

「分かった。皆さん、初めまして。同じく、妹ヶ桜高校2年生のルーシー・マリア・ミソラです。みんなからは『るー子』と呼ばれています。アメリカのカリフォルニア州出身です。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

(ルーシー以外 拍手)

「じゃあ、美緒。お願い。」

「分かりました。皆さん、初めまして。同じく、妹ヶ桜高校2年生の羽根崎 美緒です。詩が好きです。部活は放送部です。よろしくお願いします。」

(羽根崎以外 拍手)

「じゃあ、玲於奈。お願い。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、妹ヶ桜高校2年生の桜崎 玲於菜です。桜崎家は、向坂家の分家にあたります。その為、環お姉様は義理の姉みたいなものです。部活は音楽部です。よろしくお願いします。」

(桜崎以外 拍手)

「じゃあ、薫子。お願い。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、妹ヶ桜高校2年生の雪川 薫子です。部活は音楽部です。よろしくお願いします。」

(雪川以外 拍手)

「じゃあ、かすみ。お願い。」

「分かった。皆さん、初めまして。同じく、妹ヶ桜高校2年生の秋山 かすみです。部活は音楽部です。よろしくお願いします。」

(秋山以外 拍手)

「じゃあ、珊瑚ちゃん。お願い。」

「了解やで。皆さん、初めまして。同じく、妹ヶ桜高校1年生の姫百合 珊瑚です。大阪出身で、コンピューターが得意です。部活はコンピューター部です。よろしくお願いします。」

(姫百合(さ)以外 拍手)

「じゃあ、瑠璃ちゃん。お願いな。」

「了解や。皆さん、初めまして。同じく、妹ヶ桜高校1年生の姫百合 瑠璃です。姫百合 珊瑚の双子の妹です。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

(姫百合(る) 以外 拍手)

「じゃあ、郁乃。お願いな。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、妹ヶ桜高校1年生の小牧 郁乃です。小牧 愛佳の妹です。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

(小牧(い) 以外 拍手)

「じゃあ、ちえさん。お願いします。」

「了解つす。皆さん、初めまして。西園寺女学園の高校1年生の吉岡 ちえ(よしかわちえ)です。よろしくお願いします。」

(吉岡以外 拍手)

「じゃあ、ちやる。お願いつす。」

「分かった。皆さん、初めまして。同じく、西園寺女学園の高校1年生の山田 みちる(やまだ みちる)です。ちえ、このみから『ちやる』と呼ばれており、私とこのみもちえのことは『よっち』と呼んでいます。家が飲食店を務めています。よろしくお願いします。」

(山田以外 拍手)

「じゃあ、菜々子ちゃん。お願いします。」

「分かりました。皆さん、初めまして。菜桜小学校(なざくらしょうがっこう)4年生の島山 菜々子(しまやま ななこ)です。よろしくお願いします。」

(島山以外 拍手)

「じゃあ、すみれ。お願い。」

「分かった。皆さん、初めまして。同じく、菜桜小学校4年生の藤川 すみれ(ふじかわ すみれ)です。よろしくお願いします。」

(藤川以外 拍手)

「じゃあ、ひとみ。お願い。」

「分かった。皆さん、初めまして。同じく、菜桜小学校4年生の黒崎 ひとみ(くろさき ひとみ)です。よろしくお願いします。」

(黒崎以外 拍手)

「では、ささら先輩。お願いします。」

「分かりました。皆さん、初めまして。妹ヶ桜高校3年生の久寿川 ささらです。生徒会長を務めています。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

(久寿川以外 拍手)

「では、まーりゃん先輩。お願いします。」

「分かった。皆さん、初めまして。声描専門学校（せいびょうせんもんがっこう）1年生の朝霧 麻亜子（あさぎり まあこ）です。みんなから『まーりゃん先輩』と呼ばれています。妹ヶ桜高校の卒業生です。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

（朝霧以外 拍手）

「では、イルファ。次をお願いします。」

「分かりました。皆さん、初めまして。メイドロボットのHMX—17a・イルファです。よろしくお願いします。」

（イルファ以外 拍手）

「では、ミルファちゃん。お願いします。」

「分かった。皆さん、初めまして。同じく、メイドロボットのHMX—17b・ミルファです。イルファの妹です。よろしくお願いします。」

（ミルファ以外 拍手）

「じゃあ、シルファ。お願い。」

「了解です。皆さん、初めまして。同じく、メイドロボットのHMX—17c・シルファです。イルファ、ミルファの妹です。よろしくお願いします。」

(シルファ以外 拍手)

「じゃあ、聖良さん。お願いします。」

「分かりました。皆さん、初めまして。群馬県で倉賀野グループを務めています、倉賀野聖良です。親も企業していますが、親とは訳があつて、対立しています。間ノ島学園の卒業生です。在学時代は月華会という生徒会の会長を務めていました。よろしくお願ひします。」

(倉賀野以外 拍手)

「では、陽姫さん。お願いします。」

「分かった。皆さん、初めまして。同じく、群馬県で天神平グループを務めています、天神平 陽姫(てんじんだいら はるひ)です。本名は神平(かみだいら) 陽姫ですが、どちらで呼んでも構いません。聖良と同じく、間ノ島学園の卒業生です。在学時代は天道会という生徒会の会長を務めていました。天道会に所属していた人からは『姫』と呼ばれていました。よろしくお願ひします。」

(天神平以外 拍手)

「では、ゆづき。次、お願ひする。」

「分かった。皆さん、初めまして。同じく、群馬県のラプンツェルという喫茶店で務めています、駒形 ゆづき(こまがた ゆづき)です。聖良さんと陽姫さんと同じく、間ノ

島学園の卒業生です。在学時代は月華会の書記を務めていました。よろしくお願いします。」

(駒形以外 拍手)

「じゃあ、歌奈先輩。お願いします。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、群馬県のテレビ局でお天気お姉さんを務めています、神流 歌奈(かな)です。聖良さん、陽姫ちゃん、ゆづきさんと同じく、間ノ島学園の卒業生です。在学時代は天道会の副会長を務めていました。よろしくお願いします。」

(神流以外 拍手)

「じゃあ、美智。お願いね。」

「了解。皆さん、初めまして。同じく、群馬県の会社に務めています、幸塚 美智(こうづか みち)です。大智という弟がいます。聖良さん、姫、ゆづきっち、歌奈さんと同じく、間ノ島学園の卒業生です。在学時代は天道会の会計を務めていました。みんなからよろしくお願いします。」

(幸塚以外 拍手)

「じゃあ、兎姫っち。お願いな。」

「分かりました。皆さん、初めまして。間ノ島学園の高校2年生、月夜野 兎姫(つきよ

の うさぎ) です。地元の群馬でアイドルしています。天道会の会長です。よろしくお願ひします。」

(月夜野以外 拍手)

「じゃあ、アリスティアちゃん。お願ひね。」

「分かつたわ。皆さん、初めまして。同じく、間ノ島学園の高校2年生、アリスティア・ヴァレンベリ・華蔵寺(けぞうじ)です。家は製薬会社をやっています。月華会の会長です。よろしくお願ひします。」

(アリスティア以外 拍手)

「じゃあ、たてはさん。お願ひします。」

「分かりました。皆さん、初めまして。同じく、間ノ島学園の高校2年生、館林 たては(たてばやし たては)です。ゆづきさんと同じく、ラプンツェルという喫茶店で働いています。天道会の会計です。よろしくお願ひします。」

(館林以外 拍手)

「じゃあ、真白さん。お願ひね。」

「分かりました。皆さん、初めまして。同じく、間ノ島学園の高校1年生、栗生 真白(くりゆう ましろ)です。月華会の副会長です。花を育てることが趣味です。よろしくお願ひします。」

(栗生以外 拍手)

「では、杏奈先輩。お願いします。」

「了解。皆さん、初めまして。同じく、間ノ島学園の高校2年生、綿貫 杏奈(わたぬき あんな)です。学校で選挙が行われるときは選挙DJを務めています。よろしくお願
いします。」

(綿貫以外 拍手)

「では、桐香先輩。お願いします。」

「分かった。皆さん、初めまして。同じく、間ノ島学園の高校3年生、霧積 桐香(きり
づみ きりか)です。家は病院経営をやっています。天道会の副会長です。よろしくお
願いします。」

(霧積以外 拍手)

「では、氷織さん。お願いします。」

「分かりました。皆さん、初めまして。神扇学園の高校1年生、聖代橋 氷織です。埼玉
でマシユマロ・クロールという喫茶店の副店長を務めています。よろしくお願いま
す。」

(聖代橋以外 拍手)

「では、めるさん。お願いします。」

「了解。皆さん、初めまして。同じく、神扇学園の高校2年生、古倉 める（ふるくらめる）です。マシユマロ・クロールの副代表を務めています。よろしく願います。」

（古倉以外 拍手）

「じゃあ、シヨコラちゃん。お願い。」

「分かりました。皆さん、初めまして。同じく、神扇学園の中学3年生、シヨコラ・ネージュです。マシユマロ・クロールの店員も務めています。よろしく願います。」

（シヨコラ以外 拍手）

「じゃあ、小町さん。願います。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。村崎 小町（むらさき こまち）です。神扇学園の卒業生です。家は病院経営や八百屋経営をしています。私もマシユマロ・クロールの店員を務めています。よろしく願います。」

（村崎以外 拍手）

「では、あいらさん。願います。」

「分かった。皆さん、初めまして。森都 あいら（もりと あいら）です。小町さんと同じく、神扇学園の卒業生です。家は公務員関係をしています。私もマシユマロ・クロールの店員を務めています。よろしく願います。」

（森都以外 拍手）

「では、花音さん。次、お願いします。」

「分かりました。皆さん、初めまして。同じく、神扇学園の高校2年生、春日部 花音（かすかべ かのん）です。マシユマロ・クロールの代表を務めています。よろしくお願ひします。」

（春日部以外 拍手）

「じゃあ、汐ちゃん。お願い。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、神扇学園の高校3年生、朝霞 汐（あさか うしお）です。マシユマロ・クロールの店長を務めています。よろしくお願ひします。」

（朝霞以外 拍手）

「じゃあ、紗々ちゃん。次、お願いね。」

「分かりました。皆さん、初めまして。同じく、神扇学園の高校1年生、皇鈴 紗々（みすず ささ）です。絵本作家をしています。また、マシユマロ・クロールの店員も務めています。よろしくお願ひします。」

（皇鈴以外 拍手）

「じゃあ、ライコネンさん。お願ひします。」

「了解。皆さん、初めまして。同じく、神扇学園の高校2年生、礼羽 ライコネン（らい

はらいこねん)です。みんなからは『ライライ』と呼ばれています。日本とフィンランドのハーフです。15歳の時に、パティシエコンクールで優勝しました。マシユマロ・クロールのサブパティシエリーダーを務めています。よろしくお願いします。」

(礼羽以外 拍手)

「じゃあ、しずかちゃん。お願い。」

「分かりました。皆さん、初めまして。同じく、神扇学園の小学1年生、川越 しずかです。太一という兄がいます。家は酒屋を経営しています。私もマシユマロ・クロールのお手伝いしています。よろしくお願いします。」

(川越以外 拍手)

「では、城子さん。お願いします。」

「了解。皆さん、初めまして。川島 城子(かわしま じょうこ)です。小町さん、あいらさんと同じく、神扇学園の卒業生です。みんなからは『JC』と呼ばれています。私もマシユマロ・クロールの店員を務めています。よろしくお願いします。」

(川島以外 拍手)

「では、ゆきのさん。お願いします。」

「分かりました。皆さん、初めまして。垣楠学園の高校3年生、芦川 ゆきのです。生徒会、学園生活相互研究会に所属していましたが、受験のため、所属していません。よ

ろしくお願いします。」

(芦川以外 拍手)

「じゃあ、三咲さん。お願いします。」

「分かった。皆さん、初めまして。同じく、垣楠学園の高校2年生、春日野 三咲（はるひの みさき）です。テニス部と学園生活相互研究会に所属しています。よろしくお願ひします。」

(春日野以外 拍手)

「じゃあ、奈々ちゃん。お願いね。」

「分かった。皆さん、初めまして。同じく、垣楠学園の高校1年生、住吉 奈々（すみよし なな）です。購買部と学園生活相互研究会に所属しています。よろしくお願ひします。」

(住吉以外 拍手)

「しずく。お願い。」

「わ、分かりました。皆さん、初めまして。同じく、垣楠学園の高校1年生、御影 しずくです。放送部と学園生活相互研究会に所属しています。よろしくお願ひします。」

(御影（し）以外 拍手)

「じゃ、じゃあ、園田先輩。お願いします。」

「分かった。皆さん、初めまして。同じく、垣楠学園の高校3年生、園田 かすみです。購買部部长と学園生活相互助研究会の元会長です。現在は受験のため、所属していません。よろしく願います。」

(園田(か)以外 拍手)

「では、麻耶。頼む。」

「分かった。皆さん、初めまして。同じく、垣楠学園の高校2年生、塚口 麻耶(つかぐち まや)です。学園生活相互助研究会に所属しています。よろしく願います。」

(塚口以外 拍手)

「じゃあ、ちはるさん。願います。」

「分かりました。皆さん、初めまして。江子田学園の高校2年生、高幡 ちはるです。生徒会会長です。また、今期のクリスマス委員会委員長も務めていました。よろしく願います。よろしく願います。」

(高幡以外 拍手)

「じゃあ、夕美。願いな。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、江子田学園の高校2年生、長津田 夕美(ながつた ゆみ)です。クラス委員長です。今期のクリスマス委員会の会計を務めていました。よろしく願います。」

(長津田以外 拍手)

「じゃあ、彩乃先輩。お願いします。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、江子田学園の高校3年生、梶矢 彩乃（かじや あやの）です。今期のクリスマス委員会の副委員長を務めていました。よろしくお願いします。」

(梶矢以外 拍手)

「じゃあ、えりちゃん。お願いね。」

「わ、分かりました。皆さん、初めまして。同じく、江子田学園の高校1年生、宮前 えり（みやまえ えり）です。風紀委員所属です。クリスマス委員会の書記を務めていました。よろしくお願いします。」

(宮前以外 拍手)

「では、若菜先輩。お願いします。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、江子田学園の高校3年生、月見 若菜（つきみ わかな）です。前期の生徒会副会長、クリスマス委員会の副委員長を務めていました。よろしくお願いします。」

(月見以外 拍手)

「じゃあ、みつばさん。お願いします。」

「分かりました。皆さん、初めまして。同じく、江子田学園の高校1年生、渋谷 みつば（しづや みつば）です。放送部に所属しています。クリスマス委員会のサポートもしています。よろしくお願いします。」

（渋谷以外 拍手）

「では、朋子先輩。お願いします。」

「分かった。皆さん、初めまして。同じく、江子田学園の高校3年生、溝口 朋子（みぞぐち ともこ）です。前期生徒会会長、クリスマス委員会の委員長を務めていました。よろしくお願いします。」

（溝口以外 拍手）

「では、月夜さん。お願いします。」

「分かりました。皆さん、初めまして。有杜美術学園の高校2年生、星見 月夜です。絵を描くことが特に好きで、それで賞も取りました。よろしくお願いします。」

（星見以外 拍手）

「じゃあ、梓。お願い。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、有杜美術学園の高校2年生、棗 梓（なつめ あずさ）です。彫刻の作業が特に好きで、それで賞も取りました。よろしくお願いします。」

(棗以外 拍手)

「じゃあ、まどか先輩。お願いします。」

「分かった。皆さん、初めまして。同じく、有杜美術学園の高校3年生、小鳥遊 まどか(たかなし まどか)です。パソコンでの作業が特に好きで、卒業制作で、シヨートムービーを作っています。よろしくお願いします。」

(小鳥遊以外 拍手)

「じゃあ、有紗。お願い。」

「分かりました。皆さん、初めまして。同じく、有杜美術学園の高校1年生、藍川 有紗(あいかわ ありさ)です。日本とフィンランドのクォーターです。美術は絵を描くことが好きです。よろしくお願いします。」

(藍川以外 拍手)

「じゃあ、ひじりさん。お願いします。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。有杜美術学園の中学3年生、狩野 ひじり(かのひじり)です。月夜先輩と同じく、絵を描くことが特に好きで、賞も取りました。よろしくお願いします。」

(狩野以外 拍手)

「じゃあ、伊月さん。お願いします。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。望花学園の高校2年生、八住 伊月です。水泳部に所属していて、全国大会にも出場しました。よろしく願います。」

(八住以外 拍手)

「じゃあ、葵。お願いね。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、望花学園の高校2年生、白石 葵(しらいし あおい)です。部活は所属していません。よろしく願います。」

(白石(あ)以外 拍手)

「じゃあ、このみ。お願いね。」

「分かりました。皆さん、初めまして。葉原学園(はばらがくえん)の高校1年生、瀬戸 このみです。修司という義兄がいます。部活は所属していません。よろしく願います。」

(瀬戸以外 拍手)

「じゃあ、天音さん。お願いします。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、葉原学園の高校3年生、兵藤 天音(ひょうどう あまね)です。家は柔道の道場をやっています。よろしく願います。」

(兵藤以外 拍手)

「じゃあ、つばめさん。お願いします。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。映像制作会社に勤めています、白石 つばめです。葵の姉です。望花学園の卒業生です。よろしく願います。」

(白石(つ) 以外 拍手)

「じゃあ、しのぶさん。願います。」

「分かりました。皆さん、初めまして。望花学園の高校2年生、冬木 しのぶ(ふゆきしのぶ)です。伊月の親友です。水泳部のマネージャーをしています。よろしく願います。」

(冬木以外 拍手)

「じゃあ、奏撫さん。願います。」

「分かりました。皆さん、初めまして。光葉台学園の高校2年生、五ヶ谷 奏撫です。部活は所属していません。よろしく願います。」

(五ヶ谷(か) 以外 拍手)

「じゃあ、お姉ちゃん。願います。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、光葉台学園の高校3年生、五ヶ谷 羽耶音(いつがや はやね)です。奏撫の姉です。テニス部に所属しています。よろしく願います。」

(五ヶ谷(は) 以外 拍手)

「じゃあ、咲希ちゃん。お願いね。」

「分かりました。皆さん、初めまして。同じく、光葉台学園の高校2年生、双葉 咲希（ふたば さき）です。クラス委員長で、テニス部に所属しています。よろしくお願いします。」

（双葉（さ）以外 拍手）

「じゃあ、唯梨。お願いね。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、光葉台学園の高校1年生、双葉 唯梨（ふたば ゆいり）です。本名は支倉（はせくら） 唯梨ですが、どちらで呼んでも構いません。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

（双葉（ゆ）以外 拍手）

「じゃあ、まゆりちゃん。お願いね。」

「分かった。皆さん、初めまして。同じく、光葉台学園の高校1年生、立石 まゆりです。総司という兄がいます。趣味は友達作りです。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

（立石以外 拍手）

「じゃあ、千桜さん。お願いします。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。桃櫻井学園の高校2年生、奈良原 千桜です。桜の

写真を撮ることが好きです。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

(奈良原以外 拍手)

「じゃあ、陽子先輩、お願いします。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、桃櫻井学園の高校3年生、二上 陽子（ふたがみ ようこ）です。生徒会会長を務めています。よろしくお願いします。」

(二上以外 拍手)

「じゃあ、結希さん。お願いね。」

「分かった。皆さん、初めまして。同じく、桃櫻井学園の高校2年生、八重樫 結希（やえがし ゆうき）です。ゲームと少年漫画が趣味です。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

(八重樫以外 拍手)

「じゃあ、純恋さん。次、頼む。」

「分かりました。皆さん、初めまして。同じく、桃櫻井学園の高校1年生、穂崎 純恋（ほさき すみれ）です。趣味は料理です。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

(穂崎（す）以外 拍手)

「じゃあ、理恵先輩。お願いします。」

「分かった。皆さん、初めまして。同じく、桃櫻井学園の高校2年生、小松 理恵（こまつ りえ）です。千桜の親友です。部活は所属していません。よろしく願います。」

（小松以外 拍手）

「では、芽衣先輩。願います。」

「分かりました。皆さん、初めまして。同じく、桃櫻井学園の高校3年生、神代 芽衣（かみしろ めい）です。生徒会副会長を務めています。よろしく願います。」

（神代以外 拍手）

「じゃあ、愛奈ちゃん。願いなね。」

「分かりました。皆さん、初めまして。葉桜幼稚園（はざくらようちえん）年長組の穂崎 愛奈（ほさき まな）です。純恋の妹です。よろしく願います。」

（穂崎（ま）以外 拍手）

「では、愛理さん。願いますですの。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。四季創学園の高校2年生、白嶋 愛理です。今の学校は2学期になったときに転校してきました。部活は所属していません。よろしく願います。」

（白嶋以外 拍手）

「じゃあ、ゆず。願いなね。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、四季創学園の高校2年生、宮森 ゆず（みやもり ゆず）です。料理部に所属しています。よろしくお願いします。」

（宮森以外 拍手）

「じゃあ、楓先輩。お願いします。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、四季創学園の高校3年生、神楽 楓（かぐら かえで）です。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

（神楽以外 拍手）

「じゃあ、つづりさん。お願いします。」

「分かりました。皆さん、初めまして。同じく、四季創学園の高校1年生、秋月 つづり（あきづき つづり）です。趣味は友達作りです。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

（秋月以外 拍手）

「じゃあ、いちか先輩。お願いします。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、四季創学園の高校2年生、小野寺 いちか（おのでら いちか）です。ゆずの親友です。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

（小野寺以外 拍手）

「じゃあ、陽菜子。最後、お願いします。」

「分かったわ。皆さん、初めまして。同じく、四季創学園の高校1年生、春河 陽菜子（はるかわ ひなこ）です。つづりの親友です。部活は料理部です。よろしくお願いします。」

（春河以外 拍手）

「これで、全員、自己紹介が終わったね。本題に入る前に何か質問ある人、いる？」

「あかりが全員の自己紹介が終わった後、質問してきた。」

「じゃあ、私から質問いいかしら？」

「私は気になっていることがあったので、質問した。」

「姉妹を除いて、名字が同じ人と名前が同じ人がいるけど、困惑はしないの？」

「そう。園田（亜子とかすみ）、かわしま（河島と川島）、みさき（美咲さんと三咲）、まな（観月と穂崎）、ちき（塚本と奈良原）、御影（すばるとしずく）、ともこ（保科と溝口）、葵（松原と白石）、このみ（柚原と瀬戸）、ゆうき（草壁と八重樫）、かすみ（秋山と園田）、すみれ（藤川と穂崎）が該当するのだ。」

「そうね…該当する人はどうするの？」

「あかりも気になっていたらしく、該当する人に聞いた。」

「私だと、両方当てはまるからな…」

唯一、両方に該当する、園田 かすみさんがそう言った。

「私が園ちゃんって言うてるから、大丈夫じゃない？名前の方はかすみんって呼べばどうにかなりそうだし。その場合、もう片方がなんて言うてるかによるけど…」

「私の方は亜子って呼んでるので、大丈夫です。」

「私の方もかすみって呼んでるので、大丈夫です。」

ゆきのさん、小春さん、玲於奈がそう答えたので、園田 かすみ問題は解決したようだ。

「穂崎さんは下の名前が2人かぶっている人けど、穂崎 愛奈さんは愛奈ちゃん、藤川 すみれさんはすみれちゃんって呼べば問題ないし…それで大丈夫？」

あかりは観月さん、藤川さん、穂崎姉妹に聞いた。

「はい。大丈夫です。」

4人は承諾した。これで、まな、すみれ問題も解決した。

「かわしまさんとみかげさんは名前で、みさきさん、ちささん、ともこさん、あおいさん、このみちゃん、ゆうきさんは名字で呼べば、大丈夫かな？」

あかりは残りの該当する人に聞いた。

「はい。大丈夫です。」

残りの該当する人達は承諾した。これで全て解決した。

「私はこれで大丈夫よ。」

私はあかりにそう言った。

「分かったわ。あつ、私からーついい?」

あかりはそう言つて、みんなに質問した。

「こんなこと言つた後で申し訳ないんだけど、ここから先は、親友になつた感じで呼ばない?」

あかりはみんなに聞いた。

「いいですねー。そうしましょう!」

全員、賛同した。

「分かったわ。それじゃあ、本題に入りましょう。」

あかりはそう言つた。その言葉に全員、頷いた。

「今回、集まつてもらつた件だけど、曾田 光輔のことよ。知っている、会っている人っている?」

あかりがそう言うと、全員が手を挙げた。

「全員知つているし、会つているんだ…その中で、幼馴染の方つている?」

あかりがそう言つた後、あかりと私、(柚)このみ、優季も含めて、依緒、由綺、はるか、美智、奈々、彩乃、有紗、白石姉妹、(瀬)このみ、天音、五ヶ谷姉妹、双葉(ゆ)、

まゆり、結希、ゆずが手を挙げた。

「私も含めて21人ね…思っていたよりも多いね…何か聞いている？私は浩之ちゃん、環、柚原ちゃん、優季は貴明君と集まるって事以外は聞いていないんだ…」

あかりはそう言った。すると、

「だったら、私もそうだよ。春希も会いに行くって言っていたし。」

「私も。冬弥君も会いに行くって言っていた。」

「私もだ。大智、会いに行くって言っていたな。」

「私もです。茂、会いに行くって言っていた。」

「私も市生が会いに行くって言っていた。」

「私も真さんが会いに行くって言っていました。」

「私も修司が会いに行くって言っていた。」

「私もお兄ちゃんが会いに行くって言っていた。」

「私もソウ君が会いに行くって言っていた。」

「私もお兄さんが会いに行くって言っていた。」

「私もお兄ちゃんが会いに行くってくるっていった。」

「私もハルが会いに行くってくるって言っていたな。」

「私も諒一君が会いに行くってくるって言っていた。」

次から次へと光輔の幼馴染達はそう言った。

「やっぱり…その後、何かあった？」

あかりがそう聞くと、全員が同じ答えを言った。

「その後…1回も彼を見ていなし、連絡も途絶えたのよ…」

「やっぱり…」

そう。その後、連絡が途絶えたのだ。

「しかも、大智のやつ、家にも帰ってこなかった…そして、部屋見に行ったら、大智の私物がほとんどなくなっていた…」

「あつ、それ、私もそうだった。修司の私物がほぼなかったのよ。」

「私も。お兄ちゃんの私物がほぼなかった。何でだろう…」

「えっ？それは本当!？」

美智、(白) 葵、まゆりが言ったことに私達は驚いた。家にも帰らなかつたし、私物もなかつたって…あれ？

「白石さん。修司と一緒に住んでいるの？」

あかりは(白) 葵に聞いた。

「ええ。諸事情で私の家に住んでいるのよ。あと、私と修司はいとこよ。」

「そうなんだ…」

そこは意外だった。

「それにしても、私物をほぼ全て持って行ったなんて…まさか…」

「あり得るわね…まさかだけど…」

「まさか…そんなわけ…」

私とあかり、美智、(白)葵、まゆりは嫌な予感がした。そして、それを思っているのは私達だけじゃなかった。

「まさか…春希君まで、そんなことしてないよね…?」

「まさか…冬弥君まで、そんなことしてないよね…?」

「まさか…和樹君まで、そんなことしてないよね…?」

「まさか…和馬さんまで、そんなことしてないよね…?」

「まさか…九郎さんまで、そんなことしてないよね…?」

「まさか…亮君まで、そんなことしてないよね…?」

「まさか…市生君まで、そんなことしてないよね…?」

「まさか…真君まで、そんなことしてないよね…?」

「まさか…昌晴君まで、そんなことしてないよね…?」

「まさか…諒一君まで、そんなことしてないよね…?」

雪菜、由綺、瑞希、聖良、氷織、花音、ちはる、月夜、千桜、愛理も思っていたらし

く、一斉に言った。あれ？もしかして…

「もしかして、彼のことが好きなの？」

私とあかりは先ほど言った彼女達に聞いてみた。

「あつ、はい…」

先ほど言った彼女達は戸惑いながら答えた。

「やっぱり。私達もそうなの。あつ、あなたたちが思っている人とは違うから、安心してね。」

「そうなんですか？」

「ええ。私と志保、智子、レミイ、理緒、綾香、葵、琴音、好恵、芹香、フィール、マルチ、セリオは藤田 浩之君って人が好きなんだ。」

「私とこのみ、優季、愛佳、由真、花梨、るー子、美緒、玲於奈、薫子、かすみ、珊瑚、瑠璃、郁乃、ちえ、みちる、菜々子ちゃん、すみれちゃん、ひとみちゃん、ささら、まーりゃん、イルファ、ミルファ、シルファは河野 貴明君って人が好きなんだ。」

あかりと私はそう言った。

「多いわね…あつ、私とかずき、依緒、千晶、朋、小春、美穂子、早百合、亜子、麻理、和美は北原 春希君って人が好きなんだ。」

「ええ…私と理奈、はるか、美咲、小夜子、まな、弥生、めのうは藤井 冬弥君って人が

好きなんだ。」

「本当ね……私と由宇、詠美、彩、玲子、美穂、夕香、まゆ、千紗、すばる、南、あさひ、郁美は千堂、和樹君って人が好きなんだ。」

雪菜、由綺、瑞希は驚きながら言った。

「私と陽姫、ゆづき、歌奈、美智は帯刀、和馬さんって方が好きなんだ。」

「私とアリステイア、たては、真白、杏奈、桐香は幸塚、大智君って人が好きなんだ。」

「私とめる、シヨコラ、小町、あいらは山田、九郎さんって人が好きなんだ。」

「私と汐、紗々、ライライ、しずかちゃん、JCは宮原、亮君って人が好きなんだ。」

聖良、兎姫、氷織、花音は感慨深く言った。

「私と美咲、奈々、しずく、園ちゃんは元山、茂君って人が好きなんだ。」

「私と夕美、彩乃、えり、若菜、みつば、朋子は江田、市生君って人が好きなんだ。」

「私と梓、まどか、有紗、ひじりは浅間、真君って人が好きなんだ。」

「私と葵、このみ、天音、つばめ、しのぶは瀬戸、修司君って人が好きなんだ。」

「私とお姉ちゃん、咲希、唯梨、まゆりは立石、総司君って人が好きなんだ。」

「私と陽子、結希、純恋、理恵、芽衣、愛奈ちゃんは市原、昌晴君って人が好きなんだ。」

「私とゆず、楓、つづり、いちか、陽菜子は織原、諒一君って人が好きなんだ。」

ゆきの、ちはる、月夜、伊月、奏撫、千桜、愛理も感慨深く言った。

「そうなんだ。」

私とあかりは納得した。

「しかし、どうしよう？その考えが当たっているとしたら…」

あかりは怯えながら、そう言った。それは私達も思った。

「私、1回、お兄ちゃんが光輔兄ちゃんに会いに行くって言った日に連絡したんだけど…」

電話に出なかった…」

(瀬) このみは落ち込みながら、そう言った。

「このみ、そうなの？」

(白) 葵は(瀬) このみに聞いた。

「…うん。」

(瀬) このみの様子だと、深刻のようだ。こうなったら…

「光輔に会いに行くがてら、彼らに何とか会って、真実を聞いてみよう！」

私はみんなにそう言った。

「そうだね！」

全員が賛同した。

「じゃあ、遅くなったけど、これからもよろしくね！」

あかりはみんなにそう言った。

「よろしくお願いしますー！」

こうして、私達の出会いが始まった。

く次回に続く

女子が知りたくなかった衝撃の真実

俺達は東京都のある場所で、アイドル事務所のプロデューサーの仕事をしている。しかし、現在は担当のアイドルから離れ、所属していた事務所を自主退社して、今日からしばらくの休暇を取っている。自分達の事務所を設立して、アイドルの夢を叶える事務所を作りたいと思っているからだ。現在、東京にある喫茶店でその話をしている。

「アイドルの担当を離れ、退社してから1日経ちましたけど、忙しくない日々もたまにはいいものですね。武内さん。」

俺こと、赤羽 謙二（あかばね けんじ）は親友の武内 俊介（たけうち しゅんすけ）さんにそう言った。

「そうですね。赤羽さん。私達、本当に忙しかったですからね。」

武内さんも同じように言った。ちなみに、俺と武内さんは違う事務所にいたが、仕事の関係上、会うことが多く、公私の連絡も取っていた。そのため、お互いに自分の目的

を達成して、自分の役割を果たし、自主退社した時に連絡を取って、ここで落ち合うって事も話した。

「しかし、自分達の事務所を設立するって、なかなか難しいですね…」

俺は悩ましい感じで言った。

「自分達が事務所を設立したとしても、私達は、プロデューサーの仕事はしたいですね。社長は誰にするか、考えないといけないみたいですけどね…」

武内さんも同じように言った。実際、プロデューサーの仕事は続けたいのだ。

「そういえば、彼女達はどうしているのかな…？内緒で事務所を辞めていったけど…」

俺はふと気になった。実は彼女達には内緒で辞めていったのだ。

「そうですね…私も彼女達には内緒で事務所を辞めましたからね…」

武内さんも同じだったようだ。

「連絡は来てはいるんだけど…今、彼女達の仕事の邪魔はしたくないからな…」

実際、彼女達から連絡は来ていた。だが、俺は辞めたので、連絡が来ても返事はしてないのだ。

「それは、私も同じです。彼女達は現在の状態を保って欲しいですからね…」

武内さんも同じことを思っていたみたいで、そう言った。

「はあ…」

俺達は揃ってため息をついた。

私達はアイドルの仕事をしている。いつも側には、あの人がいる。でも、今日はいつもと違う。あの人がいない。連絡もない。何故だろう…プロデューサーさん…私達は事務所で待っています。早く来て下さい…私達の不安は増していくばかりだった…

「プロデューサーさん、なんで来ないんだろう…」

私こと、天海 春香（あまみ はるか）はプロデューサーさんが来ないことが気になっていった。

「本当…連絡しても、応答がないし…」

千早ちゃんこと、如月 千早（きささらぎ ちはや）ちゃんも同じ感じだった。

「どうしてだろう…ハニー、なんで…」

美希ちゃんこと星井 美希（ほしい みき）ちゃんも心配そうに言った。ちなみに、美

希ちゃんにはプロデューサーさんのことをハニーと呼んでいる。

「普通だったら、いつもはここにいるのにな…」

響ちゃんこと、我那覇 響（がなは ひびき）ちゃんも不思議そうに言った。

「プロデューサーさん、今日はどうしたのかな…」

真ちゃんこと、菊地 真（きくち まこと）ちゃんも心配そうだった。

「私も連絡したのですが、応答がありません…考えたくはないのですが…何かあったのでしょうか…?」

貴音さんこと、四条 貴音（しじょう たかね）さんも不安な感じでそう言った。

「風邪とかだったたら、いいけど、プロデューサーさんだったら、連絡来そうだし…」

やよいちゃんこと、高槻 やよい（たかつき やよい）ちゃんも連絡が来てないことを心配していた。

「そうですね…プロデューサーさん、どうしたのかな…」

雪歩ちゃんこと、萩原 雪歩（はぎわら ゆきほ）ちゃんも不安そうだった。

「兄ちゃん、今、どこにいるのかな…」

亜美ちゃんこと、双海 亜美（ふたみ あみ）ちゃんも不安そうに言った。

「本当。どこにいるんだろう。兄ちゃん…」

真美ちゃんこと、双海 真美（ふたみ まみ）ちゃんも心配そうに言った。ちなみに、

亜美ちゃんと真美ちゃんは双子の姉妹で、亜美が姉、真美が妹だ。また、プロデューサーさんのことを兄ちゃんと呼んでいる。

「私も連絡したんだけど、応答がなくて…」

律子さんこと、秋月 律子（あきづき りつこ）さんも連絡が来てないことを気にしていた。

「何もなければいいのですが…」

あずささんこと、三浦 あずさ（みうら あずさ）さんも心配そうに言った。

「プロデューサー、早く来て…」

伊織ちゃんこと、水瀬 伊織（みなせ いおり）ちゃんも不安だった。

「プロデューサーさん、今、どこにいるのかな…」

小鳥さんこと、音無 小鳥（おとなし ことり）さんも心配していた。すると…

カチャ…

「あつ、来たー!」

「いやあくすまんすまん。私だ。」

「なんだ〜社長ですか〜」

扉を開けて入ってきたのは、765プロダクション事務所の社長、高木 順二郎（たかぎ じゅんじろう）さんだ。プロデューサーさんだと思っていた私達はがっかりし

た。

「歓迎されてない!?!…まあ、そこは置いといて。えー、皆さんに赤羽 謙二プロデューサーの事について、お知らせしたいことがあります。」

「あつ、プロデューサーさん、赤羽 謙二つて言う人だったんだ。でも、お知らせつて!?!」
私達はここでプロデューサーさんの本名を初めて知った。

「誠に残念なのですが…赤羽 謙二プロデューサーが本日付で、我が事務所を自主退社した事をお知らせします。」

「えっ!?!」

このお知らせに私達は驚いた。

「というわけで、今後の活動なのですが…」

「ちよつと待って下さい!社長さん!」

社長は何か言おうとしていたけど、私はたまらず止めた。

「プロデューサーが辞めたつて、どういう事ですか!?!」

「ハニーが辞めたつて、信じられません!」

「プロデューサーが辞める理由なんて、見つからないよ!」

「プロデューサーが辞めるなんて、言っていないませんでしたよ!」

「プロデューサーさんが事務所を自主退社したなんて、私は到底、受け入れられない事で

すー！」

「プロデューサーさんが辞めたなんて、聞いてないよ！」

「なんで、プロデューサーさんは私達に内緒で、事務所を辞めたのですか!? 信じられませんか!」

「兄ちゃんが辞めたなんて、信じたくないよ！」

「そうだよ! 兄ちゃんが辞めたなんて、ありえないよ！」

「私もプロデューサーさんが辞めるなんて、聞いていません! どういう事ですか!」

「プロデューサーさんが辞めたなら、誰が私達をプロデューズしてくれるのですか!」

「そうだよ! 私達はプロデューサーのおかげでアイドルになったのよ! どうするの!」

「私もプロデューサーさんが辞めると連絡が来ていません! どういう事ですか!」

他の人もプロデューサーさんが辞めたことについて抗議した。

「えっと…彼自身の申し入れで…ここを去りたいと連絡が来ました。今後の活動として、新しいプロデューサーに秋月さんと音無さんをお願いしたいと…」

「私ですか…?」

そう言われても、私達の答えは決まっている。それは…

「絶対、嫌です!」

私達はきつぱりと断った。

「何故？」

「私達は赤羽プロデューサーがいいんです！」

「えっ…」

私達の言ったことに高木社長は驚いていた。こうなったら…

「こうなったら、みんなを探して、プロデューサーさんを説得しよう！」

私はみんなに提案した。

「おー！」

全員、賛成だった。

「あっ…」

そして、私達は事務所を飛び出していったのだった。社長はあつけにとられていた。

「みんな、赤羽君がいいんだね…やっぱり、彼女達は赤羽君に…」

「プロデューサーさん、なんで来ないんだろう…」

私こと、島村 卯月（しまむら うづき）はプロデューサーさんが来ないことを心配していた。

「本当…連絡しても、応答がないし…」

凜ちゃんこと、渋谷 凜（しぶや りん）ちゃんも連絡が来てないことを心配していた。

「どうしてだろう…プロデューサーさん、なんで…」

未央ちゃんこと、本田 未央（ほんだ みお）ちゃんも不安そうに言った。

「普通だったなら、もうここにいるのにな…」

みりあちゃんこと、赤城 みりあ（あかぎ みりあ）ちゃんも不思議そうに言った。

「プロデューサーさん、今日、どうしたのかな…」

莉嘉ちゃんこと、城ヶ崎 莉嘉（じょうがさき りか）ちゃんも不安そうだった。

「遅刻だといんだけどね…」

きらりちゃんこと、諸星 きらり（もろぼし きらり）さんも心配そうだった。

「プロデューサーさん、今、どこにいるんだろう…」

アーニャちゃんこと、アナスタシア（あなすたしあ）さんも不安げだった。

「連絡したんだけど、出ないんですね…プロデューサーさん、今日はどうしたのかな…」

美波さんこと、新田 美波（につた みなみ）さんも連絡が来てないことを気にしていた。

「連絡も来ないなんて…考えたくないけど…何かあったのかな…プロデューサーさん…」

蘭子ちゃんこと、神崎 蘭子（かんぎき らんこ）ちゃんも不安そうだった。

「プロデューサーさん、本当に何もなければいいけど…」

智絵里ちゃんこと、緒方 智絵里（おがた ちえり）ちゃんも心配していた。

「プロデューサーがずる休みするはずはないんだけどな…」

杏ちゃんこと、双葉 杏（ふたば あんず）ちゃんも不思議そうに言った。

「この時間になっても来ないなんて…プロデューサーさん…」

かな子ちゃんこと、三村 かな子（みむら かなこ）ちゃんも不安そうだった。

「渋滞につかまってるのかな…プロデューサーさん…」

李衣奈ちゃんこと、多田 李衣奈（ただ りいな）ちゃんも不安も含めて気にしていた。

「早く来て…プロデューサーさん…」

みくちゃんこと、前川 みく（まえかわ みく）ちゃんも祈るような気持ちで言った。

「なんで、今日は遅いのかな…プロデューサーさん…」

小梅さんこと、白坂 小梅（しらさか こうめ）さんも心配していた。

「確かに珍しいですね…プロデューサーさん…こんなに遅いなんて…」

ウサミン菜々さんこと、安部 菜々（あべ なな）さんも心配そうに言った。

「別の仕事があつて、今日は遅れるとも聞いてないしな……」

夏樹さんこと、木村 夏樹（きむら なつき）さんも不思議そうに言った。

「何故、プロデューサーさんは、今日、まだ来てないのかな……？」

鈴帆さんこと、上田 鈴帆（うえだ すずほ）さんも不思議そうだった。

「さあ、うちもよくはわからん……プロデューサーさん、どないしたんかな……」

笑笑さんこと、難波 笑笑（なんば えみ）さんもプロデューサーの状況は分からず、心配そうだった。

「何もなければいいけど……」

あやめさんこと、浜口 あやめ（はまぐち あやめ）さんも不安そうに言った。

「そうですね……早く来てください。プロデューサーさん……」

裕子さんこと、堀 裕子（ほり ゆうこ）さんも祈るような気持ちで言った。

「なんで、こんなに遅いのか、気になって仕方がないよ……」

珠美さんこと、脇山 珠美（わきやま たまみ）さんも落ち着かない感じだった。

「なんで、今日は遅いんだろう。プロデューサーさん……」

奈緒さんこと、神谷 奈緒（かみや なお）さんも心配そうだった。

「今日のスケジュールについて、いろいろと聞きたいんだけど……」

加蓮さんこと、北条 加蓮（ほうじょう かれん）さんも不安そうだった。

「なんで、来ないのかな…まさかとは思うけど…」

唯さんこと、大槻 唯（おおつき ゆい）さんも心当たりがありそうな感じで言ったけど、心配そうだった。

「これほど遅いのも珍しいですね…」

文香さんこと、鷺沢 文香（さぎさわ ふみか）さんも不思議そうに言った。

「遅すぎて、何があつたのか気になるよ…」

ありすちゃんこと、橘 ありす（たちばな ありす）さんも落ち着かない感じで行った。

「今日、来なかつたら、どうしよう…」

フレデリカさんこと、宮本 フレデリカ（みやもと ふれでりか）さんも不安そうに言った。

「何かあつたら、連絡来るんですけどね…」

周子さんこと、塩見 周子（しおみ しゅうこ）さんも心配そうに言った。

「何もなければ、いいのですが…」

奏さんこと、速水 奏（はやみ かなで）さんも不安そうだった。

「これだけ遅いと、心配になりますね…」

美穂さんこと、小日向 美穂（こひなた みほ）さんも心配そうだった。

「なんで、来ないんですか？プロデューサーさん…」

まゆさんこと、佐久間 まゆ（さくま まゆ）さんも泣きそうになっていた。

「私も連絡したんだけど、音沙汰なし。なんでかな…」

美嘉姉さんこと、城ヶ崎 美嘉（じょうがさき みか）さんも心配そうに言った。

「うーん、私もわからないな…なんでだろう…」

茜さんこと、日野 茜（ひの あかね）さんも不安そうだった。

「用事とか、そういうわけでもなさそうだな…」

瑞樹さんこと、川島 瑞樹（かわしま みずき）さんも不思議そうに言った。

「今、どうしているのか、気になって仕方がないです…」

春奈さんこと、上条 春奈（かみじょう はるな）さんも落ち着かない様子だった。

「さすがに遅すぎですね。プロデューサーさん…」

幸子さんこと、輿水 幸子（こしみず さちこ）さんも心配そうに言った。

「今日は何故、こんなに遅いのでしょうか…」

紗枝さんこと、小早川 紗枝（こばやかわ さえ）さんも心配そうだった。

「何も連絡来ていないからね…」

友紀さんこと、姫川 友紀（ひめかわ ゆき）さんも連絡が来てないことを気にして

いた。

「それが心配ですね…」

雫さんこと、及川 雫（おいかわ しずく）さんも心配そうだった。

「なんで、来ないか、私もよくはわからないなあ…」

早苗さんこと、片桐 早苗（かたぎり さなえ）さんも分からない感じで言った。

「これほど遅いと、心配です…プロデューサーさん…」

楓さんこと、高垣 楓（たかがき かえで）さんも心配そうだった。

「本当に、何もなければいいけど…」

藍子さんこと、高森 藍子（たかもり あいこ）さんも不安そうだった。

「予定の時間になっても、来ないなんて、どうしたのかな…プロデューサーさん…」

歌鈴さんこと、道明寺 歌鈴（どうみょうじ かりん）さんも不安そうに言った。

「今日の事は、忘れるはずなのに…どうしたのかな…プロデューサーさん…」

愛梨さんこと、十時 愛梨（ととき あいり）さんも不安そうだった。

「本当に連絡が来ないのが気になりますね…」

里奈さんこと、藤本 里奈（ふじもと りな）さんも落ち着かない感じで言った。

「プロデューサーさん…忘れてないよね…」

輝子さんこと、星 輝子（ほし しょうこ）さんも心配そうに言った。

「早く来て欲しいと信じるしかないね…」

涼さんこと、松永 涼（まつなが りょう）さんも祈るような気持ちで言った。「どこかで暇潰ししているわけでもないしね…」

亜子さんこと、大和 亜子（やまと あこ）さんも不思議そうに言った。

「プロデューサーさんが忘れるわけがないよね…なんでだろう…」

有香さんこと、中野 有香（なかの ゆか）さんも不安そうに言った。

「プロデューサーさん…何もなければいいのですが…」

ゆかりさんこと、水本 ゆかり（みずもと ゆかり）さんも心配そうに言った。

「プロデューサーさんのことですから…絶対に来ますよ。きつと…」

法子さんこと、椎名 法子（しいな のりこ）さんも励ますように言った。

「そうですね。来ることを信じましょう。プロデューサーさんなら必ず、来ると思いますが…」

響子さんこと、五十嵐 響子（いがらし きょうこ）さんも元気づけるように言った。「プロデューサーさん…そろそろ来ないと…私達の仕事が…」

飛鳥さんこと、二宮 飛鳥（にのみや あすか）さんも心配そうに言った。

「仕事に影響するのも困りますからね…プロデューサーさん…早く来て下さい…」

夕美さんこと、相葉 夕美（あいば ゆみ）さんも祈るような気持ちで言った。

「これほど遅いなんて、不思議でしょうがないよ…プロデューサーさん…」

仁奈ちゃんこと、市原 仁奈（いちほら にな）ちゃんも落ち着かない感じで言った。
「そうですね…プロデューサーさん…今、どこですか…」

桃華ちゃんこと、櫻井 桃華（さくらい ももか）ちゃんも不安そうに言った。

「プロデューサーさん…遅すぎませんか…」

薫ちゃんこと、龍崎 薫（りゅうざき かおる）ちゃんも不安そうだった。

「私達の仕事に影響します…プロデューサーさん…」

佐々木 千枝（ささき ちえ）ちゃんも心配そうに言った。すると…

カチャ…

「プロデューサーさんはまだ、来てないのですか？」

扉を開けて入ってきたのは、ちひろちゃんこと、千川 ちひろ（せんかわ ちひろ）さんだった。

「あつ、ちひろさん！はい。まだ、来てないです…」

私達はちひろさんに報告した。

「そうですか…プロデューサーさんの連絡がないんですよね…」

「えっ、ちひろさんですか!?!」

これには私達は驚いた。

「皆さんも連絡ないんですか!？」

「はい…」

ちひろさんも驚いてそう言った。ちひろさんまで知らなかったのは意外だった。もしかして…

「あの、皆さん、専務さんの所に行きませんか？何か知ってそうだし…」

私は専務が何か知っているかと思ったので、みんなに聞いてみた。

「そうですね!」

全員、賛成したので、私達は専務室に向かった。

コンコン

「失礼します。」

私達は専務室に着いた後、ドアをノックして、専務室に入った。

「皆さん、お揃いで。どうしましたか？」

専務の美城 美幸（みしろ みゆき）さんが私達の訪問に多少、驚いていた。

「あの、プロデューサーさんから何か、連絡来ていませんか？」

私は専務にプロデューサーさんのことについて質問した。

「ああ、その事か。君達が来たら、伝えるようにと言っていたな。その時が来たみたいだな。」

専務はやっぱり何か知っていたみたいだ。

「えっ、なんですか!?!」

「武内 俊介プロデューサーの事についてだが…」

「あつ、あのプロデューサー、武内 俊介って言うんだ…」

「これは初耳だった。プロデューサーさんの本名は私達は今まで知らなかったのだ。」

「ああ。武内 俊介プロデューサーだが…本日付で、我が事務所を自主退社した事をここに伝えます。」

「えっ!?!」

私達は驚いた。プロデューサーさんが辞めたなんて、聞いていないんだけど…

「それで、君達の今後だが…」

「ちよつと待つて下さい!専務さん!」

専務が何か言おうとしていたけど、私はたまらず止めた。

「プロデューサーが辞めたって、どういう事ですか!?!」

「プロデューサーさんが、辞めるなんて、信じられません!」

「プロデューサーさんが私達に内緒で辞めていったって、どういう事ですか!?!」

「プロデューサーさんが辞める理由なんて、見つかりません！」

「プロデューサーさんが辞めるなんて、聞いていません！」

「プロデューサーさんが私達に内緒で辞めるって、信じられません！」

「なんで、プロデューサーさんは私達に内緒で辞めたんですか!?!とても信じられませんし、信じたくないですー！」

「そうですよ!プロデューサーさんが内緒で辞めるなんて、信じられません！」

「プロデューサーさんが辞めるなんて、聞いていませんし、受け入れられません！」

「プロデューサーさんが私達に内緒で辞める事自体が信じられません！」

「プロデューサーさんが私達に内緒で辞めたなんて、絶対、嘘です!信じません！」

「プロデューサーさんが辞めるなんて、聞いてもいませんし、信じたくないです！」

「なんで、プロデューサーさんが私達に内緒で辞めていったんですか!?!あり得ません！」

「プロデューサーさんが辞めるなんて、聞いていませんし、どういう事ですか!?!」

「プロデューサーさんが事務所を辞めていったなんて、受け入れられません！」

「そうですよ!プロデューサーさんがここを辞める理由なんて、ありませんし、信じられませんかー！」

「なんで、プロデューサーさんは辞めていったんですか!?!信じられません！」

「そうですよ!プロデューサーさんがいないなんて、どうすればいいんですか!?!」

「なんで、プロデューサーさんは辞めていったんですか!?全然、分かりません!」

「プロデューサーさんが辞めていく事自体、信じられませんし、その理由が分かりません!」

「プロデューサーさんが辞めることなんて、聞いてもいませんし、何故、辞めていったんですか!?」

「プロデューサーさんが辞めたなんて、信じられません!私達、どうなるんですか!?」

「そうですね!私達のプロデューサーさんが辞めたなら、誰が私達をサポートしてくれるのですか!?」

「プロデューサーさんが辞めるなんて、何も聞いていません!どういう事ですか!?」

「プロデューサーさんがこの事務所からいなくなるなんて、信じられません!」

「なんで、プロデューサーさんは事務所を辞めていったんですか!?辞めていく理由が全く分かりません!」

「プロデューサーさんが辞めていったら、誰が私達のプロデューズするのですか!?」

「プロデューサーさんが私達に内緒で辞めるなんて、あり得ないです!何かの間違いじゃないんですか!?」

「そうですね!プロデューサーさんが私達を置いてって辞めて行くはずがありません!」

「プロデューサーさんが私達を残して辞めるなんて、信じられません！どういう事ですか!?!」

「プロデューサーさんが私達に内緒で辞めるなんて、とても信じられません！私達のプロデューサーさんがいないなんて、絶対に嫌です!」

「プロデューサーさんが辞めるなんて、とても信じられません！これから、私達、どうなるんですか!?!」

「プロデューサーさんが辞めていったなんて、信じられませんし、あり得ません！何故、辞めていったんですか!?!」

「プロデューサーさんが辞める理由なんて、見当たりませんし、辞めていったこと自体が信じられません!」

「なんで、プロデューサーさんが私達を置いて辞めていくんですか!?!そんなの信じられません!」

「そうですよ！プロデューサーさんが僕達を置いて辞めるなんて、あり得ません!」

「プロデューサーが辞めていったなんて、とても信じられません！私達、どうなるんですか!?!」

「プロデューサーさんが辞めるなんて、とてもあり得ませんし、信じられません！私達、どうなるんですか!?!」

「プロデューサーさんがいなくなるなんて、とても信じられませんし、あり得ません！」
「なんで、プロデューサーさんは辞めていったんですか!?! 私には全く見当が付きません
!」

「プロデューサーさんが辞めるなんて、とても信じられません! 今後、私達はどのような
ですか!?!」

「プロデューサーさんのおかげで、私達はここまで来れたんです! いなくなったら、誰が
プロデューサーするんですか!?!」

「そうですよ! 私達はプロデューサーさんを頼りにしていたんです! 辞めたなんて、信
じられません!」

「プロデューサーさんが辞めてしまったなんて、とても信じられませんし、受けいられま
せん!」

「プロデューサーさんが辞める理由なんて、絶対にないです! 何かの間違いじゃないで
すか!?!」

「そうですよ! プロデューサーさんが辞めたなんて、信じられません! 辞めること自体、
あり得ません!」

「なんで、プロデューサーさんは私達を残して、辞めていったんですか!?! それ自体が信じ
られません!」

「プロデューサーさんは私達の希望の方なんです！辞めた事自体が信じられません！」
「プロデューサーさんが辞めてしまったなんて、とても信じられません！どういう事ですか!？」

「そうですね！プロデューサーさんが辞めたなら、誰が代わりにやるのですか!？」

「プロデューサーさんは私達を助けてくれたんです！辞めたなんて、とても信じられません！」

「そうですね！プロデューサーさんが辞めたなら、誰が私達を助けてくれるのですか!？」
「プロデューサーさんが辞めてしまったなんて、私達はとても受けられません！誰が私達をプロデュースするのですか!？」

「そうですね！なんで、プロデューサーさんは私達を残して辞めたのですか!？とても受け入れられないことです！」

「プロデューサーさんが辞めたなんて、信じられません！なんで、辞めたんですか!？」
「なんで、プロデューサーさんは辞めていったんですか!？とてもあり得ないし、信じられないです！」

「そうですね！プロデューサーさんが辞めるはずがないです！辞めたなんて、信じられません！」

「プロデューサーさんが辞めるなんて、本人からは何も聞いていません！どういう事で

すか!？」

他の人もプロデューサーさんが辞めたことについて抗議した。

「彼自身の申し入れで、自主退社したのだ。それで、今後の活動だが、新しいプロデューサーに千川 ちひろ。君にお願いしたい。」

「私ですか…?」

そう言われても、私達の答えは決まっている。それは…

「絶対に嫌です!」

私達はきっぱり断った。

「何故だ?」

「私達は武内プロデューサーがいいんです!」

「…」

私達の言ったことに、専務は唾然としていた。こうなったら…

「こうなったら、みんなで探しましょう!」

私はみんなに提案した。

「おー!」

全員、賛成した。

「あつ…」

そして、私達は事務所を飛び出していったのだった。そのことに専務はあつけにとられていた。

「みんな、彼がいいんだね…彼女達はやはり、彼の事が…」

「プロデューサーさん…本当にどこに行ったのかな…」

探し始めてから、数時間後。プロデューサーさんが見つからず、私は焦っていた。するど…

ドンツ！

「きやつ！」

誰かとぶつかってしまった。

「春香！大丈夫!?!」

「卯月！大丈夫!?!」

「あつ、うん。大丈夫。」

「よかつた〜」

何とか、けががなくてよかった。ぶつかった人に謝らなきやと顔を上げて、相手の顔

を見たら…

「あゝ!!」

思いがけない場所で私達は再会した。ちなみに、私達は仕事の関係で何回か会っていて、ときどき連絡を取っていた。

「もしかして、そつちもプロデューサーさん探しているの?」

「えっ、そつちもなの!?!」

私がそう問いかけると、卯月ちゃん達は驚いた。そつちも私達と同じことがあったんだ…

「うん。私達、今日、社長からプロデューサーさんが辞めたって伝えられて…でも、それが信じられなくて…」

「私達も同じ。今日、専務から、そう言われて…」

「そうなんだ…」

「だつたら…」

「ここからは、みんなと一緒に探さない?」

私と卯月ちゃんはそう提案した。

「そうだね!」

全員、承諾した。こうして、私達はプロデューサーさんを探しに行ったのだった。

く次回に続く

繋げ!届け!輝け!私達の思いと夢

「さて、今後はどうしますか?武内さん。」

彼女達が俺達を探している頃、俺達は新事務所のことについて話していた。

「そうですね…新しい事務所の事で、色々と考えないといけないですからね…まずは、新事務所の立地確保ですかね。どうですか?赤羽さん?」

武内さんはそう提案してきました。

「そうですね。場所に関しては、どこか候補がありますか?」

俺は武内さんに聞いた。

「ええ、いくつか、いい場所がありましたね。」

武内さんはいくらか調べてきていたらしい。

「どこですか?」

「ここです。」

新事務所の立地場所について、詳しい話をしようとしたその時、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あつ、いたー!!」

「えっ、みんな!? どうして、ここに!?!」

「えっ、皆さん!?! どうして、ここに来たんですか!?!」

彼女達が来たことに俺達は驚いた。場所も伝えていないのに、どうしてだ…?

「どこにいたんですか!?! 探したんですよ!」

俺達を探していたことに、俺達はまた驚いた。

「いや、今日、仕事じゃないか!?!」

「いや、本日は仕事ではありませんか!?!」

そう。本来なら、彼女達は仕事場所に行っているはずだ。それに、仕事時間帯だが…

「それどころじゃありません!」

「えっ…?」

彼女達が言ったことに、俺達は啞然とした。

「プロデューサーさんに頼みがあつて、来たんです!」

「頼み?」

頼みつてまさか…

「プロデューサーさん! 私達の事務所に戻ってきて下さい!」

「えっ!?!」

彼女達は、俺達が思っていたことをそのまま言った。やはりか…しかし、それを言わ

れても、答えは決まっていた。

「ごめん。それが、出来ないんだ…」

「すみません。申し訳ないのですが…出来ません…」

俺達は彼女達のいる事務所に戻ることを断った。

「えっ!?!どうしてですか!?!」

「実は…」

そして、俺達は彼女達にこの資料を見せた。

「これは…?」

「実は、俺達、今度、新しい事務所を設立する事になったんだ。」

「新しい事務所!」

彼女達は驚いた。

「ええ。私達は、今度、こここの配属になります。今の事務所を自主退社したのは、そういう事です。」

俺達はすまなさそうに言った。新事務所の方でプロデューサーをしたかったので、所属していた事務所を去ったのだ。

「そうなんですか…でも、何故、私達に内緒で辞めていったんですか?」

彼女達は聞いてきた。

「ごめん。みんなには、今の状態を保ってほしくて…」

「すみません。皆さんには、現在の状態を保ってほしくて…」

俺達は彼女達に今の状態でいてほしかったので、何も言わずに辞めたことを説明した。

「そんな…今の状況でいられるのは、プロデューサーさんがいたからです！」

「…」

彼女達は必死だった。

「プロデューサーさんがその事務所に配属になるのだったら…私達も、その事務所に転属します！」

「えっ!?!」

思ってもない言葉が返ってきた。

「私達は、どうしても、プロデューサーさんがいいんです！プロデューサーさんのおかげで、私達はここまで来れたんです！だから、お願いします!!」

彼女達は必死にお願いをした。

「…」

あまりに突然の事で、俺達は頭が真っ白になった。

「ちよっと待って…」

「ちよつと待つて下さい…」

彼女達が、まさか、そんな事を言うとは思わなかった。彼女達とは、仕事を始めて、長くはないが、短くもない。彼女達がこんな思いを持っているとは、思わなかった。しかし…

「いや、まだ…みんなはあつちでやつてもらいたい…」

「いや、まだ…皆さんは向こうでやつてもらいたいです…」

俺達はすまなさそうに言った。

「どうしてですか!?!」

彼女達は納得がいかない感じで言った。

「せっかく、みんなで取った今の状態を捨てて欲しくないんだ…」

「皆さんで取った今の状態を捨てて欲しくないのは、私も同じです…」

俺達は彼女達のために、こういう決断をしたのだ。

「そんなの、プロデューサーさんがいなければ、意味がありません!」

「えっ…」

それでも、彼女達は俺達を…

「…」

「プロデューサーさん!!」

彼女達は必死だった。俺達の返事を待っている。しかし…

「返事は…待ってくれる？今は…まだ出せない…」

「返事は…待ってくれますか？今は…まだ出せません…」

これしか答えることが出来なかった…

「…分かりました…」

彼女達はしょんぼりした。顔の表情から、そんなに俺達がいいんだと思ったことがわかった。

「ごめん…」

「すみません…」

俺達はただ、謝ることしか出来なかった。

「いえ…いいんです…でも、待ってます。私達は、プロデューサーさんがOKを出してくれることを、信じて待っています！」

「みんな…」

「皆さん…」

彼女達はその言った後、帰っていった。多分、今日の仕事をキャンセルして、ここに来たんだろうな…

「なんか…大変な事になってしまいましたね…」

「ええ…彼女達に関しては、後で私達の方から、答えを出しましょう。本題の方に戻りますか。」

こうして、また、俺達は、本題の新事務所についての話に戻ったのだった。

私達とはある場所で練習していた。お互いに次の夢に向かって、進み始めていた。大切な仲間と共に。

「ふう。大体こんな感じかな?」

私こと、高坂 穂乃果(こうさか ほのか)は練習が終わった後、みんなに確認をした。

「そうだね。なんとか形になってきたね。」

千歌ちゃんこと、高海 千歌(たかみ ちか)ちゃんは何とかなった感じで言った。「まあ、まだ完全な形にはなっていないけど、いい感じにはなったね。」

絵里ちゃんこと、絢瀬 絵里(あやせ えり)ちゃんもほぼ問題ない感じで言った。

「そうですね。完璧とまではいかないけど、いい感じにはなりましたね。」

ダイヤさんこと、黒澤 ダイヤ（くろさわ だいや）さんもまんざらでもない感じで言った。

「みんな、段々と良くなってきたから、いいんじゃない？」

ことりちゃんこと、南 ことり（みなみ ことり）ちゃんも励ますように言った。

「うん。全体的に揃ってきたし、いいんじゃない？」

梨子ちゃんこと、桜内 梨子（さくらうち りこ）ちゃんも問題ない感じで言った。

「そうですね。まだ、納得出来るほどではありませんが、いい感じにはなりましたね。」

海末ちゃんこと、園田 海末（そのだ うみ）ちゃんもほほ問題ない感じで言った。

「そうだね。みんな、揃ってきたから、いいんじゃない？」

曜ちゃんこと、渡辺 曜（わたなべ よう）ちゃんも励ますように言った。

「うん。まとまってきたから、いいんじゃない？」

凜ちゃんこと、星空 凜（ほしぞら りん）も問題ない感じで言った。

「まとまってきたよかった。心配な所は少しあるけど、それ以外は問題ないし、いいんじゃない？」

マルちゃんこと、国木田 花丸（くにきだ はなまる）ちゃんも安心したように言った。

「まあ、心配な所は改善していけばいいし、今回はいいんじゃない？」

真姫ちゃんこと、西木野 真姫（にしきの まき）ちゃんも問題ない感じで言った。

「うん。その点は上手く改善すればいいし、今日はよかったんじゃない?」

善子ちゃんこと、津島 善子（つしま よしこ）ちゃんも励ますように言った。

「こうやって、みんなが揃うと、なんかいいね。」

希ちゃんこと、東條 希（とうじょう のぞみ）ちゃんも楽しそうに言った。

「そうだね。みんなが揃うのもいいし、ミスもそんなになかったから、いいんじゃない?」

鞠莉ちゃんこと、小原 鞠莉（おはら まり）ちゃんも問題ない感じで言った。

「うん。ミスに関しては、改善すればいいし、それ以外に特に何もなかったから、いいんじゃない?」

花陽ちゃんこと、小泉 花陽（こいずみ はなよ）ちゃんも何とかなった感じで言った。

「そうだね。ミスも少なかったし、揃ってきたから、よかったんじゃない?」

ルビイちゃんこと、黒澤 ルビイ（くろさわ るびい）ちゃんも安心したように言った。

「まあ、完璧とまではいかないけど、全体的によかったから、いいんじゃない?」

にこちゃんこと、矢澤 にこ（やざわ にこ）ちゃんも問題ない感じで言った。

「そうだね。ミスは少しあるけど、そんなに問題ないし、揃ってきたから、いいんじゃない？」

果南ちゃんこと、松浦 果南（まつうら かなん）ちゃんも何とかなった感じで言った。

「ここで、ちよつと休憩する？」

キリがよかったので、私はみんなにそう提案した。

「賛成〜！」

全員、賛成した。ということで、休憩を取ることにした。すると、そこに私達の仲間がきた。

「遅くなって、ごめん〜」

来たのは、つばきさんこと、綺羅 つばき（きら つばき）さん、英玲奈さんこと、統堂 英玲奈（とうどう えれな）さん、あんじゅさんこと、優木 あんじゅ（ゆうき あんじゅ）さん、聖良さんこと、鹿角 聖良（かづの せいら）さん、理亞ちゃんこと、鹿角 理亞（かづの りあ）ちゃんだ。ちなみに、聖良さんと理亞ちゃんは姉妹だ。

「ううん。構わないよ〜。お疲れ様〜。」

私は後から来たメンバーをねぎらった。

「練習はどつ〜！」

つばささんは私達に聞いてきた。

「うくん…なんとか、形にはなつてきたかな…って感じ。」

千歌ちゃんは少しもどかしそうに言った。

「もしかして、今、休憩中?」

聖良さんは遠慮がちに聞いた。

「うん。たつた今、していると。」

絵里ちゃんは問題ない感じで言った。

「じゃあ、休憩が終わったら、私達も練習に参加しますか?」

つばささんは英玲奈さん、あんじゅさん、鹿角姉妹にそう言った。

「そうだね!」

彼女達は承諾した。和やかに談議していた時、また、仲間がきた。

「お疲れ様。そして、遅くなって、ごめん。」

来たのは私の妹、高坂 雪穂(こうさか ゆきは)、絵里ちゃんの妹、絢瀬 亜里沙(あ

やせ ありさ)ちゃん、千歌ちゃんの姉、高海 志満(たかみ しま)さんと高海 美

渡(たかみ みと)さんだ。ちなみに、志満さんが一番上で、美渡さんが真ん中、千歌

ちゃんが末っ子だ。

「あつ、雪穂。うくん、別に大丈夫だよ。今、休憩中だから。」

「あつ、亜里沙。ううん、別に大丈夫だよ。今、休憩中だから。」

「あつ、志満姉ちゃん、美渡姉ちゃん。ううん、別に大丈夫だよ。今、休憩中だから。」
私と絵里ちゃん、千歌ちゃんは一齐にそう言った。

「あつ、そうなの？なら、よかった。じゃあ、休憩が終わったら、私達も参加するわ。」
「お店の方は、大丈夫なの？」

「旅館の方は、大丈夫なの？」

私は雪穂に、千歌ちゃんは志満さんと美渡さんに確認した。ちなみに、私と雪穂は和菓子店『穂むら』、千歌ちゃんは、志満さん、美渡さんは旅館『十千万』を経営している。
「うん。お母さんとお父さんが代わりにやっているし、人手も足りているし、こっち優先してきてって言うって言うから。」

「うん。お母さんが代わりにやっているし、人手も足りているし、こっち優先してきてって言うって言うから。」

雪穂と志満さん、美渡さんはそう言った。

「あつ、そうなんだ。じゃあ、練習、再開しようか？」

私と千歌ちゃんはそう言った。

「そうだね！」

全員、賛成した。そして、私達は練習を再開した。

「ふう。こんな感じかな?」

それから、1時間後。全体練習を再開して踊り終わったあと、また、休憩を入れている。

「そうだね。」

後から合流してきたメンバー達がそう答えた。

「これなら、次の公演に間に合うかな?」

私と千歌ちゃん、つばささんはそう言った。ちなみに、私達が次の夢に向かっていくというのは、次の公演を成功させる事と、それによって、スクールアイドルの発展と私達の次の夢を見つける事。そして、このことを彼に伝えたいのだ。

「そうだね。全体的に揃ってきたし、これなら、問題ないんじゃない?」

絵里ちゃん、ダイヤさん、英玲奈さんはそう評価した。

「私達の夢が一步近づいたね。」

ことりちゃん、梨子ちゃん、あんじゅさんはそう言った。

「そういえば…次の公演、彼、来るかな…?」

私はふと、彼のことが気になった。

「彼って、もしかして…」

ことりちゃん、海未ちゃん、絵里ちゃん、千歌ちゃん、曜ちゃん、果南ちゃんは心当たりがあるらしく、私に聞いてきた。

「うん…曾田 光輔君のこと。私が中学校を卒業した後、光輔が引つ越して、それ以来、会っていないんだ…」

私は少し寂しげに言った。

「そういえば、そうだね…来てくれるかな…?」

ことりちゃん、海未ちゃん、絵里ちゃん、千歌ちゃん、曜ちゃん、果南ちゃんも心配そうだった。

「分らないけど、来てくれることを信じましょう。」

ダイヤさんは私達を励ますように言った。

「そうだね。じゃあ、次の公演と夢に向かって、頑張ろう〜!」

私と千歌ちゃんは励ますように言った。

「お〜!」

全員、そう答えた。こうして、私達は夢に向かって、一緒に進み始めた。

〜次回に続く〜

輝きを追いかけて、きらめけ!私達の夢

東京都のある所で、私達は練習していた。私達はある場所でのLIVEをやりたいという夢を叶えて、次の夢に向けて、練習していた。

「ふう。こんな感じかな?」

私こと、戸山 香澄(とやま かすみ)はみんなに確認した。

「そうね。いいんじゃない?」

有咲ちゃんこと、市ヶ谷 有咲(いちがや ありさ)ちゃんがそう言った。

「みんな、揃っていたから、問題ないんじゃない?」

りみりんこと、牛込 りみ(うしごめ りみ)ちゃんも有咲ちゃんと同じ感じでした。

言った。

「うん。まだ不安点はあるけど、それもなんとかなりそうだし、いいんじゃない?」

おたえこと、花園 たえ(はなぞの たえ)ちゃんもほぼ問題ない感じでした。

「そうだね。完璧とはいえないけど、ほぼ問題なかったから、いいんじゃない?」

沙綾ちゃんこと、山吹 沙綾(やまぶき さあや)ちゃんもおたえと同じ感じでした。

言った。

「今は私達しかいないけど、後でみんな来るから、全員集まったら、また練習しよつか？」
私はみんなに聞いた。私達は全体練習の時間より早く来たので、待っている時間の間、早めに練習していたのだ。

「そうだね！」

全員が賛同した。

「じゃあ、それまで休憩しよつか？」

「賛成——！」

というわけで、私達が休憩を取ろうとしていた時、練習室の扉が開いた。

「やつほ——！休憩中だった？遅くなってごめんね。」

ゆりさんこと、牛込 ゆり（うしごめ ゆり）さんが入ってきて、そう言った。

「あつ、お姉ちゃん。ううん。大丈夫だよ。」

りみりんはそう言った。ちなみに、ゆりさんとりみりんは姉妹だ。

「それに、生徒会長もお疲れ様です。」

私はゆりさんの後に入ってきた生徒会長の菜々さんこと、鰐部 菜々（わにべ なな）

さんに声をかけた。

「お疲れ様。練習はどう？」

菜々さんは私達に聞いた。

「はい。順調です。」

有咲ちゃんが問題ない感じで答えた。

「順調そうで、何よりだよ〜!」

りいさんこと、鶺鴒 りい（うざわ りい）さんが元気そうに言った。

「まだ、完璧とはいえないのですが…」

沙綾は少しもどかしそうに言った。

「完璧とはいえなくても、出来ていたら、OKだよ!」

ひなこさんこと、二十騎 ひなこ（にじつき ひなこ）さんも元気そうに言った。

「そうですね。」

おたえも納得した感じで言った。

「そっちの休憩が終わったら、私達も練習に参加するね〜。」

ゆりさんは私達にそう言った。

「了解です〜。」

私は承諾した。そんな感じで会話していると、また練習室の扉が開いた。

「やつほ〜!遅くなつてごめんね。もしかして、休憩中だった?」

夏希ちゃんこと、海野 夏希（うみの なつき）ちゃんが入ってきて、そう言った。

「あつ、なつ。うん。休憩中だけど、大丈夫だよ。」

沙綾ちゃんは問題ない感じで言った。

「そっか。練習どうだった？」

里実ちゃんこと、大湖 里実（たいこ さとみ）ちゃんは私達に言った。

「うん。順調に行ったかな。まだ完璧ってじゃないけどね…」

私は少しもどかしそうに言った。

「順調にいつているなら、いいんじゃない？」

真結ちゃんこと、川端 真結（かわばた まゆ）ちゃんは励ますように言った。

「そうですね。」

有咲ちゃんは納得した感じで言った。

「完璧を求める必要はあまりないからね。楽しく演奏出来ればいいのよ。」

文華ちゃんこと、森 文華（もり ふみか）ちゃんも真結ちゃんと同じように言った。

「そうですね！」

りみりんとおたえは同時に言った。

「じゃあ、そっちの休憩が終わったら、私達も練習に参加するね。」

夏希ちゃんは私達に言った。

「了解。」

沙綾は承諾した。そんな感じで会話していると、また練習室の扉が開いた。

「こんにちは。休憩中だった?」

友希那さんこと、湊 友希那(みなと ゆきな)さんは入ってきて、そう言った。

「あつ、友希那。うん。でも、大丈夫だよ。私達も来たばかりだから。」

ゆりさんは問題ない感じで言った。

「そっか。練習はどう?」

紗夜さんこと、氷川 紗夜(ひかわ さよ)さんは私達に聞いた。

「私達はまだしてないけどね。Poppin, Party(ポップイン パーティー)のメンバーは先に練習していたみたいだよ。」

菜々さんは私達のバンドが練習していたことを伝えた。ちなみに、私達のバンド名はPoppin, Partyという名前だ。

「はい。順調です。」

有咲ちゃんも問題ない感じで言った。

「それなら、よかった。」

りささんこと、今井 りさ(いまい りさ)は安心したように言った。

「まだ、全員と合わせていないので、どうなるかは分からないのですが…」

りみりんは不安げな感じで言った。

「まあ、それは全員が集合したときに確認すればいいんじゃない?」

あこちゃんこと、宇田川 あこ（うたがわ あこ）ちゃんは励ますように言った。「そうですね。」

おたえは納得した。

「集まるメンバーが全員集まったら、また練習しましょうか。」

燐子さんこと、白金 燐子（しろかね りんこ）さんは私達に言った。

「そうですね。」

沙綾ちゃんも納得した。

「じゃあ、休憩とメンバーが全員集まったら、私達も練習に参加するね。」

友希那さんは私達にそう言った。

「了解。」

ゆりさんは承諾した。そんな感じで会話していると、また練習室の扉が開いた。

「こんにちは。あつ、もしかして、休憩中だった？」

蘭ちゃんこと、美竹 蘭（みたけ らん）ちゃんが入ってきて、そう言った。

「あつ、蘭。うん。でも、大丈夫。私達も来たばかりだから。」

友希那さんは問題ない感じで言った。

「そっか。練習はどう？」

もかちゃんこと、青葉 もか（あおば もか）ちゃんは私達に聞いた。

「私達はまだしていかないけどね。Poppin, Partyのメンバーは先に練習していたみたいだよ。」

紗夜さんは私達のバンドが練習していたことを伝えた。

「Poppin, Partyのみんな、練習はどう?」

ひまりちゃんこと、上原 ひまり（うえはら ひまり）ちゃんは私達のバンドに聞いた。

「はい。順調です。」

私は問題ない感じで言った。

「それなら、よかった。」

巴ちゃんこと、宇田川 巴（うたがわ ともえ）ちゃんは安心したように言った。ちなみに、あこさんと巴さんは姉妹で、巴さんが姉、あこさんが妹だ。

「まだ、メンバーは全員じゃないよね?」

つぐみちゃんこと、羽沢 つぐみ（はざわ つぐみ）さんは私達に確認した。

「はい。まだ、3組来ていないですね。」

有咲ちゃんはそう言った。

「じゃあ、全員集まったら、私達も練習に参加するね。」

蘭ちゃんは私達にそう言った。

「了解です。」

沙綾ちゃんは承諾した。そんな感じで会話していると、また練習室の扉が開いた。「こんにちは。もしかして、休憩中だった？」

彩さんこと、丸山 彩（まるやま あや）さんは入ってきて、そう言った。

「あつ、彩。うん。でも、大丈夫だよ。私達も来たばかりだから。」

りいさんは問題なく言った。

「お姉ちゃん達も来たばかりなんだ。よかった。」

日菜さんこと、氷川 日菜（ひかわ ひな）さんは安心したように言った。ちなみに、紗夜さんと日菜さんは姉妹で、双子なのだ。

「練習はまだPoppin, Partyしかしてないけどね。」

紗夜さんは再度、私達のバンドが練習していたことを伝えた。

「Poppin, Partyのみんな、練習はどう？」

千聖さんこと、白鷺 千聖（しらすぎ ちさと）さんは私達のバンドに聞いた。

「はい。順調です。」

りみりんは問題なく言った。

「そっか。ならよかった。」

麻弥さんこと、大和 麻弥（やまと まや）さんは安心したように言った。

「まだ全員と合わせていないので、そのときはどうなるかは分からないのですが……」
おたえは少し不安そうに言った。

「それは全員が集合して練習したときに確認すればいいんじゃない?」

イヴちゃんこと、若宮 イヴ（わかみや いう。）ちゃんはそう提案した。

「そうだね。」

私は納得した。

「じゃあ、全員が集まったら、私達も練習に参加するね。」

彩さんが私達にそう言った。

「了解。」

りいさんは承諾した。そんな感じで会話していると、また練習室の扉が開いた。

「やつほー!遅くなってごめんね!もしかして、休憩中だった?」

こころちゃんこと、弦巻 こころ（つるまき こころ）ちゃんが元気いっぱいな感じ

で入ってきた。

「あつ、こころ。うん。だけど、大丈夫だよ。」

私は問題ない感じで言った。

「もしかして、私達を待っていた?」

薫さんこと、瀬田 薫（せた かおる）さんはそう聞いてきた。

「うん。だけど、まだ、あと1組来ていないから大丈夫だよ。」

有咲ちゃんも問題ない感じで言った。

「そっか。よかった。」

はぐみちゃんこと、北沢 はぐみ（きたざわ はぐみ）ちゃんは

「私達のバンドは先に練習しちゃったけどね。」

りみりんは少しすまなさそうに言った。

「そっか。Poppin', Partyだけ先に練習していたのか。どうだった？」

花音さんこと、松原 花音（まつばら かのん）さんは私達のバンドに聞いた。

「はい。順調に上手くいきました。ただ、まだ完璧とはいえないのですが、ミスは少な

かったので、問題ないかなと思いました。」

沙綾ちゃんは少し悩みながら言った。

「それなら、問題ないね。自身もっていいよ。」

美咲ちゃんこと、奥沢 美咲（おくさわ みさき）ちゃんは励ますように言った。

「うん。ありがとう。」

おたえはそう言った。

「じゃあ、全員そろったら、私達も練習に参加するね。この様子だと、あと、1組かな？」

「こころちゃんは確認するように言った。」

「うん。もうすぐ、来ると思うんだけど…」

私はそう言いながら時間を確認した。すると、また練習室の扉が開いた。

「ごめくん!遅くなって!」

唯ちゃんこと、平沢 唯(ひらさわ ゆい)ちゃんが勢いよく入ってきて、そう言った。

「唯ちゃん〜!大丈夫だよ〜!」

私は問題ない感じで言った。

「よかった〜。ここに来るまで、いろいろあったけど、何とかなった〜。」

律ちゃんこと、田井中 律(たいなか りつ)ちゃんは少し疲れた感じで言った。

「まだ全体練習していないから、大丈夫だよ。」

有咲ちゃんも問題ない感じで言った。

「ごめんな。先に練習してもよかったのに…もしかして、もうしていた?」

滯ちゃんこと、秋山 滯(あきやま みお)ちゃんはすまなさそうに言った。

「ううん。そんなことは出来ないよ。練習は私達のバンドだけ先にしちゃったけどね。」

りみりんはそう言いながらも少しすまなさそうに言った。

「そうなんだ。Poppin' Partyの練習はどうだった?」

紬ちゃんこと、琴吹 紬(ことぶき つむぎ)ちゃんは私達のバンドに聞いた。

「順調だよ。完璧とはいえないけどね。」

沙綾はおどけた感じで言った。

「そうなんですか。でも、順調ならいいんじゃないですか?」

梓ちゃんこと、中野 梓（なかの あずさ）ちゃんは疑問を持った感じで言った。

「まだ全体練習していないからね。1つのグループが合っても、全体で合うかどうかは分からないからね。」

ゆりさんは解説するように言った。

「あつ、そうでしたね。」

憂ちゃんこと、平沢 憂（ひらさわ うい）ちゃんは納得した。ちなみに、唯ちゃんと憂ちゃんは姉妹だ。

「私達のグループはまだ練習していないから、大丈夫だよ。これから合わせにいくんだよー!」

ひなこさんは励ますように言った。

「そうですね。これから私達のバンドも参加します。」

純ちゃんこと、鈴木 純（すずき じゅん）ちゃんはそう言った。

「これで、みんな集まったね。じゃあ、全体練習始めようか。」

私はみんなに確認した。

「そうですね!」

バンドメンバー全員がOKサインを出した。そして、Poppin, Party (戸山 香澄&市ヶ谷 有咲&牛込 りみ&山吹 沙綾&花園 たえ)、Glitter* Green (グリッター グリーン) (牛込 ゆり&鰐部 菜々&鵜沢 りい&二十騎 ひなこ)、CHISPA (チスパ) (海野 夏希&大湖 里美&川端 真結&森 文華)、Roselia (ロゼリア) (湊 友希那&氷川 紗夜&今井 りさ&宇田川 あこ&白金 燐子)、Afterglow (アフターグロー) (美竹 蘭&青葉 もか&上原 ひまり&宇田川 巴&羽沢 つぐみ)、Pastel*Palette (パステルパレット) (丸山 彩&氷川 日菜&白鷺 千聖&大和 麻弥&若宮 イヴ)、ハッピーワールド! (弦巻 こころ&瀬田 薫&北沢 はぐみ&松原 花音&奥沢 美咲)、放課後ティータイム&わかばガールズ (平沢 唯&田井中 律&秋山 澪&琴吹 紬&中野 梓&平沢 憂&鈴木 純) の合同練習が始まった。

「ふう、こんな感じかな?」

それから数十分後、私達は練習を終えて、私はみんなに確認した。「全体練習でも問題なさそうね。」

ゆりさんはそう言った。

「全員で音合わせしても、ミスが少なかったから、いいんじゃない？」

夏希ちゃんも問題なさそうに言った。

「これなら、全員でやっても、問題なさそうね。」

友希那さんも安心したように言った。

「そうだね。まあ、みんなが望んでいる完璧までとはいかないけど、楽しんで演奏していたから、いいんじゃない？」

蘭ちゃんは励ますように言った。

「そうだね。楽しく演奏していたし、問題なかったし、よかったんじゃない？」

彩さんも問題ない感じで言った。

「全員で合わせて、この調子が続いたら、問題ないね。」

「こころちゃんも問題なさそうに言った。

「そうだね。これなら、本番も大丈夫そうだね。」

唯ちゃんも安心したように言った。

「じゃあ、また休憩して、それからもう一回練習する？」

私はまたみんなに確認した。

「賛成——」

バンドメンバー全員もまた賛同した。そんな感じで会話していると、練習室の扉が開

いた。

「お疲れ様。練習どうだった？」

「お疲れ様。全体練習はどう？」

「お疲れ様。練習はいい感じ？」

「お疲れ様。練習は上手くいった？」

入ってきたのは、妹の明日香こと、戸山 明日香（とやま あすか）、凜々子さんこと、真次 凜々子（まつぎ りりこ）さん、まりなさんこと、月島 まりな（つきしま まりな）さん、和ちゃんこと、真鍋 和（まなべ のどか）ちゃん、さわ子さんこと、山中 さわ子（やまなか さわこ）さん、紀美さんこと、河口 紀美（かわぐち のりみ）さんだ。

「あつ、明日香。うん。いい感じだよ。」

「あつ、凜々子さん、まりなさん。はい。上手くいきました。」

「あつ、和ちゃん、曾我部さん、さわちゃん、のりちゃん。うん。上手くいったよ。」

私とおたえ、唯ちゃんは問題ない感じで言った。

「よかった。曲が終わって、ちようど休憩に入るところかな？」

明日香、凜々子さん、まりなさん、和ちゃん、恵さん、さわ子さん、紀美さんはそう言った。

「うん。じゃあ、また休憩にしますか。ここまで何回か練習していたし。」

私はみんなに提案した。

「そうだね。休憩にしよう！」

唯ちゃんがそう言った後、全員、頷いた。

「それなら、私達、差し入れ持ってきたよ。」

明日香はそう言うのと、たくさんのお袋を私達に差し出した。

「ありがとうございます！」

私を含めたバンドメンバー全員がお礼を言った。明日香達が持ってきた差し入れとは、これだった。

「あら、私の店のパンじゃない。いろいろ買ってきてくれてありがとう。みんなに教えてんだね。」

「うん。おいしいからね。」

ちなみに、沙綾ちゃんの店はパン屋を経営していて、どのパンもおいしい。

「うわあ、これが沙綾ちゃんの店のパン？おいしいそう。」

唯ちゃんは沙綾ちゃんのパンを見るのは初めてなので、沙綾ちゃんのパンを見た瞬間、嬉しそうに言った。

「あつ、チョココロネもある。買ってきてくれてありがとう。」

りみりんも嬉しそうに言った。

「りみ先輩、チョコココロネが好きだということを部長に聞きました。」

「お、お姉ちゃん…(恥)」

明日香の言ったことになりみりんは恥ずかしそうだった。

「りみ、練習の合間とかいつも暇なとき、チョコココロネが食べたいって言っていたからね。」

「そ、そうだけど…(恥)」

りみさんの言ったことになりみりんは恥ずかしそうに言った。

「アハハ。まあ、休憩がてら、食べようよ。」

沙綾ちゃんも笑いながらなだめた。そして、休憩と軽食を取ることにした。

「そういうえば、みんな、目標に向かって順調?」

さわ子さんはみんなに聞いた。

「そうですね…少しずつですが、順調な感じですよ。」

私はそう答えた。ちなみに、私達の目標とは…

「武道館LIVEにはまだ遠いですけどね。あと、このLIVEを彼に見てもらいたいです。」

そう。私達の目標とは、武道館LIVEを行うこと。そして、このLIVEを彼に見

てもらおうこと。

「彼つて、もしかして…」

私の言ったことに唯ちゃんは心当たりがある感じで聞いた。

「うん。唯ちゃんは知っているけど、次のLIVE、光輔が来てくれるといいんだけど…」

光輔つて言うのは、曾田 光輔君のこと。私と唯ちゃん、憂ちゃん、和ちゃんの幼馴染だ。

「そういうえば、光輔、どうしているのかな…あれからずっと会っていないのよね…」

実を言うと、私と唯ちゃん、憂ちゃん、和ちゃんは光輔とは光輔が中学を卒業した後、引越していったので、それ以来、会っていないのだ。ちなみに、連絡は取っているのだが、彼からの返信はない。それを私は心配しているのだ。

「そうなんだ…でも、少しずつ近づいているならいいんじゃない？」
紀美は私を励ますように言った。

「そうですね。少しでも夢と目標に近づいているならいいですね。」

私と唯ちゃんは悩みを振り払うように言った。

「そのときは、私達もステージに上がろうね。さわ子。」

紀美さんはさわ子さんに言った。

「紀美。暴走してしまうから、勘弁して…」

さわ子は少し恥ずかしそうに言った。

「さわ子さん、ギターやっていたみたいですけど、ギターを持ったたら、暴走してしまうの
ですか?」

凜々子さんとまりなさんは紀美さんに聞いた。

「そうだよ。ギターを持ったさわ子は大変なんだから…」

紀美さんは思い出しながら、少し笑った。

「もう、紀美!」

さわ子さんは紀美さんの肩を思いっきり叩いた。

「アハハハハ!」

私達は大笑いをした。

「じゃあ、食べ終わったら、また練習して、今日は終わりにしようか?」

私はそう言った。すると、明日香達がこう言った。

「あのさ、お姉ちゃん。次の練習のとき、私達も入っていい?」

「え? 明日香、バンドやっていたっけ?」

「え? つてことは、凜々子さんも始めたのですか?」

「え? つてことは、まりなさんも再開したんですか?」

「私達ってことは、和ちゃんもバンド始めたの?」

「私達ってことは、曽我部先輩も始めたのですか?」

これには私とおたえ、りみりん、唯ちゃん、滯ちゃんも驚いたように言った。

「実は…私達もバンド始めたの。」

「え〜!?!」

明日香達がバンドを始めたことに私達は驚いた。

「私達3人で、Peace*Smile (ピース スマイル) というバンド名です!」

明日香と和ちゃん、恵さんはそう言った。

「私達4人で、4AW's (フォーワーズ) というバンド名です!」

凜々子さん、まりなさん、さわ子さん、紀美さんもそう言った。

「そして、7人になったときは、Master*Keynes (マスター ケインズ) と

いうバンド名です!」

そして、明日香、凜々子さん、まりなさん、和ちゃん、恵さん、さわ子さん、紀美さ

んはそう言った。

「い、いつの間に…」

私達は明日香達がバンドを結成したってことは今、知ったのだ。

「えへへ…まだ結成したばかりだけだね。」

明日香、凜々子さん、まりなさん、和ちゃん、恵さん、さわ子さん、紀美さんは照れたように言った。

「じゃあ、Master*Keynesも含めて、全体練習しようか?」

私は改めてそう言った。

「そうですね!」

明日香達も含めたバンドメンバー全員が賛同した。こうして、私達は夢に向かって、練習を再開したのだった。

東京都のある場所で、私達は喫茶店で働いていた。充実な生活を送っていたが、私はある決断をしていた。しかし、この決断は彼女達に迷惑をかけるかもしれないので、話そうかどうか迷っていた。現在、私は喫茶店で仕事しつつ、これから先はどうしようか考えていた。

「うーん、どうしようかな…」

私こと、保登 心愛(ほと ここあ)は悩んでいた。

「心愛さん、どうしたんですか?さつきからずっと、悩んでいるようですが…」

智乃ちゃんこと、香風 智乃（かふう ちの）は私が悩んでいるのが気になったらしく、私に聞いてきた。

「心愛、ずっと悩んでいるようだし、よかつたら、相談にのるけど。」

理世ちゃんこと、天々座 理世（てでぎ りぜ）ちゃんも気になったらしく、聞いてきた。

「うーん、みんなに話せない内容なんだよね…」

私は悩みながら言った。

「そうなのですか？」

「そうなのか？」

智乃ちゃんと理世ちゃんは不思議そうに言った。すると、喫茶店の扉が開いた。

「こんにちは。心愛ちゃん、どうしたの？何か悩んでいるみたいだけど？」

「心愛。悩み事があるなら、言ってみたら？解決できるかどうかは分からないけど…」

「心愛が悩んでいるなんて、珍しいね。何かあったの？」

「心愛ちゃんが悩んでいるなんて、珍しいね。相談に乗ればいいんだけど…」

入ってきたのは、千夜ちゃんこと、宇治松 千夜（うじまつ ちや）ちゃん、紗路ちゃんこと、桐間 紗路（きりま しゃろ）ちゃん、麻耶ちゃんこと、条河 麻耶（じょうが まや）ちゃん、めぐちゃんこと、奈津 恵（なつ めぐみ）ちゃんが入ってきた。私

が悩んでいるのを外から見ているらしく、私に聞いてきた。

「それが、心愛のやつ、みんなに話せない内容なんだよねって言っているんだよな…」
理世ちゃんが少し困ったように言った。

「そうなの?」

千夜ちゃん、紗路ちゃん、麻耶ちゃん、めぐちゃんは私に聞いた。

「うん…話すと、みんなに迷惑かけるかもしれないし…」

私は悩みながら言った。

「皆さんに迷惑掛かるって…そんなに重大なことなのですか?」

智乃ちゃんは心配そうに聞いた。

「余計に気になるな。話して欲しい。そうじゃないと、こつちの仕事にも支障がでる。」

「そうだよ。私達、友達じゃない?話してみてよ。スツキリするかもしれないし。」

「心愛。悩み事は溜めると体に毒よ。私だって、悩み事は理世先輩に言っているし…」

「心愛。悩み事を話すとスツキリするかもしれないよ。話してみてよ。」

「心愛ちゃん。悩んでいるなら、話して。何とか解決するから。」

理世ちゃん、千夜ちゃん、紗路ちゃん、麻耶ちゃん、めぐちゃんも心配そうに聞いた。

「うーん、分かった…じゃあ…」

私が悩み事を話そうとしたとき、また喫茶店の扉が開いた。

「こんにちは。あら、皆さん、お揃いで。でも、心愛さんの気分があまり良くありませんね。どうかしましたか？」

「心愛さん、どうしましたか？ 悩み事なら、相談に乗ります。」

入ってきたのは、青山さんこと、青山 翠（あおやま みどり）さん、凜ちゃんさんこと、真手 凜（まて りん）さんだ。ちなみに、青山さんは小説家で、凜ちゃんさんは編集社所属で、青山さんの担当だ。2人も同様に外から見えていたらしく、私に聞いてきた。

「あつ、青山さん、凜さん。今から、心愛さんの悩み事を聞くところです。」

智乃ちゃんは2人に言った。

「あら、そうなの？」

青山さん、凜ちゃんさんは私に聞いてきた。

「うん。今から話すところです。」

「悩み事を言ってみて。」

私が言った後、青山さん、凜ちゃんさんはそう言った。

「うん……実は……」

「実は？」

「実は、私、喫茶店の仕事を辞めて、音楽関係をやろうかな……って考えているんだ。」

「えっ!?音楽関係!?!」

私の言ったことにみんな、驚いた。

「うん。なんか音楽やりたくなって思ったんだ。あと、会いたい人がいるんだ。」

「そうなんだ…」

みんな、どことなく腑に落ちない感じで言った。私はその話を終えた時、喫茶店の従業員扉が開いた。

「心愛君、ついに言ったんだね。」

隆弘さんこと、香風 隆弘（かふう たかひろ）さんがそう言った。

「えっ、お父さん、聞いていたんですか?」

智乃ちゃんは驚いたように聞いた。

「ああ、前に心愛君から聞いていてね。親父も聞いているよ。」

「おじいちゃんも聞いていたんですか?」

隆弘さんの言ったことに智乃ちゃんはまた驚いた。

「ああ。両立が出来たらいいけど、難しそうといっていたからな。」

ティツピーこと、香風 弘蔵（かふう こうぞう）「ティツピー」（ていつぴー）さんがそう言った。

「両立しようとしていたのですか…」

「うん…」

智乃ちゃんの言ったことに私は仕方ない感じで言った。

「多分、両立できると思いますよ。」

「えっ、どうして!?!」

香風 智乃の言ったことに私達は驚いた。

「私も…やりたいです。音楽関係のことを。」

「えっ!?!」

智乃ちゃんの言ったことに私達はまた驚いた。

「心愛さん…もし、音楽関係のことをやるとしたら、ここを出て行くんですよね…?」

智乃は寂しそうに言った。

「うん。というか、ここを出て行くことを決めたんだ。みんなに会うことも少なくなる

かな…」

私はそう言った。ここを出て行くことを決めた理由はもしかしたら、彼に会えるかも

しれないと思ったからだ。すると…

「それは、嫌です!心愛さん、ここに残って下さい!」

智乃ちゃんが珍しく、大声で私を引き留めた。

「えっ!?!」

私は驚いた。

「私、心愛さんがここに来てくれて、本当によかったし、うれしかったです!だから、いなくなるなんて、考えられません!絶対に嫌です!心愛さんが両立出来なくて、音楽関係を選んで、ここを出て行くなら、私もついて行きます!」

「心愛、私からも頼む!ここに残つてくれ!私もお前が必要だ!お前がここを去つたら、私もここに在る意味がなくなる!もし、ここを去るなら、私もお前について行く!」

「私も心愛ちゃんがここからいなくなるなんて、嫌だよ!お願い、心愛ちゃん!ここに残つて!友達と会えなくなるのは嫌だよ!もし、それでも出て行くなら、私も心愛ちゃんについて行くわ!」

「私からもお願い、心愛!ここに残つて!あなたがいて、いまの私達がいるんだよ!あなたがいなくなつたら、私達もここに在る意味がなくなるよ!どうしても出て行くなら、私も心愛について行くわ!」

「心愛!私からもお願い!ここに残つて!心愛に教わつたことはいっぱいあるし、教えてほしいこともまだあるよ!それでも、ここを出て行くなら、私も心愛について行く!」
「心愛ちゃん!お願い!私も心愛ちゃんはここにいてほしい!心愛ちゃんにはまだ教わりたいこともあるし、教えたいこともあるよ!それでもここを出て行くなら、私も心愛ちゃんについて行きます!」

「心愛さん！私からもお願いします！心愛さんがここからいなくなったら、新作小説のモデルさんが減ってしまいます！それは私も困ります！だから、心愛さんが必要なんです！どうしてもここを出て行くなら、私もついて行きます！」

「私からもお願いします！心愛さん！心愛さんがいなくなったら、翠ちゃんの仕事に影響が出てしまいます！そして、私も心愛さんが必要です！それでもここを出て行くなら、私もついて行きます！」

彼女達は必死に説得した。

「み、みんな……（涙）」

私は泣きそうだった。嬉しいけど……心配なことがある。

「心愛君はどうするんだい？みんなの思いを聞いて。」

隆弘さんは私に聞いてきた。

「少し待つて下さい。智乃ちゃん、千夜ちゃん、喫茶店はどうするの？」

私は智乃ちゃんと千夜ちゃんに聞いた。心配なこととは、このことだ。

「喫茶店は心愛さんの行く所に移転します！」

「喫茶店は心愛ちゃんが行く所に移転します！」

智乃ちゃんと千夜ちゃんはきつぱりと言った。

「理世ちゃんと紗路ちゃんもバイトどうするの？」

私は理世ちゃんと紗路ちゃんにも聞いた。

「お前の行く所でするよ!もちろん、智乃の所だな!」

「あなたの行く所でするよ!または千夜の所でするよ!」

理世ちゃんと紗路ちゃんもきっぱりと言った。

「麻耶ちゃんとメグちゃんも学校はどうするの?あと、智乃ちゃん、理世ちゃん、千夜ちゃん、紗路ちゃんも?私は転校手続きは済ませたよ。」

私は学校に通っているメンバーに聞いた。

「えっ!?転校手続きも済ませたの!?!」

私の言ったことに彼女達は驚いた。

「うん。出て行くことを決めたからね。」

「そうだった…でも、それは大丈夫!」

学校に通っているメンバー全員がきっぱりと言った。

「なんで?」

「心愛さんがそうするなら、すぐに転校手続きしますから!」

「心愛がそうするなら、すぐに転校手続きするから!」

「心愛ちゃんがそうするなら、すぐに転校手続きするから!」

学校に通っているメンバー全員はそう言った。

「そ、そう…おじさん、みんな、こんなこと言っているけど、大丈夫?」

私は戸惑いながら、隆弘さんに聞いた。

「ああ。私は大丈夫だよ。親父はどうだ?」

隆弘さんは承諾した。そして、ティツピーに聞いた。

「わしも大丈夫じゃ。」

ティツピーも承諾した。

「じゃ、じゃあ…お父さん、おじいちゃん、もしかして…(涙)」

智乃ちゃんは涙を流しながら言った。

「ああ。心愛君の行く所に喫茶店を移すとするよ。これなら、心愛君も両立出来るだろう。」

「ああ。心愛の行く所に喫茶店を移そう。これなら、心愛も両立出来るじゃろう。」

隆弘さんとティツピーの言ったことに私は嬉しかった。

「…これで、喫茶店と音楽関係が両立出来るなら、私は、みんなと一緒に東京の都会に行くよ!私もみんなを置いていくのは、嫌だからね!」

私はみんなにきつぱりそう言った。

「心愛さん…!」

「心愛…!」

「心愛ちゃんー!!」

そう言った瞬間、みんなが泣きながら私に抱きついてきた。

「心愛君が都会に行くことを決断したか。都会で喫茶店か…」

「都会で喫茶店とは、楽しそうじゃな。」

隆弘さんとティッピーも嬉しそうに言った。

「そういえば、心愛さん。お姉ちゃんにはこのことは伝えたのですか？」

智乃ちゃんは私に聞いてきた。

「うん。手紙で伝えたよ。そろそろ届いているはずんだけど…ただ…」

「ただ？」

「私、喫茶店と音楽関係を両立するって決めたんだけど、手紙には、喫茶店の仕事を辞めて、音楽関係をやるって書いてあるんだよね…」

「心愛、今、どうしているのかな? 喫茶店で元気に働いているのかな?」

一方、私の実家、保登ベーカリーでは私こと、保登 萌香(ほと もか)は仕事をしつつ、妹のことを考えていた。

「大丈夫じゃない？この間も元気だったし。」

私のお母さん、保登 羅手（ほと らて）は大丈夫そうに言った。

「そうだね。」

私がそういうと、家のインターホンが鳴った。

「保登さん。お届け物です。」

「あつ、お母さんが取ってくるね。は〜い。」

お母さんは郵便屋さんから届け物を受け取ってきた。

「お母さん、届け物は何？」

私はお母さんに聞いた。

「手紙よ。心愛からよ。」

心愛からの手紙に私は心が弾んだ。

「心愛から!?!見せて!」

「ちよつと待つてね。」

お母さんは封筒の中にある心愛の手紙を取り出した。

「その手紙、貸して。」

お母さんから手紙を受け取った後、私はその手紙を読み始めた。

『お姉ちゃんとお母さんへ。私はある決断をしました。私は喫茶店の仕事を辞めて、音

楽関係をやることにしました。そして、実家に戻ることも少なくなると思います。迷惑をかけて、すみません。なるべく時間を作って、戻れるようにはします。お店の方、頑張ってください。それでは、お元気で。心愛より』

……

「え〜!?!」

この手紙を見て、私達はびっくりした。

「ど、どういう事!?!な、なんで?!」

「な、なんで喫茶店を辞めて、音楽をやることにしたの!?!そして、実家に戻ることが少なくなるって…」

私達はあたふたするばかりだ。

「ちよっと、智乃ちゃん所の喫茶店に電話するわ!心愛がいてくれるといいんだけど…」

「うん。お願い!」

私は急いで智乃ちゃんの喫茶店の所に電話をかけた。

チリリリリン、チリリリリン…

「あつ、私出るよ。お姉ちゃんからだと思うんだ。」

私はそう言うと、電話に出た。

ガチャ

「はい。心愛です。」

『あつ、心愛!』

「あつ、お姉ちゃん。手紙読んだ?」

『読んだよ!あの手紙、何なの!?!』

「その手紙、少し、訂正があつて…」

『何!?!』

「喫茶店の仕事は続ける。音楽関係と両立することにしたの。ただ、実家に戻ることが
少なくなるのは、本当なの。」

『実家に戻ることが少なくなるのは本当なの!?!』

「あつ、お母さん。うん。それは本当。」

『そ、そうなんだ…』

「うん。ごめんなさい。」

『…そう。だったら…』

『そうだね!』

「えっ、何するの?」

『私達も心愛の行く所にお店を移転します!』

「え、えく!? ちよ、ちよっと、何言っているの!? お姉ちゃん、お母さん!」

『だって、家族みんな、都会に移動するんでしょ?』

『それに、都会なら、売り上げも伸びそうだし。』

「そ、そうだけど…」

『なら、私達も都会に行きまーす!』

『心愛、都会でもよろしくねー!』

「う、うん…」

チャリン

「萌香さん、都会に行くんですか?」

智乃ちゃんは私に聞いてきた。

「うん。お母さんも含めて、お店ごと移転するみたい…」

私は少し戸惑いながら言った。

「いいんじゃない? みんなが集まるなら。それはそれで楽しそうだし。」

「そうだよ。みんなが集まって来るなんて、楽しくなりそうじゃない?」

「うん。みんなが集まるのは悪くないんじゃない?」

「そうだよ。みんなが集まるのは楽しいよ。」

「うん。みんなが集まった方が楽しいよ。」

「そうですよ。皆さんが集まると楽しいし、新作小説の参考になりますし。」

「はい。皆さんと一緒にいるのは、楽しいですからね。」

彼女達は問題ない感じで言った。

「みんな…：そうだね！みんなと一緒にいるのは楽しいし、これからも楽しくなりそう！
これからもよろしくね！」

私は改めて挨拶した。

「はい！心愛さん！これからもよろしくお願いします！」

「ああ！心愛！これからもよろしくな！」

「うん！心愛ちゃん！これからもよろしくね！」

「うん！心愛！これからもよろしくね！」

みんなが改めて挨拶をした。

「あつ、そういえば…」

理世ちゃんが思い出したように言った。

「彼に会う為とも言っていたな。彼って誰なんだ？」

「あつ…：えつと…：曾田 光輔君って人なんだ。私の小学校の先輩で、彼が小学校を卒業

したときに引越して、それ以来、会っていないんだ。連絡はしているんだけど、返事がないんだ…それが気になって…」

私は懐かしむように言った。

「じゃあ、その曾田 光輔って人も探そう!」

理世ちゃんがそう言った後、他のみんなも領いた。

「みんな、ありがとう!」

私はお礼を言った。こうして、私達は都会に引越すことが決まった。新しい未来に向かつて。そして、彼に会うために…

く次回に続くく

男子と女子の思いのすれ違い

女子が東京に集まって、彼らを探しに行っている時、男子は…

「まあ、汚い部屋だけど、どうぞ。」

「ああ。すまないな。」

俺は修司を家に入れた。あの後、俺と修司は夕食の買い物した後、俺の家に向かったのだ。

「他のメンバーもそろそろ着く頃かな？」

「多分、そうじゃないか？」

俺と修司は軽い会話を交わした。他のメンバーも買い物してから戻っているはずだ。さて…

「修司。今後はどうするんだ？」

俺は修司に聞いた。荷物からして、家出の可能性が高い。

「そのことで頼みがあるんだ。」

「ん？なんだ？」

俺は修司の次の言葉を待った。

「ここに住みたいんだ。急な話で申し訳ない。」

「はっ!?!住む!?!何故!?!」

修司が言った言葉に、俺は驚いた。まさか、住むなんて言い出すとは思わなかった。俺は修司に理由を聞いた。

「実は…あいつらには黙ったままなんだけど、俺、転校届を出したんだ。」

「て、転校届!?!東京の高校に転校するのかわ!?!」

修司が言ったことに俺はまた驚いた。まさか、そんな深刻な状況になっているとは…

「ああ。光輔って、中央大学に進学するんだよね？」

「ああ。推薦で中央大学に行くことにしたんだ。高校もあるし…ってまさか…」

「そう。中央高校に転校することにしたんだ。あつ、転入試験も受かっているよ。」

「まじか…そうなのかわ…」

修司が中央高校に転入することになったのは意外だった。

「やはり…あいつらとの関係は深刻みたいだな…」

「お察しの通りで…って、ちっ。またか。」

修司は舌打ちしながら電話を取りだした。

「待て。修司。」

「どうした？」

電話を切ろうとした修司を俺は制止した。

「俺が出るわ。考えがある。」

「光輔が？ああ…」

俺は修司から電話を受け取ると、通話ボタンをタップして、電話に出た。

「はい。もしもし。」

『えっ…？修司…じゃない…誰？』

電話の声に俺は聞き覚えがあつた。

「その声は…葵か？」

『まさか…光輔？』

「ああ、そうだ。久しぶりだな。」

電話の相手は葵だった。ちなみに、修司と葵はいとこで、俺と葵もいとこなのである。

『どうして、光輔が修司の電話を？』

「それには訳がある。話すとき長くなるから省略する。んで、俺に用か？」

『それもそうだけど…修司に変わってくれる？』

「生憎だが、修司は出られる状況じゃないんだ。前も電話してきたら？」

『それはあたしじゃないわ。このみよ。』

「はっ?このみなのか?」

俺は携帯を少し離すと、修司に確認した。

「修司。あのとき、そうなのか?」

「ああ。そうだよ。」

修司は投げやりみたいな感じで言った。

『近くに修司いるじゃない!?何で、出ないの?』

「このみが電話したときも出なかつただろ?ていうか、あのとき、すぐに電話を切つたみたいだし、今さっき、この電話に出ようとしたときに舌打ちしたし:あんなたち、何をしたんだ?」

俺は電話の向こうにいる葵に聞いてみた。

『:え?ど、どういうこと?』

「修司が結構深刻な状況なんだ。ここまで修司が満身創痍になっていとは思わなかつた。あんなたちなら何か知っているような気がするんだ。」

『えっ!?ちよ、ちよつと待って。いきなりそんなこと聞かれても、分からないよ!私は修司に話したいことがあるから電話しただけなのよ!』

「話したいことがある…ね。」

俺はため息をつきながら言った。

『…修司のことについて、何か知っているみたいね。先にそつちについて教えてもらおうかしら?』

「知らないって言ったら、嘘になるからな。まあ、俺も今、衝撃の事実を知ったからな…修司、言ってもいいか?」

俺は修司に確認した。修司は頷いた。

「じゃあ、修司の近況、報告するぞ。」

俺は一息ついてから、修司のことについて知っていることを全て話した。

「修司が転校することになった。家出じゃなくて、どうやら、引越したらしい。そして、距離を置きたいとのことだ。」

『えっ!? ちよ、ちよつと待って!?! どういうこと!?!』

「そのままの意味だ。要するに、もう会いたくないってことだ。」

『あ、会いたくないって…そ、そんなの信じられないでしょ!?! 修司がそんなこと言うはずがないわ!』

「と思うだろうな。だが、これは本当のことだ。俺が嘘をつきたくないのは知っているよな?」

『…そ、それはそうだけど…でも、そんなの…』

「大体、家に修司の私物がなかった時点で、察しがついていたと思うが？」

『…何となくは思っていたけど、まさか、本当にこんなことをするとは思わなかったわ…』

「俺だって、正直、驚いたわ。まさか引越すなんて思わなかったし。」

『だけど、私達に会いたくないって言うのは、信じられない。それは修司から説明してほしい。』

「…今の状況で修司が電話に出ると思うか？」

『…それは…』

「出ないだろうね。んで、今更なんだが…」

『な、何?』

「もしかしてだが、今、東京にいる？」

『えっ!? どうして分かったの!?!』

「駅の放送で分かったわ。そして、そこは俺の最寄り駅…見当はついていたらって事か…」

「えっ、葵、東京にいるのか!?!」

修司がここで会話に入ってきた。

「みたいだ。俺の最寄り駅にいるみたい。」

「…まじか…なあ。光輔。」

「ん？どうした？」

「…電話、変わってくれないか？」

「…いいのか？」

「ああ。少しだけ、話したい。」

「…分かった。」

『どうしたの？』

葵が心配そうに聞いてきた。

「…今から、修司に変わる。あまり刺激を与えるなよ。」

『えっ!？』

俺はそう言った後、携帯を修司に渡した。

「…葵。何のようだ？」

『修司…光輔の言ったこと…嘘じゃないよね？』

「嘘な訳がない。全て事実だ。」

『ど、どうして…?』

「俺は俺で考えたいことがあるんだ。それだけのことだ。」

『考えたいことって…それだけで私達に会いたくないって…何で?』

「それは自分が一番知っているはずだ。それ以上は言わないよ。んじゃ、光輔に変わるわ。光輔自身、話したいことがあるみたいだ。」

『あつ、ちよつと…』

修司はそう言った後、携帯を再び俺に渡した。

「変わった。んで、修司が言っていた話したいことだが…」

『何?』

「どうやら、他にも俺の知り合いが来ているみたいだね。俺が何か知っているみたいだから、俺に会って聞きたいと。」

『ええ。そうだけど?』

「なら、ちよつどいい。明日、大丈夫か?大丈夫なら、13:00に東京駅、銀の鈴広場に集合。俺からメンバーを指定する。いいか?」

『…分かったわ。』

「それじゃあ、また明日。」

そう言つて、俺は電話を切り、携帯を修司に返した。

「…さすがだな。ここに住むことは黙ったままにしたのか。」

「ああ。でも分かっているはずだ。修司がここに住むことを…」

「どうやら、そうみたいだな…」

何となくだが、葵は状況を察しやすいので、このことを知りそうだ。

「さてと。俺は明日、行つてくるよ。修司、留守番、いいか？」

「分かった。明日、気をつけてな。」

「了解。じゃあ、少し遅くなつたけど、夕飯作るか。」

「そうだな。」

俺と修司は夕飯の準備をしたのだつた。ちなみに、その後のことだが、東京に住んでいるメンバーを除く他のメンバーも修司と同様に引越すこと、転校に関しては春希、冬弥、和樹、貴明もそうしたことが分かつた。

翌日、俺は13:00の30分前に東京駅に来ていた。東京駅に行くがてら、電車の写真を撮っていた。ちなみに、俺は鉄道ファンである。

「さて、時間通りに来るかな…?」

そういつたとき、見慣れた女子の集団がこつちに向かつてきた。

「思つたよりも早かつたな…:そして、久しぶり。」

集まつた女子メンバーは依緒、小春、由綺、はるか、瑞希、あかり、環、優季、(柚)

このみ、美智、兎姫、める、汐、ゆきの、奈々、彩乃、有紗、白石姉妹、（瀬）このみ、天音、五ヶ谷姉妹、唯梨、まゆり、結希、ゆずの27人だ。これが俺が指定したメンバーだ。

「久しぶりね。あんたに聞きたいことがあってね。全部答えてもらおうよ。」

会って一番、依緒がそう言った。

「まあ、答えられる範囲なら。ここで話すのもどうかと思うから、指定した話し合いの場に行くよ。」

俺はそう言って、彼女達を話し合いの場に連れて行ったのだった。

連れて行った場所は東京駅に近い場所の喫茶店。俺の男子の親友が全員集まった場所だ（第1話参照）。

「じゃあ、始めようか。俺について聞きたいことがあるみたいだな。まあ、見当はついてるけど、一応、聞こう。」

俺は余裕たっぷりそう言った。

「そうは言っても、全員、同じ事よ。今の状況、教えてほしいの。」

依緒は俺のことを見透かしたかのようにそう言った。

「やっぱりね。そういうことだろうと思った。んじや、簡単に説明するか。」

俺はそう言った後、彼女達に説明した。

「春希、冬弥、和樹、浩之、貴明、和馬、九郎、大智、亮、茂、市生、真、修司、総司、昌晴、諒一のことだな。葵には話したけど、全員、転校と引越すことになった。そして、もう会いたくないとのことだ。」

「えっ!？」

葵を除いて彼女達は驚いた。予想通りの反応だ。

「ちよ、ちよつと待って…嘘だろ…?」

「依緒。俺が嘘をつきたくないのは知っているよな?」

「そ、そうだけど…信じられないよ!」

依緒は戸惑った状態で俺に言った。

「そんな…先輩がそんなこと…言うはずが…ないよ…」

「冬弥君…が?ど、どうして…?」

「そんな…本当なの?」

「そ、そんな…和樹君が?」

「そ、そんな…浩之ちゃんが?」

「そ、そんな…タカ君が？」

「嘘でしょ…？タカ坊が？」

「そ、そんな…貴明さんが？」

「和馬も大智もそんなこと言うなんて…あり得ないよ！」

「信じられないよ！大智がそんなこと言うなんて！」

「ほ、本当だとしたら、信じられないよ…」

「信じられないよ！亮君がそんなこと言うはずがないよ！」

「な、なんで…？どういうこと…？」

「茂が…？そんな…信じられない！」

「う、嘘でしょ…？市生が…？どうして…？」

「ど、どうして…そんなことをするなんて…」

「信じられないわ…？どうしてそんなことを…」

「そんな…お兄ちゃん…なんで…？」

「まさか…そんなこと言ったなんて…信じられない…」

「な、なんで！？そんなの、信じられないよ！」

「そんな…ソウ君がそんなこと言うなんて、信じられないよ！」

「嘘だよ…お兄さんがそんなこと言うなんて、あり得ないよ！」

「あにいがそんなこと言うなんて、あり得ないよ！」

「信じられないよ！ハルがそんなこと絶対言わないよ！」

「あり得ないよ！諒一君がそんなこと言うなんて、信じられない！」

他のメンバーも戸惑っていた。

「そうだろうな。だが、さつきも言ったが、俺が嘘をつきたくないのは知っているよな？」

「そうだけど…」

俺の言ったことに彼女達は口ごもる。

「まあ、俺だって昨日知ったし、葵もそうだし。」

「葵。知っていたの？」

つばめは葵に聞いた。

「ええ。昨日、光輔と電話で話したのよ。そのときに知った。このことを…」

「そうなんだ…」

葵が言ったことにつばめは納得したみたいだ。

「光輔。1つだけ、お願いがあるんだけど…」

「…何となく分かった気がするんだが、一応、聞こう。なんだ？」

環が俺に1つの頼みを言った。

「一回だけでいい。タカ坊に会わせて。本当のお願いよ。」

「…正気か？分かつているはずだ。修司だけじゃない。貴明も他のメンバーもそうだとっても会う気がないんだ。」

「それは分かっている。だから、貴方から説得してほしいのよ。」

「はあ!!冗談だろ!!春希達の傷を深く抉るのは勘弁してほしいんだけど…」

さすがに呆れた。何故、傷を深めるようなことをしなければならぬんだ…

「それでも、私達は思いを伝えたいの!ほんの少しだけでいい。タカ坊に会って話したいの!」

「それはあたしもだ!春希に会わせてくれ!」

「私もよ!冬弥君に会わせて!」

「私からもお願い!和樹に会わせて!」

「私からもよ!浩之ちゃんに会わせて!」

「お願いだ!和馬と大智に会わせてくれ!」

「私からもお願い!大智に会わせて!」

「お願い!九郎君に会わせて!」

「お願い!亮君に会わせて!」

「私からもお願い!茂君に会わせて!」

「私からもお願い！市生君に会わせて！」

「お願いです！真さんに会わせて下さい！」

「お願い！修司に会わせて！」

「お願い！ソウ君に会わせて！」

「私もお願いだ！ハルに会わせてくれ！」

「お願い！諒一君に会わせて！」

彼女達は俺に手を合わせて、必死にお願いをした。はあ…全く…

「…ちよつと待つてろ。」

俺はそう言うと、携帯を取りだし、修司に電話をかけた。

「修司？すまない。頼みがあつてな…」

『どうした？向こうで何かあつたのか？』

「ああ…彼女達、どうしても会つて、話したいことがあると。」

『…大変なことになつていること、心中察する。やれやれ…光輔の気持ち考えてくれ…』

「そこに同感。で、どうする？」

『…どうしても何だろ…分かつたよ…』

「…迷惑かけて、すまない。」

『いや、光輔は悪くないよ。ただ、条件がある。』

「俺が一緒であること、その他のメンバーも一緒って事か？」

『そうだ。言うと思っていた？』

「何となくな。どうする？」

『明後日でいいんじゃないかな？』

「分かった。じゃあ、伝えておく。そっちは任せた」

『了解。それじゃあ。』

「ああ。後でな。」

俺はそう言うと、通話を終えた。

「会話の内容から分かかっていると思うが、一応、会うことにしたそうだ。修司以外は分かんが、多分、来るだろう。ただし、俺も付いていくけどな」

「…ごめん。ありがとう。」

葵はすまなさそうに謝った。

「…全く。無理矢理みたいな感じだったよ…期待はするなよ。あの状況じゃ、受け入れる可能性は0だな…」

俺はため息をつきながら言った。

「…分かっている。」

彼女達は落ち込んだ様子で答えた。

「んじや、明後日な。代金は自分で払えよ。」

俺はそう言った後、喫茶店を後にした。

そして、2日後。俺は春希達を引き連れて、由綺が使っているレッスンスタジオに来た（第2話参照）。

「あいつら、全員待っているはずだ。一応、春希達に任せるけど、何かあったら、俺に振ってくれ。」

「分かった。」

俺は春希達にそう言うと、彼女達が待っている部屋に入った。

「全員、来ているみたいだな。」

「…」

彼女達は緊張した面持ちで待っていた。

「…後は任せる。」

俺はそう言うと、1歩後ろに下がった。

「…俺達にどうしても伝えたいことって、なんだ？」

春希は不満そうに彼女達に言った。

「…どうして、このようなことをしたの？」

雪菜は不安な様子で聞いた。

「…自分が一番分かっているはずだが、分からないなら、俺達の口から言った方がよさそうだな…」

「そのようだな…」

春希がそう言った後、春希以外の男子もそう言った。

「…分からないから聞いているじゃん。何？」

雪菜は不満な感じでそう聞いた。

「あんた達が俺達に好意を持つているんだろ？」

「うん。私達はあなたたちのことが好き。それだけよ。私達はその思いを伝えに来ただけよ。」

「それだよ。そして、俺達はその思いを受け取るつもりはない。」

「えっ!? そ、そんな…」

春希が言ったことに彼女達は驚いた。

「…つまり、私達が原因って事…?」

由綺は信じられない様子でそう呟いた。

「そうだ。由綺達が向けていた好意が俺達にとつては、今は苦痛なんだ。」

冬弥は苦虫を噛み潰したように呟いた。

「そんな…だからって、こんなことする?」

「それでもしなければ、俺達の心を抉る気だろ?」

瑞希が言ったことに和樹は少しいらだつたように言った。

「…そんなこと…」

「それが俺達にとつて不安でもあるんだよ。だから、こうするしかなかった。」

口ごもったあかりの言葉に浩之は核心を突くように言った。

「だけど、それじゃあ、私達はどうなるの?あなたの決断は私達の心を傷つけることになるのよ。それでも、こういうことをするの?」

「待て。環。」

「ここで俺は制止した。」

「最後の言葉、揺さぶりをかけている。傷つける気か?」

「…だけど。」

「俺の親友を傷つける行為は勘弁してくれ。言うべき言葉を選んで言ってくれ。」

「…」

環は何も言えなかった。全く、傷つけるのは勘弁してほしいのだが…

「すまん。貴明。自分の思ったことを構わずに言ってくれ。」

俺は軌道を修正した。

「いや。さっきのは大丈夫だ。だが、たとえば、そのようなことになっても、俺達は別に構わない！」

「それに関しては貴明に完全同意だ！」

貴明がそう言った後、他の男子も同時に言った。

「……」

その言葉に彼女達は絶句した。

「……そんな……こんなの……」

聖良はあつけにとられたような感じで呟いた。

「それでも、俺達が決断したことだ。」

和馬はきつぱりと言った。

「……じゃあ、私達は何だったの？」

兎姫は消え入りそうな声で言った。

「今はもう恋人ではない。その好意がなければ、親友って言えるかな……多分。」

大智ははつきり言ったが、少し含みがある感じに言った。

「九郎さん……私達はこれからどうすればいいんですか？」

水織は不安そうに言った。

「それは自分たちで決めてほしい。ただ、俺達の接触は出来るだけは避けてほしい。」

九郎は彼女達の不安を払うように、しかし、自分たちの思いを尊重してほしいって事を伝えた。

「亮君…今後はどうするの？」

花音はそう聞いてきた。

「俺達は東京で元気に過ぐすとするよ。その辺は大丈夫だよ。」

亮は問題ないように答えた。

「そんなの嫌だよ…茂君がいないなんて…」

ゆきのは悲しそうに言った。

「それでも、決めたことなんだ。変わりはない。」

茂はきっぱりと言った。

「市生君…本当にこれでいいの？」

ちはるは不安そうに聞いた。

「ああ。これでいい。自分の決めたことに間違いはない。」

市生は迷いなく、言った。

「真君…考え直してくれない？」

月夜は懇願した。

「決めたことを変えるつもりはない。考え直すつもりはない。」

真は月夜のお願いを断った。

「修司…あなたがいないのは私達はとても困るよ…戻ってきて…」

伊月は消え入りそうな声で懇願した。

「すまない。それでも決めたんだ。ここに住むことを。戻るつもりはない。」

修司はきつぱりと断った。

「ソウ君…本気なの？本当に困るよ…」

奏撫は泣きそうな声で言った。

「本気だ。自分で決めたことだし、変えるつもりはない。」

総司はきつぱりと言った。

「昌晴君…会えなくなるのは私は嫌だよ…」

千桜はもどかしい感じで言った。

「それでも、俺達の考えで、そう決断したんだ。仕方ないことだ。」

昌晴は自分の意思で決めたことを改めて言った。

「諒一君…どうしてもこうするしかなかったの？」

愛理は何とか彼らの考えを変えてもらいたいと頼むように言った。

「どうしてもこうするしかなかったんだ。今の状態を考えると仕方ないんだ。」

諒一は言葉通り、仕方ない感じで言った。

「やはりな。結果的にそうだろうね。彼らが満身創痍なのは俺も聞いて、分かったことだからな。」

「…」

俺の言ったことに彼女達は黙るしかなかった。

「そつとしといてやれ。これでもあんたたちのためだ。」

俺は彼女達を諭すように言った。

「…そんなの…出来ないよ…」

彼女達はまだ納得出来ないようだった。

「それだと、彼らを苦しめるのは分かっているだろう？」

俺は呆れ半分で言った。

「…分かっている。分かっているけど…それでも…!」

「それで、彼らの心が壊れたら、身も蓋もない。彼らの心を壊すのはやめてくれ。頼む。」

俺は彼女達の言ったことは分かっていたけど、彼らの心が壊れてしまうのは勘弁してほしいのだ。

「…私達じゃあ、彼の心を直せないの？」

「直せないな。今の状態では。」

「そ、そんなあ…(泣)」

彼女達は泣きそうだった。

「仕方ない。だが、すまない。分かってくれ…！」

俺は断腸の思いで言った。

「…行くぞ。」

「…分かった。」

「…うっ…(涙)」

そう言うと、俺らは後にした。俺らがここを後にするとき、彼女達が泣いているのが分かった。悲しませてしまったのは自覚している。だけど、これは俺達のけじめなんだ。今はいえることは出来ない。今後もし一緒にいるかどうかは分からない。それは俺達の決断次第。その答えはしばらく先になりそうだ…

「さて、今後、どうする？こっちに引越してきた荷物整理、転学、入学等で忙しくなるし…」

レッスンスタジオを後にしてしばらく経った後、俺は都外から引越してきたメンバーに聞いた。

「まあ、光輔の言ったとおり、荷物整理等かな?」

和馬がそう言った後、他の都外から引越してきたメンバーも同様に頷いた。

「そうか。それが終わってなければ、手伝おうか?」

俺は都外から引越してきたメンバーに聞いた。

「おつ、助かる。」

都外から引越してきたメンバーはそう言った。

「分かった。じゃあ、早速……?、あれは……」

俺は誰の荷物整理を手伝いに行くかを言おうとした時、ある喫茶店に見覚えのある人がいた。

「あれ? 赤羽さん、武内さん。こんな所で会うとは珍しいですね。」

「あつ、光輔さん。お久しぶりです。どうしましたか?」

喫茶店のテラス席で話をしていたのは、赤羽 謙二さんと武内 俊介さんだ。確か、春香達と卯月達のアイドルプロデューサーをしている人だ。

「いや、2人がここにすることが気になりましたね……2人はこんな所でどうしたんですか?」

俺は2人に確認をした。

「ああ…実はですね…」

赤羽さんはそう言うのと、机に出していた資料を俺に見せた。

「新事務所の設立…ですか。つて、新事務所？」

新事務所の字を見て、俺は疑問が生じた。

「あれ？赤羽さんは765プロダクション事務所、武内さんは346プロダクション事務所に所属していませんでしたか？」

俺は2人に聞いた。

「実は、昨日、退社したんです。」

「へっ？退社!？」

2人の言ったことに俺は驚いた。

「急すぎませんか？さすがに彼女達も驚いていたでしょう？」

「ええ。驚いてはいましたね。彼女達には内緒で辞めましたので。」

「内緒にですか？」

彼女達に内緒で辞めていったことに俺はまた驚いた。

「彼女達にはその事務所で活躍してほしいので…」

「ああ。確かに…」

2人にそう言われて、俺は納得した。確かに事務所を移って、人気をそのまま維持できるかどうかは難しいのだ。ましてや新事務所だ。いきなり人気にはなれない。もし、なれるのなら、町中の至る所に新しい事務所が出来まくっている。

「ところで、光輔さんの後ろにいる方々は？」

2人は俺の後ろにいる親友達を見た。

「ああ、申し遅れました。初めまして。峰城大学文学部の3年生、北原 春希です。」

「同じく、峰城大学経済学部の3年生、飯塚 武也です。」

「同じく、峰城大学文学部の3年生、早坂 親志です。」

「初めまして。峰城大学附属高校の3年生、小木曾 孝宏です。」

「初めまして。夕凧大学理工学部の2年生、藤井 冬弥です。」

「同じく、夕凧大学理工学部の2年生、七瀬 彰です。」

「初めまして。音美大学美術学部の1年生、千堂 和樹です。」

「同じく、音美大学美術学部の1年生、九品仏 大志です。」

「同じく、音美大学美術学部の1年生、立川 雄蔵です。」

「同じく、音美大学美術学部の1年生、縦王子 鶴彦です。」

「同じく、音美大学美術学部の1年生、横蔵院 帯磨です。」

「初めまして。姉ヶ桜高校の3年生、藤田 浩之です。」

「同じく、姉ヶ桜高校3年生の佐藤 雅史です。」

「初めまして。妹ヶ桜高校2年生、河野 貴明です。」

「同じく、妹ヶ桜高校2年生、向坂 雄二です。」

「初めまして。群馬県で鳴神流という格闘技を教えています、帯刀 和馬です。」

「同じく、鳴神流という格闘技のお手伝いをしています、五明 孝明です。」

「同じく、鳴神流という格闘技のお手伝い兼テレビ局の仕事しています、御座入 紀洋です。」

「初めまして。間ノ島学園の高校2年生、幸塚 大智です。」

「同じく、間ノ島学園の高校2年生、敷島 秀彦です。」

「同じく、間ノ島学園の高校3年生、八斗島 清司です。」

「初めまして。埼玉県の洋菓子店マシユマロ・クロールのパティシエリーダー、山田 九郎です。」

「同じく、マシユマロ・クロールの店員兼ホテル経営、ガトー・ネージュユです。」

「同じく、マシユマロ・クロールの店員兼神扇学園の高校2年生、遊馬 亮です。」

「同じく、神扇学園の高校2年生、毛呂 久太郎です。」

「同じく、神扇学園の小学4年生、川越 太一です。」

「初めまして。垣楠学園の高校2年生、元山 茂です。」

「同じく、垣楠学園の高校2年生、中津 幸太郎です。」

「初めまして。江子田学園の高校2年生、江田 市生です。」

「同じく、江子田学園の高校2年生、堀之内 清詞です。」

「初めまして。喫茶店モデュロールの店員兼有杜美術学園の高校2年生、浅間 真です。」

「同じく、有杜美術学園の高校3年生、岡 陽太です。」

「初めまして。望花学園の高校2年生、瀬戸 修司です。」

「同じく、望花学園の高校2年生、日比野 浩一です。」

「初めまして。光葉台学園の高校2年生、立石 総司です。」

「同じく、光葉台学園の高校2年生、平山 圭助です。」

「初めまして。桃櫻井学園の高校2年生、市原 昌晴です。」

「同じく、桃櫻井学園の高校2年生、佐野 幸大です。」

「初めまして。四季創学園の高校2年生、織原 諒一です。」

「同じく、四季創学園の高校2年生、岩出 清貴です。」

「都外の方もいるんですね。初めまして。プロデューサーの赤羽 謙二です。」

「同じく、プロデューサーの武内 俊介です。」

俺の後ろにいた親友達が2人に軽い自己紹介をした後、2人も軽く自己紹介をした。

「全員、俺の幼馴染で親友です。都外の方もいますけど、3月から東京に住むそうです。」
俺がそう言うのと、彼らは頷いた。

「なるほど。そうなんですか。ん？もしかしたら…」

2人は納得した後、何か思いついたのか、2人で少し話した後、俺達に言ってきた。
「あゝ、もし、よろしければなのですが…」

「はい？」

「よろしかったらですが…アイドルになっていただけませんか？」

「俺達ですか？」

「この提案に俺達は驚いた。」

「ええ。現在、アイドルを探していますので…」

「そういうえば、新事務所設立するから、アイドルはいないか。ならば…」

「なるほど…。それだったら、その件、俺でよければ、喜んで引き受けましょう。」

俺は少し悩んだ後、2人の提案を引き受けた。

「お前達はどうする？」

俺は親友達に確認した。

「光輔が引き受けるなら、俺も引き受けるよ。俺達もアイドルの仕事に興味あるからね。」

春希が言った後、他のメンバーも頷いた。

「ありがとうございます！それでは、仮なのですが、この名簿表に名前をお願いします。」
俺達は仮の名簿表に名前を書いた。

「それでは、これからよろしくお願いします！」

俺達は一斉にそう言った。こうして、俺達は新しい一步を踏み始めた。

〜次回に続く〜

久しぶりの再会と隠されていた思い

「さて、その資料のことだけど…ちよつと、その場所まで行きませんか？」

俺は彼らに提案をした。

「えつと…時間は大丈夫なのですか？」

赤羽さんと武内さんは俺らに聞いた。

「今のところは問題ありません。」

俺がそう言っていると、彼らも頷いた。

「分かりました。では、行きましょう。」

俺達は新事務所の候補地に出かけた。

それから数時間後、辺りが暗い中、俺達は帰路につくところだった。

「見た感じ、いくらか候補を絞れてよかったじゃないですか？」

俺は赤羽さんと武内さんに言った。

「そうですね…絞れただけ、何よりの成果ですね。」

「ですね。あなたたちがいなければ、絞ることが難しかったかもしれないね。」

赤羽さんと武内さんはお礼を言った。実際、2つまで絞れたのだ。

「さて、問題はどこにするかですが…おや？」

俺はふと、あるものに目が行った。

「光輔。どうした？」

浩之が俺に聞いてきた。

「ん？いや…ここでLIVEがあるのかって…」

俺はこの会場でLIVEをやることに目が行ったのだ。

「どうやら、1000円で見られるらしい。どうする？何か他のアイドル候補が見つかるかもしれないが…」

俺は赤羽さんと武内さんに聞いた。

「そうですね…参考がてら、見ましようか？」

「ええ。そうですね。」

赤羽さんと武内さんはそう言った。

「お前達は どうする？」

俺は親友達に聞いた。

「光輔は見たいのか？」

貴明は俺に聞いた。

「まあ…な。気にならないと言えば、嘘になるし、他にもアイドルの候補が見つかるかも
しれないし…」

俺は少し戸惑った感じで言った。

「なら、別に反対しないよ。な？」

貴明は親友達に同意を求めた。親友達は同意した。

「すまないな。じゃあ、見るか。お金はあるから、大丈夫だ。自腹で払えよ（笑）。」

「本当に抜け目がないなあ…（苦笑）」

俺達は公演料を払った後、その会場に入った。

会場に入ると、お客さんは他にもたくさんいた。

「結構いるなあ…人気グループでも出るのか？」

俺は公演料を払ったときにもらったプログラムを見た。

「何々…μ、s（ミュージーズ）、A—R—I—S—E（アライズ）、A q o u r s（アクア）、S a

int Snow (セイントスノー)、Sweet's Sisters (スイーツシスターズ)、Poppin' Party、Glitter*Green、CHiSPA、Roselia、Afterglow、Pastel*Palette、ハロー、ハッピーワールド!、放課後ティータイム&わかばガールズ、Master*Keynes が出るのか。それらが終わった後、フリータイム。それにしても、ほとんど人気のグループが出るじゃないか!」

聞いたことのあるグループばかりで、俺は驚いた。

「そりゃあ、驚いたな。まさか、人気グループが10000円で見られるなんて、普通、あり得ないな…だから、人多いのか。」

春希は感心したように言った。

「しかも、この様子…やつぱり。サプライズ開催らしい。SNSでそう呟かれている。」

俺はその情報を彼らに見せた。

「なるほど…おっ、司会者が出てきたぞ。」

冬弥はそう納得した後、司会者が出てきたことを俺らに伝えた。

「おっ、開始時間か。じゃあ、見るとしますか。」

俺は舞台の方を見た。

「Lady's and Gentleman, s! 本日はこのゲリラライブにお越し

下さって、誠にありがとうございます！」

司会者の一声に会場にいる人達は盛り上がった。

「では、早速、このLIVEに登場する方々に来ていただきましょう！この方々です！」

司会者がそう言うと、舞台袖から彼女達が出てきた。

「おお。あれが人気グループか。実際、生で見るのは初めてだ。」

和樹は見入るように言った。そして、全グループが舞台の中央に集まったとき、

「…!?」

俺はあるメンバー達を見つけた。え!?あれって、まさか…

「…和馬。すまん。ちよつと席を外すわ。トイレ行つてくるわ。」

「分かった。」

俺は和馬にそう言うと、席を外した。

「…!?あの、すみません。忘れ物をしたので、取りに行つてもいいですか?」

俺が会場を後にしようとしたとき、あるメンバーが進行を止めた。この声は…間違い

ない。

「えっ!?わ、分かりました。会場の皆様、少々お待ち下さい。」

俺が出て行くときに、会場がざわつくのが聞こえた。もしかして…

トイレから出た後、会場に戻らず、俺はしばらく考えていた。

「あれは…間違いない。見たことある…」

そう。出てきたメンバーの中に見覚えのある人がいたのだ。すると…

「あつ、いたー!」

聞き慣れた声と共に、来たのは…

「…まさか…こんな形で再会するとは思わなかったぞ…穂乃果、ことり、海未、絵里、千歌、曜、果南、雪穂、亜里砂、志満姉さん、美渡、香澄、明日香、唯、憂、和。」

俺の幼馴染達が来たのだ。

「久しぶり。元気にしていた?」

穂乃果は俺に聞いた。

「おかげさまでな。そっちも元気そうで何よりだ。」

俺は少し疲れた感じで答えた。

「もう、どこに行っていたの?あれからずっと連絡もなかったし…」

千歌は心配そうに言った。

「…今、こんな人気グループになったのに、容易に連絡なんて、出来るかよ…ていうか、

何も言わずに、連絡先を変更したのは俺だしな…」

俺は少しもどかしい感じで言った。

「…それより、こんな時に、俺の所にいる暇があるか？ 進行を止めているだろ？」

俺は目をそらして、彼女達に言った。

「…分かった。ねえ。このLIVEが終わったら、少し待ってくれる？ いや、待ってて
！」

香澄は戻りながら、俺に言った。

「えっ!? ちよつ、ちよつと、おい…」

俺の返事を待たず、彼女達は会場に戻っていったのだ。

「…はあ…相変わらずだな…」

俺はそう呟きながら、会場に戻ったのだった。

「おう。お帰り。なんか疲れているけど、どうした？」

戻ってきて、開口一番、大智と亮に声を掛けられた。

「いや、ちよつとな…後で話すわ。」

俺はさっきの件も気になっただけで、後で話すことにした。
「分かった。」

大智も亮もこれ以上は触れないことにしたようだ。

「まだ、戻ってこないのか？」

茂が心配した感じで言った。

「もうじき、戻ってくると思うけど…あつ、戻ってきた。」

俺がそう言うのと、彼女達は戻ってきた。

「皆さ〜ん！お待たせしました！遅くなっちゃったけど、これから私達のLIVEを始めるよ〜！最後まで、楽しんでいってね〜！」

穂乃果がそう言うのと、会場は再び大きく盛り上がった。

「それじゃあ、まずは私達のグループ、μ'sから始めます！最初の曲は、『START：DASH!!』です！」

穂乃果がそう言うのと、μ'sのメンバーはその曲のポジションに着いた。

「皆さ〜ん！聞いていただき、ありがとうございま〜す！」

μ s が歌い終わった後、観客から大量の拍手が送られた。それに穂乃果は答えた。

「それでは、次のグループを紹介します！A—R—I—S—E—さん！お願いします！」

穂乃果がそう言った後、A—R—I—S—Eのメンバーが登場した。

「皆さ〜ん！こんばんは〜！A—R—I—S—Eで〜す！」

「おう、あれがつばささんか。」

市生が感心したように言った。

「何だ？市生、気に入ったのか？」

「まあね。」

清詞は市生にそう言った。市生はまんざらでもない感じだった。

「私達、A—R—I—S—Eがお送りする曲は、『Shocking Party』です！」

つばさがそう言った後、A—R—I—S—Eのメンバーはその曲のポジションに着いた。

「皆さ〜ん！聞いていただき、ありがとう〜ぎいま〜す！」

A—R—I—S—Eが歌い終わった後、観客から大量の拍手が送られた。つばさはそれに答えた。

「それでは、次のグループを紹介します！Aqoursさん！お願いします！」
つばさがそう言った後、Aqoursのメンバーが登場した。

「皆さ〜ん！こんばんは〜！Aqoursです〜！」

千歌がそう言った後、観客が盛り上がった。

「Aqoursって、何となくだけど、μ'sに似ているな。」

真が不思議そうに言った。

「Aqoursはμ'sを目標にしていたみたいだ。だからだろう。」

俺はそう説明した。

「私達、Aqoursがお送りする曲は、『未来の僕らは知っているよ』です！」

千歌がそう言うと、A-RISEのメンバーはその曲のポジションに着いた。

「皆さ〜ん！聞いていただき、ありがとうございま〜す！」

Aqoursが歌い終わった後、観客から大量の拍手が送られた。千歌はそれに答えた。
た。

「それじゃあ、次のグループを紹介します！Saint Snowさん！お願いします

！」

千歌がそう言った後、Saint Snowのメンバーが登場した。

「皆さくん！こんばんは〜！Saint Snowです〜！」

「Saint Snowは2人しかないのか。ていうか、あれは姉妹なのか？」

修司がそう聞いた。

「みたいだな。姉妹ユニットか。」

俺はそう答えた。

「てことは…しゃべったのが聖良で、しゃべっていないのが理亜か。」

総司はそう言った。

「私達、Saint Snowがお送りする曲は、『CRASH MIND』です！」

聖良がそう言うのと、Saint Snowの2人はその曲のポジションに着いた。

「皆さくん！聞いていただき、ありがとうございま〜す！」

Saint Snowが歌い終わった後、観客から大量の拍手が送られた。聖良はそれに答えた。

「それじゃあ、次のグループを紹介します！Sweet*s*sistersさん！お願いしますー！」

聖良がそう言った後、Sweet*s*sistersのメンバーが登場した。

「皆さ〜ん！こんばんは〜！Sweet*s*sistersですー！」

「Sweet*s*sistersは4人か。誰が誰の姉妹なんだ？」

昌晴が興味ありげに聞いてきた。

「志満と美渡は姉妹で、2人とも千歌の姉だ。志満が長女、美渡が次女だ。雪穂は穂乃果の妹で、亜里砂は絵里の妹だ。」

「なるほど。」

俺がそう言うと、昌晴は納得した。

「私達、Sweet*s*sistersがお送りする曲は、『SUNNY DAY SO
NG』ですー！」

志満がそう言うと、Sweet*s*sistersの4人はその曲のポジションに着いた。

「皆さ〜ん！聞いていただき、ありがとうございませ〜す！」

Sweet * Sisters が歌い終わつた後、観客から大量の拍手が送られた。志満はそれに答えた。

「それでは、次のグループを紹介します！Poppin', Partyさん！お願いしま〜す！」

志満がそう言うと、Poppin', Partyのメンバーが登場した。

「皆さ〜ん！こんばんは〜！Poppin', Partyで〜す！」

「おつ、Poppin', Partyはバンドグループなのか。」

諒一はそう聞いた。

「そうだな。この後のグループもそうかな…この順番だと。いちいちバンド道具の入れ替えは大変だからな…」

俺はそう言ったが、心の中では、あの時に言われた言葉が残っていて、少し複雑な思いを抱いていた。

「私達、Poppin', Partyがお送りする曲は、『ティアドロップス』です！」

香澄はそう言うと、Poppin', Partyのメンバーはその曲を始めた。

「皆さ〜ん！聞いていただき、ありがとうございます〜す！」

Poppin, Partyが歌い終わつた後、観客から大量の拍手が送られた。香澄はそれに答えた。

「それでは、次のグループを紹介します！Glitter*Greenさん！お願いします〜す！」

香澄がそう言つた後、Glitter*Greenのメンバーが登場した。

「皆さ〜ん！こんばんは〜！Glitter*Greenで〜す！」

「Glitter*Greenは4人バンドか。てことは、ギター兼ボーカルつてことかな？」

春希はそう聞いた。

「そうだな。ギター兼ボーカルは定番だね。さっきの香澄もそうだったな。」

俺はそう説明した。

「じゃあ、ゆりさんもそうなんだね。」

冬弥は納得するように言った。

「私達、Glitter*Greenがお送りする曲は、『Don't be afraid!』です！」

ゆりはそう言うと、Glitter*Greenのメンバーはその曲を始めた。

「皆さ〜ん！聞いていただき、ありがとうございま〜す！」

Glitter*Greenが歌い終わった後、観客から大量の拍手が送られた。ゆりはそれに答えた。

「それでは、次のグループを紹介します！CHiSPAさん！お願いします！」

ゆりがそう言うと、CHiSPAのメンバーが登場した。

「皆さ〜ん！こんばんは〜！CHiSPAで〜す！」

「CHiSPAも4人バンドか。てことは、CHiSPAのリーダー、夏希さんがギター兼ボーカルってことかな？」

和樹がそう言った。

「そうだな。後に続くガールズバンドは放課後ティータイム&わかばガールズ、Master*Keynes以外は5人組だな。」

俺はそう答えた。

「私達、CHiSPAがお送りする曲は、『Be shine, shining!』です

！」

夏希はそう言うと、CHiSPAのメンバーはその曲を始めた。

「皆さ〜ん！聞いていただき、ありがとうございます〜す！」

CHiSPAが歌い終わった後、観客から大量の拍手が送られた。夏希はそれに答えた。

「それでは、次のグループを紹介します！Roseliaさん！お願いします〜！」

夏希がそう言うと、Roseliaのメンバーが登場した。

「皆さ〜ん！こんばんは〜！Roseliaです〜！」

「おっ、Roseliaはボーカル担当、ギター担当がきっちり別れているバンドだな。」
浩之が感心したように言った。

「バンドの組み合わせはこれが普通だからな。ただ、DJがあるのが気になるが…」

俺はキーボードの後ろにあるDJスタンドを見て答えた。

「私達、Roseliaがお送りする曲は、『熱色スターマイน์』です〜！」

友希那がそう言うと、Roseliaのメンバーはその曲を始めた。

「皆さ〜ん！聞いていただき、ありがとうございませ〜す！」

Roseliaが歌い終わつた後、観客から大量の拍手が送られた。友希那はそれに答えた。

「それでは、次のグループを紹介します！Afterglowさん！お願いします〜！」

友希那がそう言うと、Afterglowのメンバーが登場した。

「皆さ〜ん！こんばんは〜！Afterglowで〜す〜！」

「AfterglowはPoppin' Partyと同じバンド体制だな。」

貴明が興味深げに言った。

「みたいだな。次のバンドもそうなのかな？」

俺も興味ありげに答えた。

「私達、Afterglowがお送りする曲は、『That Is How I Roll〜！』です〜！」

蘭はそう言うと、Afterglowのメンバーはその曲を始めた。

「皆さ〜ん！聞いていただき、ありがとうございませ〜す！」

A f t e r g l o w が歌い終わつた後、観客から大量の拍手が送られた。蘭はそれに答えた。

「それでは、次のグループを紹介します！P a s t e l * P a l e t t e s さん！お願いします〜す！」

蘭がそう言うと、P a s t e l * P a l e t t e s のメンバーが登場した。

「皆さ〜ん！こんばんは〜！P a s t e l * P a l e t t e s で〜す！」

「おつ、P a s t e l * P a l e t t e s は R o s e l i a と同じバンド体制か。」

和馬は興味ありげに言つた。

「普通のバンド体制の方が少ないのかな…？」

俺はそう考えた。

「私達、P a s t e l * P a l e t t e s がお送りする曲は、『しゅわりん☆どり〜みん』です！」

彩はそう言うと、P a s t e l * P a l e t t e s のメンバーはその曲を始めた。

「皆さ〜ん！聞いていただき、ありがとうございませ〜す！」

Pastel*Palettesが歌い終わった後、観客から大量の拍手が送られた。彩はそれに答えた。

「それでは、次のグループを紹介します！ハロー、ハッピーワールド！さん！お願いしま〜す！」

彩がそう言うと、ハロー、ハッピーワールド！のメンバーが登場した。

「皆さ〜ん！こんばんは〜！ハロー、ハッピーワールド！で〜す！」

「おっ、ハロー、ハッピーワールド！がDJいるみたいだ。」

「本当だ。DJはハロー、ハッピーワールド！のバンドメンバーにいたのか。」

九郎の言ったことに、俺は納得した感じで言った。

「私達、ハロー、ハッピーワールド！がお送りする曲は、『えがおのオーケストラっ！』で〜す！」

こころがそう言うと、ハロー、ハッピーワールド！のメンバーはその曲を始めた。

「皆さ〜ん！聞いていただき、ありがとうございませ〜す！」

ハロー、ハッピーワールド！が歌い終わった後、観客から大量の拍手が送られた。こころはそれに答えた。

「それでは、次のグループを紹介します！放課後ティータイム&わかばガールズさん！お願いします〜！」

「こころがそう言うと、放課後ティータイム&わかばガールズのメンバーが登場した。

「皆さ〜ん！こんばんは〜！放課後ティータイム&わかばガールズで〜す〜！」

「放課後ティータイム&わかばガールズは2つのバンドが1つになっているそうですよ。」

大智はそう言った。

「つてことは、放課後ティータイムとわかばガールズのバンドが1つになっていることか。メンバーが多いわけだ。」

俺は納得した。放課後ティータイム&わかばガールズは合計7人いて、ギターが3人、ベースが2人、ドラムとキーボードが1人ずつなのだ。

「私達、放課後ティータイム&わかばガールズがお送りする曲は『ふわふわ時間（タイム）』です〜！」

唯はそう言うと、放課後ティータイム&わかばガールズはその曲を始めた。

「皆さ〜ん！聞いていただき、ありがとうございます〜！」

放課後ティータイム&わかばガールズが歌い終わった後、観客から大量の拍手が送られた。唯はそれに答えた。

「それでは、最後のグループを紹介します！Master*Keynesさん！お願いします〜！」

唯がそう言うと、Master*Keynesのメンバーが登場した。

「皆さ〜ん！こんばんは〜！Master*Keynesです〜！」

「フリータイム前の最後のグループ、Master*Keynesか。これも2つのバンドが1つになっているそうだ。」

亮が説明した。

「確か、Peace*Smileと4AW'sだったよな？Peace*Smileが3人バンド、4AW'sが4人バンドだった気がする。」

俺の言ったことに亮が頷いた。

「私達、Master*Keynesがお送りする曲は『Maddy Candy』です！」

明日香はそう言うと、Master*Keynesはその曲を始めた。

「皆さ〜ん！聞いていただき、ありがとうございま〜す！」

Master*Keynesが歌い終わった後、観客から大量の拍手が送られた。明日香はそれに答えた。その後、先に歌っていたグループが登場した。

「皆さ〜ん！改めて、最後まで聞いて下さって、ありがとうございま〜す！」

穂乃果がそう言うと、観客は大きく盛り上がった。

「ここからはフリータイムです〜！みんなも楽しんでいってね〜！」

千歌がそう言って、観客は再び大きく盛り上がった。フリータイムはグループのコーポもあり、俺達は楽しい時間を過ごした。

「どうだった？彼女達は？」

会場を出た後、俺は赤羽さんと武内さんに聞いた。

「そうですね…彼女達は悪くないですね。」

「検討しておきましょう。」

赤羽さんと武内さんはそう答えた。

「分かった。」

俺はそう言った後、香澄に言われたことを思い出した。

「あつ、そうだ。俺、ちよつと、ここに残るわ。ここで待ち合わせがあるから。」

「そうなのか？」

俺が言った後、春希はそう言った。

「それって、俺達に後で話すことか？」

大智と亮もそう言った。

「そう。どうする？」

俺はみんなに聞いた。

「だったら、後で教えてくれ。」

大智と亮はそう答えた。他のみんなも頷いた。

「分かった。」

俺がそう答えた後、彼らは先に帰った。

「…さて、もう出てきていい。先に帰ったから。」

彼らの姿が見えなくなつた後、俺はそう言った。その後、穂乃果達が出てきた。穂乃果達の後ろには先程まで穂乃果達と共にLIVEをしていた人達にもいた。

「…それで、俺に何のようだ？話すことは何もないが…」

俺は少し警戒心を持つた感じで言った。

「私達のLIVE、どうだった？」

穂乃果はそう聞いてきた。

「よかつたよ。あんた達がこんなLIVEを開催できて、嬉しい限りだ。」

俺はそう答えた。

「よかつた。光輔にこのLIVE、見てほしかったから。」

千歌はほつとしたように答えた。

「…それにしても、穂乃果、ことり、海未、絵里、千歌、曜、果南、雪穂、亜里砂、志満姉さん、美渡、香澄、明日香、唯、憂、和。いつの間に仲良くなつていたのか。」

「うん。光輔の幼馴染つてことを聞いてね。」

俺の言ったことに穂乃果、ことり、海未、絵里、千歌、曜、果南、雪穂、亜里砂、志満姉さん、美渡、香澄、明日香、唯、憂、和はそう答えた。

「そうか。それで、香澄。何故、待つてほしいと言つた？」

「そのことなんだけど、光輔に伝えたいことがあつて…」

「俺に?」

香澄は何故かもしもじしながら言った。穂乃果、ことり、海未、絵里、千歌、曜、果南、雪穂、亜里砂、志満姉さん、美渡、明日香、唯、憂、和もそんな感じだった。何を伝えようとしているのだ?

「じ…実は…こ、光輔のことが…」

穂乃果、ことり、海未、絵里、千歌、曜、果南、雪穂、亜里砂、志満姉さん、美渡、香澄、明日香、唯、憂、和が何か言おうとしたとき、またも聞き覚えのある声が聞こえた。

「こ…光輔?」

「なっ…!?!」

来たのは、これまた懐かしい人達だった。

「春香、卯月、心愛じゃないか!?!何故!?!」

俺は驚いた。まさか、会えるとは思わなかった。春香と卯月は穂乃果、ことり、海未、絵里、千歌、曜、果南、雪穂、亜里砂、志満姉さん、美渡、香澄、明日香、唯、憂、和と同じように忙しい身はずだ。春香と卯月、心愛の後ろには恐らく、仕事仲間と心愛の友達だろう。

「えっ!?!光輔って、春香さん、卯月さんの知り合いなの!?!」

穂乃果、ことり、海未、絵里、千歌、曜、果南、雪穂、亜里砂、志満姉さん、美渡、香澄、明日香、唯、憂、和は驚いたように言った。

「ああ…あんだ達と同じく、幼馴染なんだ。ちなみに、そこにいる心愛つて人もそうだ。」
「そうなんだ…」

俺の言ったことに穂乃果、ことり、海未、絵里、千歌、曜、果南、雪穂、亜里砂、志満姉さん、美渡、香澄、明日香、唯、憂、和は呆然としたように言った。

「光輔。穂乃果さん、ことりさん、海未さん、絵里さん、千歌さん、曜さん、果南さん、雪穂さん、亜里砂さん、志満さん、美渡さん、香澄さん、明日香さん、唯さん、憂さん、和さんと幼馴染だったんだ…初めて知ったよ。」

春香、卯月、心愛も呆然としたように言った。

「…まあな。それで、春香、卯月、心愛。何故、ここに？」

俺は3人に聞いた。

「私はここに引越すことになったのよ。」

「ハハハハ？」

心愛の言ったことに俺は驚いた。

「学校はここからだと遠いが…まさか…」

「うん。中央高校に転校することにした。転入試験も受かっているから。」

「マジかよ…」

心愛の言ったことに俺はまた驚いた。

「それで、春香と卯月は？」

「私達はプロデューサーさんを探していたのよ。もう一回話したいことがあるから。」

2人の言ったことに、俺はすぐに合点がいった。

「赤羽さんと武内さんか。さつき、別れたぞ。」

「えっ、さつき!?!」

俺が言ったことに、春香と卯月、春香と卯月の仕事仲間達は驚いた。

「えっ、プロデューサーさんがいたんですか!?!」

LIVEをやっていたメンバーと心愛達も驚いた。

「ああ…何で? って、そうだった…」

俺は疑問に思ったが、すぐに思い出した。

「プロデューサーが新事務所設立する話を聞いているな?」

「うん。」

「なら、話が早い。そこに入りたいうってことだろ? だったら、あの2人も言っていたけど、それはまづくないか?」

話からして、春香と卯月は前にプロデューサーに会っていたんだろうと推測した。

「そうだけど…諦めたくないよ…」

春香と卯月はもどかしい感じで言った。

「そういえば、光輔。さつき、そのプロデューサーと何か話していたけど、何話していたの？」

香澄が聞いてきた。

「新事務所と新メンバーのことだ。あんた達は検討することにした。」

「えっ！そんなの!？」

俺の言ったことに心愛と心愛の友達を除く彼女達は驚いた。

「ああ。実を言うと…俺、その新事務所のメンバー入りが決定したんだ。」

「ええく!？」

俺の言ったことに、彼女達は大きく驚いた。

「まあ、興味がないわけじゃないからね。新しいことに挑戦するのも悪くはないかなって思ってたな。」

「そうなんだ…」

俺の言ったことに彼女達は呆気にとられていた。

「あと、心愛が驚いていることに疑問を覚えるのだが、もしかして、音楽関係やりたいのか？」

俺は心愛に聞いた。

「うん。音楽もやりたいなって。」

「確か、喫茶店の仕事をしていなかったか？」

俺はSNSでその情報を知っていた。

「うん。音楽の仕事と両立していくことにしたんだ。喫茶店も移転することにしたんだ。あつ、あと、実家もね。」

「マジかよー！」

心愛の言ったことに俺は驚いた。実家も移転するとか…ちなみに、心愛の実家はパン屋を経営していたはずだ。

「だから、お願いがあるんだ。」

「何だ？」

俺は心愛の言葉を待った。

「そのプロデューサーさんに言って！その事務所に入りたいうって！」

「それは私達からお願ひ！」

「はあ!?!マジで言っている!?!」

彼女達の言ったことに俺は驚いた。

「そ、それは考えさせてくれ…」

俺はそう答えることしか出来なかった。

「…分かった。」

彼女達は少ししよんぼりした感じで答えた。

「それで、穂乃果、ことり、海未、絵里、千歌、曜、果南、雪穂、亜里砂、志満姉さん、美渡、香澄、明日香、唯、憂、和。俺に何を伝えようとしていたのだ？」

俺は4人に聞いた。

「あつ。それ、私からもあるんだ。」

「あんた達もかい…」

春香、卯月、心愛の言ったことに俺は少し呆れた。

「で、何だ？」

俺は気を取り直して、彼女達に聞いた。

「じ…実は…」

春香、卯月、穂乃果、ことり、海未、絵里、千歌、曜、果南、雪穂、亜里砂、志満姉さん、美渡、香澄、明日香、唯、憂、和、心愛はもじもじしながらこう言った。

「実は…こ…光輔のことが…好きなの。」

………

「…はあ!？」

春香、卯月、穂乃果、ことり、海未、絵里、千歌、曜、果南、雪穂、亜里砂、志満姉さん、美渡、香澄、明日香、唯、憂、和、心愛の言ったことに、俺は状況が飲み込めなかつた。

〜次回に続く〜

光輔の過去、男達の思い

「…今、言ったこと、本気か？」

俺は正直、まだ信じられなかった。しかも…

「春香、卯月は大丈夫なのか？これが知られたら、ただじやすまないぞ。」

俺は2人に確認した。

「…そうなる前に事務所を移ろうと考えているのよ。」

「…そういう手段？」

2人の言ったことに俺は呆れた。

「言っておくけど、私は本気よ。本当に光輔のことが好きなの。」

「それは私も同じよ。」

春香が言った後、卯月、穂乃果、ことり、海未、絵里、千歌、曜、果南、雪穂、亜里砂、志満姉さん、美渡、香澄、明日香、唯、憂、和、心愛も続けて言った。

「…ちよつと待ってくれるか？」

俺はそう言った後、考えた。

（参ったなあ…あまり恋愛したくないんだよなあ…あの出来事があって以来…）

俺はそう考えつつ、こう答えた。

「…返事だが、いつまで待てる？」

俺は春香、卯月、穂乃果、ことり、海未、絵里、千歌、曜、果南、雪穂、亜里砂、志満姉さん、美渡、香澄、明日香、唯、憂、和、心愛に聞いた。

「…4月に入るまでには返事が欲しい。」

「3月31日まで待つことか…分かった。そこまで待つてくれるか？」

「分かったわ。待つているから。」

俺がそう言った後、春香、卯月、穂乃果、ことり、海未、絵里、千歌、曜、果南、雪穂、亜里砂、志満姉さん、美渡、香澄、明日香、唯、憂、和、心愛はそう言った。

「それじゃあ、俺は行くわ。」

俺は自宅へ帰っていった。その帰り道、俺はあの出来事をずっと考えていた。

「ただいま…」

「おう。遅かったな。だいたい話していたみたいだな。」

帰ってきて、修司がそう言った。

「はあ〜…」

「ん？どうした？」

修司が心配そうに聞いた。

「だいぶ話したよ…詳しいことは明日、話すよ。とりあえず、男子全員、集めよう。あつ、プロデューサーさんも含めてね。」

「分かった。」

今日は本当に疲れた。まさかこんなことになるなんて思わなかった…

「俺はもう寝るわ。おやすみ。」

「ああ…おやすみ。」

修司は寝室に向かった。俺も風呂に入って、その後、寝室に向かった。その間もあのことを考えていた…

翌日、俺は春希達と共に自宅近くの公園にいた。

「それで、昨日のことを話すって言っていたな。なんだ？」

大智、秀彦、清司、亮、久太郎、太一君は同時に聞いた。

「単刀直入に言うよ、実はな…幼馴染達に告白されてしまったんだ…」

「マジで!？」

「本当ですか!？」

俺の言ったことに男子全員、驚いた。

「誰に告白されたんだ?」

和馬、孝明、紀洋、九郎、ガトーは同時に聞いた。

「ああ…昨日、LIVE会場にいた穂乃果、千歌、香澄、唯。あと、天海 春香、島村 卯月、保登 心愛。そいつらからだ…」

「マジで!？」

「本当ですか!？」

俺の言ったことに、彼らは驚いた。

「さらに言うと、全員、俺の幼馴染だ。赤羽さんと武内さんは春香と卯月が俺の幼馴染って言うのは知っていると思います…」

「マジかよ!…すごすぎるわ…」

俺の言ったことに春希達はまた驚いた。

「まさか…彼女達から告白されるとは…大丈夫なのですか?」

赤羽さんと武内さんは聞いてきた。

「いや…さすがにどうなのかとは聞きました。春香と卯月はそうなる前にそちらに移る

「気だそうです…」

「…」

俺の言ったことに2人は押し黙ってしまった。

「…返事はどうしたんだ？」

春希、武也、親志、孝宏は俺に聞いた。

「4月に入るまで待つてほしいと答えた。ちよつと、あの出来事を思いだしてしまつてな…」

「あの出来事？」

冬弥と彰は俺に聞いた。

「全員、知らない。だから、呼んだんだ。」

「そうなのか…」

春希達は納得した。

「…じゃあ、話すな。」

俺はそう言つて、あの出来事について、話し始めた。

「俺が10歳の頃だ。実を言うと、その時に、俺はある相手に初恋をしたんだ。」

「そのときに好きな人がいたんだ。誰かは覚えているのか？」

和樹、大志、雄蔵、鶴彦、穂磨が聞いてきた。

「覚えている。名前は残念だけど、明かせない。相手も俺に好意を持っていたんだ。」

「両思いってことか。」

浩之と雅史がそう言った。

「そうだ。俺の方から告白したんだ。彼女はOKした。そして、俺達はつきあい始めた。

最初はよかった。何事もなく、順調だったんだ。だが…」

「その時、何かあったのか。」

貴明と雄二が聞いてきた。

「そうだ。どこから情報が流れてきたのか分からんが、彼女がいじめに遭うようになって

たんだ…実を言うと、彼女、人気があつたんだ…」

「マジかよ…それは酷いかつ、つらい過去だな…」

茂と幸太郎が同情するように言った。

「ああ…俺はもちろん、彼女をかばった。だがな…」

俺は苦虫を噛み潰したように言った。

「…何も変わらなかつた。俺を避けるようにピンポイントで彼女のいじめは続いた。」

「マジかよ……」

市生と清詞は呆気にとられているように言った。

「そして、決定的なことが起きた。ある日、彼女が不登校になったんだ。俺は心配になって、彼女の家に行った。だが、彼女は出なかった……」

俺は少し心が痛かった。

「その後、彼女から電話が来たんだ。その時、彼女は大丈夫と言ったんだが、さすがに俺がまずかった。このままだと、彼女の体も心も持たない。苦渋の決断だったが……」

俺はため息をついて言った。

「彼女と別れることにしたんだ。俺と付き合うと大変なことになるから、自分のためだ。俺と付き合うのは辞めてくれと言ったんだ。」

「……そうだな……さすがに彼女がこれ以上傷つくのを光輔がほつとくわけがないからなあ……」

真と陽太がなだめるように言った。

「ああ。彼女は拒んだが、それでも俺が許せるはずがなかった。それで彼女が傷ついていくのを見ていられなかったからな。」

「……そして、別れたのか。」

修司と浩一は悔しそうに言った。

「ああ。その時期に俺の転校が決まっていたからな。その後、俺は転校したんだ。」
「そうだったのか……」

総司と圭助は悲しそうに言った。

「それ以来、彼女とは会ってないし、連絡も取っていない。それ以降、彼女のいじめがなくなつたのを聞いて以来、後のことは知らない。」

「そうか……彼女へのいじめがなくなつたのはいいけどなあ……」

昌晴と幸大はもどかしそうに言った。

「まあな……だが、俺はその出来事があつて以来、彼女を作るのをためらうようになったんだ。あの出来事を二度と起きてほしくないからな……」

「それは分かるな……俺でもそんなことがあつたら、そうなるかもな……」

諒一と清貴は同情するように言った。

「これがあの出来事だ。そして、あの出来事の結末がこれだ。重い話になつてしまつて、すまないな。」

俺は彼らに謝つた。

「いや、別に大丈夫だ。でも、まさか、こんなことがあつたなんて思わなかつたな……」

春希は感慨深い感じで言った。

「しかし、どうしてそうなつたんだ？別に光輔は悪くないだろう？」

武也、親志、孝宏はそう言った。

「まあな。彼女も悪くなかったし。」

「だろうな…何でこうなってしまったんだらうか…」

冬弥は悔しそうに言った。

「全くだな…いじめていた奴ら、どうかしているぜ…」

彰も少し怒りをあらわにして言った。

「だが、なんで、光輔はいじめられなかったんだ？」

「あつ、それ、思ったわ。」

和樹が言った後、大志、雄蔵、鶴彦、葎麿が続けて言った。

「あく。昔、格闘技を習っていたから、喧嘩が強かったからなあ…多分、その影響だったと思う。」

俺はそう言った。

「水泳を習っているのは知っていたが、格闘技を習っていたのは知らなかったなあ…」

「俺もだ。」

浩之が意外そうに言った後、雅史もそう言った。

「その彼女、元気にしているといいけどなあ…」

貴明はしみじみと言った。

「そうだな…元気に過ごしていることを祈りたいよ。」

雄二もそう言った。

「それは俺も思っているよ。元気に過ごしていたら、俺は嬉しいからね。」

俺は貴明と雄二に同情した。

「さて、これからどうする？ちようど昼時になったし…」

俺はみんなに聞いた。

「そうだな…どうするか…」

彼らは考えた。

「…と言っても…話している間に、自分の心境が変化しているのが何となく感じている

んだよな…」

俺はそう呟いた。

「あつ、やつぱり…?」

彼らは同時に行った。

「もしかして…お前達もか?」

俺は彼らに聞いた。

「うん。光輔の話を聞いて…な。」

「そうか…行く前に言う?」

俺は彼らに確かめた。

「そうだな。ここで言うか。」

彼らはそう言った。

「分かった。といつても、言うことは分かっているけどな。なんだ？」

「…彼女達ともう一回、向き合ってみようと思うんだ。」

「…だろうな。俺も彼女達と向き合ってみようと思う。過去に起きた出来事を忘れることは出来ないけど、それを無駄にせず、自分から前に向かって進んでいくよ。」

俺らはそう言った。改めて彼女達と向き合ってみることにした。俺は彼女達に言われた答えを出しに行くことにした。思ったより早くも決断が出たな…

「そうしたら、彼女達の所に行くことにする？俺達の考えを彼女達に聞いてもらって、自分の道を切り開いていこう。最終的に自分の人生なんて、自分で決めるものだから。」

俺は彼らに再度、聞いた。

「そうだな。行つてくるとするよ。過去の自分を残しておくけど、今、起きていることから背くのは嫌だからね。自分で自分の道を切り開いてくるよ。」

「分かった。俺も切り開いてくるとするよ。赤羽さんと武内さんは俺と一緒に来て下さい。」

こうして、俺達は彼女達の所に行くことにした。

『光輔？どうしたの？』

「今、時間あるか？」

春希達と別れてから数分後、俺は春香に電話をしていた。

『今？うん。今日はオフだから。』

「卯月もか？」

『卯月ちゃんもそうだよ。どうして？』

「なら、神田駅に来られるか？」

『神田駅？どうして？』

「会って、話したいことがある。大丈夫か？」

『えっ!?わ、分かった。今から？』

「今からだ。すまないな。」

『ううん。大丈夫だよ。卯月ちゃんと穂乃果ちゃん、香澄ちゃん、心愛ちゃんにも伝えて

おこっか？』

「助かる。頼めるか？千歌と唯は、穂乃果と香澄が連絡するはずだ。」

『分かった。』

「じゃあ、よろしく。」

そう言った後、俺は電話を切った。

「じゃあ、赤羽さん、武内さん。行きましょう。」

「分かりました。」

俺達は電車で神田駅に向かった。

それから数十分後、彼女達が神田駅に到着した。

「プ、プロデューサーさん!?!」

赤羽さんと武内さんがいたことに、春香と卯月は驚いた。

「2人に伝えたいことがあるとのことだ。」

俺は2人に説明した。

「…だったら、ちよつと待って。あの子達も呼ぶわ。」

「…あいつらか。」

俺はすぐに確信した。

「ええ。構いません。彼女達にも言わないといけませんから。」

「分かった。」

赤羽さんと武内さんの行ったことに俺は承諾した。

「それで、光輔。話したいことって？もしかして、あの時の答えを言いに来たの？」
穂乃果が俺に聞いた。

「ああ。それがメインだが、その前に話さなければならぬことがある。ここだと、狭いから…音ノ木坂学院の屋上で話したいんだが…ことり、いいか？」

俺はことりに聞いた。ことりの母が音ノ木坂学院の理事長を務めていて、俺を第2の息子だと思っているのだ。俺も第2の母だと思っている。

「うん。分かったわ。光輔が言っていたと言えば、大丈夫だと思うよ。」
ことりはそう言って、母に連絡した。一言二言話した後、電話を切った。

「大丈夫だって。後、頑張れ！だって。」

そう言ったことりの顔が赤かった。

「へっ!?全く…相変わらずだな…」

俺は恥ずかしい思いになった。

「じゃ、じゃあ…行くか。春香、卯月。後から来るメンバーには先に行つたと伝えてくれ。場所を教えるのも忘れずに。」

俺は少しドギマギしながら彼女達を連れて、音ノ木坂学院に向かった。

それから数十分後、遅れてきたメンバーも集まり、音ノ木坂学院の屋上に来ていた。「少し狭いけど……まあ、いいや。俺の前に、まずは赤羽さんと武内さん、先に伝えて。」

「分かりました。」

俺が言った後、赤羽さんと武内さんは承諾した。

「今日はみんなに伝えないといけないことがあるんだ。」

「今日は皆さんに伝えないといけないことがあります。」

赤羽さんと武内さんは春香、卯月達に言った。

「まず、ごめん。急に辞めてしまつて。」

「まず、すみません。突然、辞めてしまいました。」

「プロデューサーさん……」

赤羽さんと武内さんが謝つたことに、春香、卯月は心配そうだった。

「新しい事務所です仕事したいと思つて、今の事務所を辞めたんだ。」

「ええ。私も同意見です。」

「そうだったんだ……」

赤羽さんと武内さんの言ったことに、千早、凛は少し納得したように言った。

「それで、みんなに伝えたいことは…」

「それで、皆さんに伝えたいことは…」

赤羽さんと武内さんは間を置いて、こう言った。

「僕達が行く新事務所の新メンバーになってくれないか？」

「私達が行く新事務所の新メンバーになってくれませんか？」

「えっ!? そ、それって…」

赤羽さんと武内さんの言ったことに、春香、卯月達は驚いた。

「改めて考えたんだけど、俺も自分を信じて、君達の思いに答えてみることにしたよ。事務所が変わっても、少しずつでもいいから、もう1度、今の時と同じようにしてみせるよー！」

「私も同意見です。私も自分を信じて、貴方達を前の事務所に所属していた時と同じようにしてみせますー！」

「プロデューサーさん…!」

赤羽さんと武内さんの言ったことに、美希、未央は少し泣きながら言った。

「だから、君達も自分を信じて、答えてくれ!俺も自分を信じるから!」

「だから、貴方達も自分を信じて、答えて下さい!私も自分を信じますので!」

赤羽さんと武内さんは頭を下げて、全力でお願いをした。

「そんなの…決まっているじゃないですか…！」

春香、卯月は涙を流しながら、こう言った。

「私達はプロデューサーさんを信じます！プロデューサーさんと一緒に仕事がしたいです！」

他のアイドル達も涙を流しながら、そう言った。

「みんな…ありがとう…！」

「皆さん…ありがとう…ごさいます…！」

赤羽さんと武内さんは頭を下げて、そう言った。俺と穂乃果、ことり、海未、絵里、千歌、曜、果南、香澄、明日香、唯、憂、和、心愛はその様子を少し離れて見ていた。

「上手くいったみたいだね…光輔、なんかした？」

穂乃果は目を赤くしつつ、意味ありげな感じで言った。

「…さあな？何もしていないと言えば…嘘になるかな？俺がこの後、話すことに関係あることは事実だけど…」

俺はそう答えておいた。

それから、数分後、音ノ木坂学院の屋上に残っていたのは、俺と春香、卯月、穂乃果、ことり、海未、絵里、千歌、曜、果南、雪穂、亜里砂、志満姉さん、美渡、香澄、明日香、唯、憂、和、心愛だ。赤羽さんと武内さん、千早、凜達はあの後、帰って行つたのだ。

「さて、俺か…あの時の答えを出す前に、先に言っておきたいことがある。」

俺は彼女達に言った。

「あゝ。言っていたね。それって、何？」

穂乃果は俺に言った。

「実は…俺は、ある出来事があつて以来、恋愛をすることに抵抗があつて、女子との付き合いをためらつていたんだ。」

「えっ…そうなの!？」

俺の言ったことに、彼女達は驚いた。

「ああ…これは誰も知らない。あんた達にも話してないからな。」

俺は彼女達に、彼らに話したことをもう一度話した。

「そんなことがあつたんだ…」

彼女達は呆気にとられたように言った。

「小学校が一緒だった心愛でも知らない話だ。中学校はそんなこと自体、話さなかつた

からな。」

「全然、知らなかったよ……知っていたとしても、覚えてないや……」

「学年が違うから、知らないだろう！一つ違いだし、他学年のこと、全然知らないだろう……」

心愛の言ったことに、俺は突っ込んだ。

「だから、光輔、女の子に優しいときもあるけど、付き合いに關してはためらっていたんだ……」

千歌は少し納得したように言った。

「そうだ。あのようなきっかけでほしくなかったからな。」

「……じゃあ、答えはだめってこと……？」

香澄は悲しげに答えた。

「あの時の俺なら、断っていた。間違いなく。だが、今は違う。」

俺はきっぱり言った。

「もし、こんなことがあったとしても、逃げずに戦っていくよ。自分で自分の道を切り開いていく。もう迷いはない。」

「そ、それじゃあ……！」

唯は期待したように言った。そして、俺は彼女達にこう言った。

「あんた達の告白、受け入れるよ。こんな俺でもいいなら、喜んで。俺は自分を信じてい

くからな。」

俺は少し笑みをこぼして言った。その瞬間、彼女達の目から涙があふれた。

「光輔ー！ありがとうー！これからもよろしくねー！」

そして、彼女達は泣きながら、抱きついてきた。

「全く…複数の女子と付き合うことになるとは…しかも、こんな人気アイドルと付き合いうことになるとは…相変わらずだし、本当に敵わないわ…」

俺はため息をつきながら言った。だけど、心は軽かった。俺はこのことを言つてよかったと心から思った。これからどうなるかは分からないけど、自分を信じて、自分の道を進んでいく。自分の選んだ選択肢に間違いはない。間違っていたとしても、正していく。俺はそう思い、静かに笑った。

「あつ、そういえば。」

「ん？なんだ？」

穂乃果が何かを思い出したように俺に言った。

「赤羽さんと武内さんだっけ？もしかしてだけど、2人もこの話、知っているの？」

「ああ。それを聞いて、2人の心境が変わって、ああいうことになったんだ。」

「そうなんだ。やつぱり、何かやっていたんだ。」

俺の言ったことに穂乃果は納得した。

「言っただろ。何もしていないと言えば嘘になるって。」

「あつ、そうだった。忘れていた。」

「嘘つけ！」

そんな会話を交わしながら、俺達は笑った。そして、俺達は音ノ木坂学院を後にして、
帰路についた。俺の彼女達と共に。

く次回に続くく

彼女達の心境、強まる恋心

「じゃあ、呼びますか？」

俺の言ったことに、冬弥達は頷いた。そして、俺は彼女に連絡を取った。

「あつ、雪菜か？今、時間ある？」

『春希君!?どうしたの…?えつ、時間…?』

俺の言ったことに彼女達は戸惑っていた。

「そうだ。あるか？」

『う、うん…あるけど…どうして?』

「…会って、話さなければならぬことがある」

『…えっ!?!』

「…新宿駅に来てくれるか?そこで話す。その後は…いいや、現地で聞く。」

『…分かった。じゃあ、かずさ達もそうだよね?』

「そうだ。こっちは今から行く。待っている」

そう言って、俺は電話を切った。

「じゃあ、行こう。」

俺はそう言つて、新宿駅へ向かった。

それから数十分後、俺達は新宿に到着した。

「人混みがすごいなあ…相変わらず…無事にここまで着けるといいが…」

茂がそう呟くと、見慣れた人達が現れた。

「来たな…忙しい中、申し訳ない。」

俺は彼女達にすまなさそうに言つた。

「ううん。別に大丈夫だよ。それで、話つて？」

「ここで話すより…由綺さん、この近くで使っているレッスンスタジオはありますか？」

俺は由綺さんに聞いた。

「え、ええ。あります。」

「じゃあ、そこで話したいので…大丈夫ですか？」

「分かりました。じゃあ、着いてきて下さい。」

由綺さんはそう言つと、俺達を案内した。

「ここよ。それで、私達に話したいことって？」

由綺さんは俺達に聞いてきた。

「そのことなんだけど…その前に。」

俺は前置きした後、こう言った。

「まだ…俺達に好意はあるのか？」

「えっ？」

俺の言ったことに彼女達は一瞬、啞然とした。だが、すぐにこう答えた。

「もちろんよ。そうじゃなければ、こうして会うてことがなかったじゃない。まだ諦

めるわけにはいかないんだから…！」

「…そうか。」

彼女達の答えたことに俺達は納得した。

「じゃあ…本題に入るぞ。」

俺はそう言った後、冬弥達と一緒にこう言った。

「俺達は…どうしたらいいんだ？」

「…えっ？」

俺達の言ったことに彼女達はまた啞然した。

「あれから考えたんだ。これからどうしていくか…そして、彼女達の今後の付き合いをどうするか。」

冬弥は考え深く言った。

「その結論なんだけど…もう一度、向き合おうかってことになったんだ。」

「…えっ?」

和樹の言ったことに、彼女達は信じられない感じだった。

「と言つても、まだ付き合うことをやり直そうって決めたわけじゃないぞ。そこだけは勘違いしないでくれ。」

「向き合つて、その結果、付き合つても大丈夫と判断したら、その時は付き合うことをやり直すよ。」

浩之と貴明の言つたことに俺達は頷いた。

「…ほ、本当に?」

聖良さんは聞いた。

「ああ。それに関しては間違いない。ただ、大丈夫じゃなければ、あの時と同じように、距離は置かせてもらうぞ。」

和馬と九郎はそう警告した。

「…分かつたわ。」

彼女達はその条件を承諾した。

「だけど、どうして、急にこんなことを言い出したの？」

環さんが俺達に聞いてきた。

「詳しくは光輔に聞くと分かるんだけど、光輔の話を聞いて、あの時のことを考えようと思っただ。」

俺はそう言った後、光輔が話したことを彼女達に話した。

「…光輔、そんなことあったんだ…全然知らなかった…」

話し終えた後、少しして、あかりさんがそう言った。

「俺達もあの話を聞くまで、そんなことがあったなんて一切、知らなかった。だけど、それが原因で、女子の付き合いを考えていたんだろう。」

「えっ？修司も知らなかったの？」

葵さんは修司に聞いた。

「ああ。全く。それを聞いてその後、どうしようかって考えたんだ。あつ、光輔は今、別の場所に行っている。上手くいっているといいんだけどな…」

修司がそう言った後、修司の携帯が鳴り始めた。

「ん？誰だ…つと、光輔からだ。」

修司はそう言って、電話に出た。

「光輔。どうだ？上手くいったか？」

『開口一番、そう言われるとは思わなかった…まあ、おかげさまで上手くいきました。そっちは？』

「これからかな。ちなみに、彼女達にもあのこと話しておいたよ。」

『話したのか…まあ、いつか話さなければならぬから、少し手間が省けたかな。詳しいことはこっちから話しておくよ。自分を信じて頑張れよ。』

「了解。」

そう言った後、電話を切った。

「上手くいったんだな？」

総司が修司に聞いた。

「ああ。そのようだ。光輔にも彼女が出来るなんて思わなかったけどな（笑）。」

「マジかよ。それ、光輔に言っていないか？」

「待ってくれ！確実にやられるし、生きて帰ってこれない可能性あるから！」

「た、確かに…」

茂の言ったことに修司はマジレスで返した。それを言われて、俺達は絶句した。実際、光輔を怒らせると、マジで怖い…

「えっ、待って!?光輔、彼女、出来たの!？」

この話を聞いた依緒、由綺、はるか、あかり、環、結希、(柚)このみ、美智、奈々、彩乃、有紗、白石姉妹、(瀬)このみ、天音、五ヶ谷姉妹、双葉(ゆ)、まゆり、結希、ゆずが驚いたように言った。

「ああ。他の幼馴染と付き合うことになったらしい。ただ、一部は俺達の知らない人らしい。」

「そうなんだ…」

大智と亮がそう言うと、彼女達は納得した。

「それで、最初に戻るけど、今後、貴方達はどうぞすればいいのって言っていたね。」

千桜さんは俺達に聞いた。俺達は頷いた。

「えっと、そのことなんだけど…私達と向き合うために、私達とデートして、その時に私達の思いを伝えるから、答えが欲しいんだ。」

愛理さんがそう言った。

「その答えを俺達が決めるんだな。そのデートの時に。」

「うん。」

市生と諒一がそう言った後、彼女達が頷いた。

「…分かった。日程はこつちが決めてもいいか?」

「…うん。いつでも待っているよ。」

真と昌晴がそう言った後、彼女達はそう答えた。

「…分かった。ありがとう。じゃあ、俺達は行くな。日程の詳細は追って連絡する。気をつけて帰ってな。」

俺はそう言った後、彼らと共にここを後にした。

「…そうか。そっちも上手くいけばいいな。」

後日、俺は春希達から彼女達の今後を聞いて、そう言った。

「何とかしてみるよ。だめだったら、そこまでだけど（笑）。」

「…だめにならないことを祈るよ（笑）。」

春希が苦笑しながら言ったので、俺も苦笑しながら言った。

「それで、これから、光輔の彼女に会いに行くのか。」

和馬がそう聞いた。そう。俺は彼女から連絡が来て、練習を見に来て欲しいと言われたのだ。せっかくなので、俺の親友も連れてきていいかと聞いたら、OKとの答えが返ってきた。しかし…

「条件があつて、バンドやっていた人はパート担当の楽器を持つてくることって言って

いたな。何故だ？」

そう。何故かバンドやっていた人はそのバンドに所属していた当時のパート担当の楽器を持ってきて欲しいと言ってきたのだ。

「俺の付き合っている彼女の一部分がバンドやっているのよ。こっちでやっている人が少数派なんだけどな…」

ちなみに、この中でバンド経験者は俺と春希、武也、親志、和馬、紀洋、大智、清司の8人だ。そのうち、俺と春希、武也はバンドを組んでいたガチ勢だ。後の5人はある程度は出来る感じだ。パートは俺がギターボーカル、春希と武也、清司はギター、親志、和馬がベース、紀洋がベースとタンバリン（一応、ありっちゃあり。打楽器もバンドの一種として入っているから）、大智がドラムだ。

「それにしても、光輔がバンドを続けていたとは驚いたな。」

春希は俺に聞いてきた。

「今はあまりやらなくなつたんだ。趣味程度にたしなんでやっているんだ。ちなみにダンスもやっていたよ。こっちも今は趣味程度でやっているから、人に見せられる程度ではないけどね…つと、ここだ。」

そう話しながら、俺達は目的の練習場所に着いた。

「あれ？正面入り口集合って言っていたんだが、まだ練習中なのか？もうすぐ集合時間

なのだが…」

俺がそんなことを言った後、正面入り口の奥から人の気配がした。

「…と、そんな心配は無用か。」

正面入り口で待っていた俺らを迎えに来た人は…

「光輔—！待っていたよ—！」

「今、着いたばかりだ。練習は大丈夫なのか？」

「!?」

迎えに来たのは、春香、穂乃果、香澄の3人だ。迎えに来たメンバーに彼らは驚いていた。

「ああ。見覚えあるよな…実を言うと、この人達が俺の彼女なんだ。中にも何人かいるけどね。」

「マジかよ！お前、有名アイドルと付き合うのかよ！」

俺の言ったことに彼らはまた驚いた。

「もしかして、光輔の親友？」

春香が聞いてきた。

「そうだ。あと、あんた達と同じく、幼馴染でもある。まあ、詳しいことは練習教室に入ってから話そう。」

俺はそう言うと、彼らと俺の彼女達と共に練習教室に入ってしまった。

「お待たせ。連れてきたよ」

春香はそう言いながら、俺達と共に練習教室に入った。

「やつほー！光輔ー！待っていたよー！」

入ってきて、卯月、ことり、海未、絵里、千歌、曜、果南、雪穂、亜里砂、志満姉さん、美渡、明日香、唯、憂、和、心愛がそう言いながら、俺に駆け寄ってきた。

「お疲れ。もしかして、休憩中だったか？」

俺は彼女達に聞いた。

「うん。そろそろ光輔が来ると思っていたから、それに合わせていたのよ。」

「なるほどな……」

卯月の言ったことに俺は納得した。

「……もしかしてだが、光輔に駆け寄ってきた人達が、光輔の彼女なのか？」

修司は俺に聞いてきた。

「ああ。そうだ。ついでに言うと、全員、幼馴染でもある。」

「付き合っている人、全員が幼馴染なんだ…」

俺の答えたことに修司は呆然としながら言った。

「まあ、初対面だから、自己紹介でもしますか?」

「そうだね!」

俺がそう言ったとき、心愛がそう言った。その後には他のメンバーも領いた。

「春香、卯月、穂乃果、雪穂、ことり、海未、絵里、亜里砂、千歌、美渡、志満、曜、果南、香澄、明日香、唯、憂、和、心愛以外の女子メンバーはあの時以来だな。改めて、初めまして。電東道鉄高校（でんとうどうてつこうこう）3年生の曾田 光輔です。4月から中央大学情報学部に通います。よろしくお願いします。」

（曾田以外 拍手）

「皆さん、初めまして。峰城大学文学部3年生の北原 春希です。光輔の幼馴染で親友です。4月から光輔と同じく、中央大学文学部に転学します。高校の時に軽音楽同好会でギターを弾いていました。大学でも軽音サークルに入って、ギターを弾いています。編集社でバイトしています。よろしくお願いします。」

（北原以外 拍手）

「皆さん、初めまして。同じく、峰城大学政経学部3年生の飯塚 武也です。春希、光輔の親友で、光輔は幼馴染でもありません。4月から春希、光輔と同じく、中央大学経済学

部に転学します。春希と同じで、高校の時に軽音楽同好会でギター弾いていました。現在も大学の軽音サークルで弾いています。よろしくお願いします。」

(飯塚以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、峰城大学文学部3年生の早坂 親志です。春希、武也、光輔の親友で、光輔は幼馴染でもあります。4月から春希、武也、光輔と同じく、中央大学文学部に転学します。僕は高校時代は部活は入っていませんでしたが、大学で軽音サークルに入り、ベース担当しています。よろしくお願いします。」

(早坂以外 拍手)

「皆さん、初めまして。峰城大学付属高校3年生の小木曾 孝宏です。春希先輩、武也先輩、親志先輩、光輔の親友で、光輔は幼馴染でもあります。4月から中央大学経済学部に通います。部活は入っていませんが、大学に入ったら、軽音サークルに入ろうと思っています。よろしくお願いします。」

(小木曾以外 拍手)

「皆さん、初めまして。悠風大学理工学部2年生の藤井 冬弥です。光輔の幼馴染で親友です。4月から光輔と同じく、中央大学理工学部で転学します。塾でバイトをしています。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

(藤井以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、悠風大学理工学部2年生の七瀬 彰です。冬弥、光輔の親友で、光輔は幼馴染でもあります。4月から冬弥、光輔と同じく、央心大学理工学部で転学します。実家が喫茶店で、そこでバイトがてら仕事しています。部活はそのせいで所属していません。よろしくお願いします。」

（七瀬以外 拍手）

「皆さん、初めまして。音美大学美術学部1年生の千堂 和樹です。光輔の幼馴染で親友です。4月から光輔と同じく、央心大学美術学部で転学します。同人誌を書いていて、コミックイベントの時に書いた同人誌を売っています。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

（千堂以外 拍手）

「皆さん、初めまして。同じく、音美大学美術学部1年生の九品仏 大志です。和樹、光輔の親友で、光輔は幼馴染でもあります。和樹のことは『マイブラザー』、『同志和樹』と呼んでいたりします。4月から同志和樹、光輔と同じく、央心大学美術学部で転学します。同じく、同人誌を書いています。部活は所属していません。よろしくお願いします。」

（九品仏以外 拍手）

「皆さん、初めまして。同じく、音美大学美術学部1年生の立川 雄蔵です。和樹、大志、

光輔の親友で、光輔は幼馴染でもありません。4月から和樹、大志、光輔と同じく、央心大学美術学部で転学します。同人誌は書いていませんが、書こうかなと考えています。よろしくお願いします。」

(立川以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、音美大学美術学部1年生の縦王子 鶴彦です。コードネームを持っていて、『おたくタテ』です。和樹、大志、雄蔵、光輔の親友で、光輔は幼馴染でもありません。4月から和樹、大志、雄蔵、光輔と同じく、央心大学美術学部で転学します。同人誌は書いていませんが、コミックイベントが好きで、よく同人誌を買います。よろしくお願いします。」

(縦王子以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、音美大学美術学部1年生の横蔵院 葎麿です。コードネームを持っていて、『おたくヨコ』です。和樹、大志、雄蔵、鶴彦、光輔の親友で、光輔は幼馴染でもありません。4月から和樹、大志、雄蔵、鶴彦、光輔と同じく、央心大学美術学部で転学します。同人誌は書いていませんが、コミックイベントが好きで、買うことは多いです。よろしくお願いします。」

(横蔵院以外 拍手)

「皆さん、初めまして。姉ヶ桜高校3年生の藤田 浩之です。光輔の幼馴染で親友です。

部活は武術部で、4月から中央大学理工学部ロボット学科です。よろしくお願いします。」

(藤田以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、姉ヶ桜高校3年生の佐藤 雅史です。浩之、光輔の幼馴染で親友です。部活はサッカー部で、浩之、光輔と同じく、4月から中央大学スポーツ学部です。よろしくお願いします。」

(佐藤以外 拍手)

「皆さん、初めまして。妹ヶ桜高校2年生の河野 貴明です。藤田先輩と佐藤先輩、光輔の幼馴染で親友です。部活は所属していません。4月から中央高校に転学します。よろしくお願いします。」

(河野以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、妹ヶ桜高校2年生の向坂 雄二です。藤田先輩、佐藤先輩、貴明、光輔の幼馴染で親友です。部活は貴明と同じく、所属していません。4月から貴明と同じく、中央高校に転学します。よろしくお願いします。」

(向坂以外 拍手)

「皆さん、初めまして。群馬県で鳴神流という格闘技を教えてください、鳴神流の当主、帯刀 和馬です。本名は鳴神 和馬ですが、どちらで呼んでも構いません。23歳です。」

間ノ島学園在学時は月天和という生徒会の会長も務めていました。4月から中央大学生徒サポートを担当します。よろしくお願いします。」

(帯刀以外 拍手)

「皆さん、初めまして。和馬君の元で鳴神流の手伝いをしています、五明 孝明です。間ノ島学園在学時は月華会副会長を務めていました。和馬君、光輔君の親友で、光輔君は幼馴染でもあります。和馬君と同じ年です。4月から中央大学生徒サポートを担当します。よろしくお願いします。」

(五明以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、和馬氏の元で鳴神流の手伝いをしています、群馬のテレビ局に勤めています、御座入 紀洋です。間ノ島学園在学時は天道会書記を務めていました。和馬氏、孝明氏、光輔氏の親友で、光輔氏は幼馴染でもあります。和馬氏と孝明氏と同じ年です。4月から中央大学生徒サポートを担当します。よろしくお願いします。」

(御座入以外 拍手)

「皆さん、初めまして。間ノ島学園の高校2年生、幸塚 大智です。部活は所属はしていませんが、月天和という生徒会の2代目会長を務めていました。当主の和馬さんのところで鳴神流は習っていました。光輔の幼馴染で親友です。4月から中央高校に転学し

ます。よろしく願います。」

(幸塚以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、間ノ島学園の高校2年生、敷島 秀彦です。月華会書記所属、筋トレが趣味で、大智、光輔の親友で、光輔は幼馴染でもあります。4月から大智と同じく、央心高校に転学します。よろしく願います。」

(敷島以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、間ノ島学園の高校3年生、八斗島 清司です。天道会会計所属です。ギターが趣味で、大智と秀彦、光輔の親友で、光輔は幼馴染でもあります。4月から光輔と同じく、央心大学音楽部です。よろしく願います。」

(八斗島以外 拍手)

「皆さん、初めまして。埼玉県のマシユマロ・クロールというケーキ屋でパティシエリナーを務めています。山田 九郎です。22歳です。神扇学園在学時は生徒会長を務めていました。光輔の幼馴染で親友です。4月から央心大学生徒サポートを担当します。よろしく願います。」

(山田以外 拍手)

「了解。皆さん、初めまして。埼玉県でホテル事業しています。ガトー・ネージュです。マシユマロ・クロールで手伝いもしています。神扇学園在学時は生徒会副会長を務めて

いました。九郎君と光輔君の親友で、光輔君は幼馴染でもありません。九郎君と同一年です。4月から中央心大学生徒サポートを担当します。よろしく願ひします。」

(ガトー以外 拍手)

「皆さん、初めまして。神扇学園の高校2年生の宮原 亮です。本名は遊馬 亮ですが、和馬さんと同様に、どちらで呼んでも構いません。九郎さんと同じく、マシユマロ・クロールでパティシエを務めています。光輔の幼馴染で親友です。4月から中央心高校に転学します。よろしく願ひします。」

(遊馬以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、神扇学園の高校2年生、毛呂 久太郎です。亮、光輔の親友であり、光輔は幼馴染、亮はライバルでもあります。家は弁護士関係です。また、マシユマロ・クロールで手伝いをしています。4月から亮と同じく、中央高校に転学します。よろしく願ひします。」

(毛呂以外 拍手)

「皆さん、初めまして。神扇学園の小学4年生、川越 太一です。亮兄ちゃんと久太郎兄ちゃん、光輔兄ちゃんの親友で、光輔兄ちゃんは幼馴染でもあります。実家は酒屋ですが、マシユマロ・クロールの手伝いもしています。4月から中央心小学校に転学します。よろしく願ひします。」

（川越以外 拍手）

「皆さん、初めまして。垣楠学園の高校2年生、元山 茂です。学園生活相互研究会の会長を務めています。実家は神戸で花屋を営んでいます。光輔の幼馴染で親友です。4月から中央高校に転学します。よろしくお願いします。」

（元山以外 拍手）

「皆さん、初めまして。同じく、垣楠学園の高校2年生、中津 幸太郎です。学園生活相互研究会の副会長を務めています。茂、光輔の幼馴染で親友です。4月から茂と同じく、中央高校に転学します。よろしくお願いします。」

（中津以外 拍手）

「皆さん、初めまして。江子田学園の高校2年生、江田 市生です。クリスマス委員会に所属していました。お祭り好きです。光輔の幼馴染で親友です。4月から中央高校に転学します。よろしくお願いします。」

（江田以外 拍手）

「皆さん、初めまして。同じく、江子田学園の高校2年生、堀之内 清詞です。弓道部で、クリスマス委員会のサポートをしていました。市生の親友です。4月から市生と同じく、中央高校に転学します。よろしくお願いします。」

（堀之内以外 拍手）

「皆さん、初めまして。有杜美術学園の高校2年生、浅間 真です。学園の名前の通り、美術が得意で、絵を描くことが趣味です。また、喫茶店モデルの店員もしています。光輔の幼馴染で親友です。4月から中央高校に転学します。よろしくお願いします。」

(浅間以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、有杜美術学園の高校3年生、岡 陽太です。真、光輔の親友で、光輔は幼馴染でもありません。4月から光輔と同じく、中央大学美術学部です。よろしくお願いします。」

(岡以外 拍手)

「皆さん、初めまして。望花学園の高校2年生、瀬戸 修司です。光輔の従兄弟で、部活は水泳部のマネージャーと柔道部に所属しています。4月から中央高校に転学します。よろしくお願いします。」

(瀬戸以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、望花大学の高校2年生、日比野 浩一です。部活は所属していません。実家は名古屋で病院経営しています。修司、光輔の親友で、光輔は幼馴染でもあります。4月から修司と同じく、中央高校に転学します。よろしくお願いします。」

(日比野以外 拍手)

「皆さん、初めまして。光葉台学園の高校2年生、立石 総司です。部活はテニス部に所属しています。光輔の幼馴染で親友です。4月から中央高校に転学します。よろしくお願います。」

(立石以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、光葉台学園の高校2年生、平山 圭助です。総司、光輔の親友で、光輔は幼馴染でもあります。部活は所属していません。4月から総司と同じく、中央高校に転学します。よろしくお願います。」

(平山以外 拍手)

「皆さん、初めまして。桃櫻井学園の高校2年生、市原 昌晴です。学園祭実行委員会に所属していました。光輔の幼馴染で親友です。4月から中央高校に転学します。よろしくお願います。」

(市原以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、桃櫻井学園の高校2年生、佐野 幸大です。昌晴、光輔の親友で、光輔は幼馴染でもあります。部活は所属していません。4月から昌晴と同じく、中央高校に転学します。よろしくお願います。」

(佐野以外 拍手)

「皆さん、初めまして。四季創学園の高校2年生、織原 諒一です。実家は和歌山で洋裁店と洋裁教室を営んでいます。部活は所属していません。光輔の幼馴染で親友です。4月から中央心高校に転学します。よろしくお願いします。」

(織原以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、四季創学園の高校2年生、岩出 清貴です。部活は所属していません。諒一、光輔の親友で、光輔は幼馴染でもあります。4月から諒一と同じく、中央心高校に転学します。よろしくお願いします。」

(岩出以外 拍手)

「皆さん、初めまして。765プロダクション事務所に所属しています、天海 春香です。17歳です。光輔の幼馴染で、光輔と付き合っています。光輔には内緒にしていたのですが、4月から中央心高校に転学します。よろしくお願いします。」

(天海以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、765プロダクション事務所に所属しています、如月 千早です。17歳です。よろしくお願いします。」

(如月以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、765プロダクション事務所に所属しています、星井 美希です。15歳です。4月から中央心高校です。よろしくお願いします。」

(星井以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、765プロダクション事務所に所属しています、我那覇響です。17歳です。よろしくお願いします。」

(我那覇以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、765プロダクション事務所に所属しています、菊地真です。18歳です。4月から中央大学音楽部です。よろしくお願いします。」

(菊地以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、765プロダクション事務所に所属しています、四条貴音です。18歳です。4月から中央大学音楽部です。よろしくお願いします。」

(四条以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、765プロダクション事務所に所属しています、高槻やよいです。14歳です。よろしくお願いします。」

(高槻以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、765プロダクション事務所に所属しています、萩原雪歩です。18歳です。4月から中央大学音楽部です。よろしくお願いします。」

(萩原以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、765プロダクション事務所に所属しています、双海

亜美です。13歳です。真美の双子の姉です。『竜宮小町』というアイドルグループに所属しています。よろしく願いします。」

(双海(亜) 以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、765プロダクション事務所に所属しています、双海真美です。13歳です。亜美の双子の妹です。よろしく願いします。」

(双海(真) 以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、765プロダクション事務所に所属しています、秋月律子です。19歳です。『竜宮小町』というアイドルグループのプロデューサー兼アイドルとして活動しています。よろしく願いします。」

(秋月以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、765プロダクション事務所に所属しています、三浦あずさです。21歳です。『竜宮小町』というアイドルグループに所属しています。よろしく願いします。」

(三浦以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、765プロダクション事務所に所属しています、水瀬伊織です。15歳です。『竜宮小町』というアイドルグループのリーダーに所属しています。美希さんと同じく、4月から央心高校です。よろしく願いします。」

(水瀬以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、765プロダクション事務所に所属しています、音無小鳥です。26歳です。事務員兼アイドルとして活動しています。よろしく願います。」

(音無以外 拍手)

「皆さん、初めまして。346プロダクション事務所に所属しています、島村 卯月です。17歳です。光輔の幼馴染で、光輔と付き合っています。『CINDERELLA GIRLS (シンデレラガールズ)』、『new generations (ニュージェネレーションズ)』、『ピンクチェックスクール』というアイドルグループに所属しています。光輔には内緒にしていたのですが、春香と同じく、4月から中央高校に転学します。よろしく願います。」

(島村以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、渋谷凛です。16歳です。『CINDERELLA GIRLS』、『new generations』、『PROJECT:Krone (プロジェクトクローネ)』、『Triad Primus (トライアドプリムス)』というアイドルグループに所属しています。よろしく願います。」

(渋谷以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、本田未央です。16歳です。『CINDERELLA GIRLS』、『new generations』というアイドルグループに所属していて、『new generations』のリーダーです。よろしくお願いします。」

(本田以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、赤城みりあです。11歳です。『CINDERELLA GIRLS』、『凸レーション(デコレーション)』というアイドルグループに所属しています。よろしくお願いします。」

(赤城以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、城ヶ崎莉嘉です。13歳です。『CINDERELLA GIRLS』、『凸レーション(デコレーション)』というアイドルグループに所属しています。よろしくお願いします。」

(城ヶ崎(莉)以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、諸星きらりです。17歳です。『CINDERELLA GIRLS』、『凸レーション(デコレーション)』というアイドルグループに所属しています。よろしくお願いします。」

(諸星以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、アナスタシアです。15歳です。『CINDERELLA GIRLS』、『LOVE LAIKA (ラブライカ)』、『PROJECT:Krone』というアイドルグループに所属しています。4月から央心高校です。よろしくお願ひします。」

(アナスタシア以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、新田美波です。19歳です。『CINDERELLA GIRLS』、『LOVE LAIKA』というアイドルグループに所属しています。よろしくお願ひします。」

(新田以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、神崎蘭子です。14歳です。『CINDERELLA GIRLS』、『Rosenburg Alptraum (ローゼンブルグアルプトラウム)』というアイドルグループに所属しています。よろしくお願ひします。」

(神崎以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、緒方智絵里です。17歳です。『CINDERELLA GIRLS』、『CANDY IS

LAND(キャンディアイランド)』というアイドルグループに所属しています。よろしくお願ひします。」

(緒方以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、双葉杏です。17歳です。『CINDERELLA GIRLS』、『CANDY ISLAND』というアイドルグループに所属しています。よろしくお願ひします。」

(双葉以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、三村かな子です。17歳です。『CINDERELLA GIRLS』、『CANDY ISLAND』というアイドルグループに所属しています。よろしくお願ひします。」

(三村以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、多田李衣奈です。17歳です。『CINDERELLA GIRLS』、『*(Asterisk) with なつなな(アスタリスク ウイズ なつなな)』というアイドルグループに所属しています。よろしくお願ひします。」

(多田以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、前川

みくです。16歳です。『CINDERELLA GIRLS』、* (Asterrisk) with なつなな』というアイドルグループに所属しています。よろしくお願
いします。」

(前川以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、白坂小梅です。13歳です。『CINDERELLA GIRLS』、『Rosenburg Alptraum』というアイドルグループに所属しています。よろしくお願
いします。」

(白坂以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、安部菜々です。23歳です。『CINDERELLA GIRLS』、* (Asterrisk) with なつなな』というアイドルグループに所属しています。よろしくお願
いします。」

(安部以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、木村夏樹です。18歳です。『CINDERELLA GIRLS』、* (Asterrisk) with なつなな』というアイドルグループに所属しています。4月から央心

大学音楽部です。よろしくお願いします。」

(木村以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、上田鈴帆です。14歳です。『CINDERELLA GIRLS』というアイドルグループに所属しています。よろしくお願いします。」

(上田以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、難波笑笑です。17歳です。『CINDERELLA GIRLS』というアイドルグループに所属しています。よろしくお願いします。」

(難波以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、浜口あやめです。15歳です。『CINDERELLA GIRLS』というアイドルグループに所属しています。よろしくお願いします。」

(浜口以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、上条春奈です。18歳です。『CINDERELLA GIRLS』、『ブルーナポレオン』というアイドルグループに所属しています。4月から中央大学音楽部です。よろしくお

願います。」

(上条以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、脇山珠美です。16歳です。『CINDERELLA GIRLS』というアイドルグループに所属しています。よろしく願います。」

(脇山以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、神谷奈緒です。17歳です。『PROJECT:Krone (プロジェクトクローネ)』、『Triad Primus』というアイドルグループに所属しています。よろしく願います。」

(神谷以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、北条加蓮です。16歳です。『PROJECT:Krone (プロジェクトクローネ)』、『Triad Primus』というアイドルグループに所属しています。よろしく願います。」

(北条以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、大槻

唯です。17歳です。『PROJECT:Krone（プロジェクトクローネ）』というアイドルグループに所属しています。よろしく願います。」

（大槻以外 拍手）

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、鷺沢文香です。19歳です。『PROJECT:Krone（プロジェクトクローネ）』というアイドルグループに所属しています。よろしく願います。」

（鷺沢以外 拍手）

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、橘ありすです。12歳です。『PROJECT:Krone（プロジェクトクローネ）』というアイドルグループに所属しています。4月から央心中学校です。よろしく願います。」

（橘以外 拍手）

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、宮本フレデリカです。19歳です。『PROJECT:Krone（プロジェクトクローネ）』というアイドルグループに所属しています。よろしく願います。」

（宮本以外 拍手）

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、塩見

周子です。18歳です。『PROJECT:Krone (プロジェクトクローネ)』というアイドルグループに所属しています。4月から中央大学音楽部です。よろしくお願
いします。」

(塩見以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、速水
奏です。17歳です。『PROJECT:Krone (プロジェクトクローネ)』という
アイドルグループに所属しています。よろしくお願いします。」

(速水以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、小日向
美穂です。17歳です。『Happy Princess (ハッピープリンセス)』、
「ピンクチェックスクール」というアイドルグループに所属しています。よろしくお願
いします。」

(小日向以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、佐久間
まゆです。16歳です。『Happy Princess』というアイドルグループ
に所属しています。よろしくお願いします。」

(佐久間以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、城ヶ崎美嘉です。17歳です。「Happy Princess」というアイドルグループに所属しています。よろしくお願いします。」

（城ヶ崎（美）以外 拍手）

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、日野茜です。17歳です。「Happy Princess」というアイドルグループに所属しています。よろしくお願いします。」

（日野以外 拍手）

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、川島瑞樹です。28歳です。「Happy Princess」、「ブルーナポレオン」というアイドルグループに所属しています。よろしくお願いします。」

（川島以外 拍手）

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、輿水幸子です。15歳です。「カワイイボクと野球どすえ」、略して、『KBVD』というアイドルグループに所属しています。4月から央心高校です。よろしくお願いします。」

（輿水以外 拍手）

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、小早川

紗枝です。16歳です。「カワイイボクと野球どすえ」、略して、『KBYD』というアイドルグループに所属しています。よろしく願います。」

(小早川以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、姫川友紀です。20歳です。「カワイイボクと野球どすえ」、略して、『KBYD』というアイドルグループに所属しています。よろしく願います。」

(姫川以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、及川雫です。16歳です。よろしく願います。」

(及川以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、片桐早苗です。28歳です。よろしく願います。」

(片桐以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、高垣楓です。25歳です。よろしく願います。」

(高垣以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、高森

藍子です。16歳です。よろしくお願いします。」

(高森以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、道明寺

歌鈴です。17歳です。よろしくお願いします。」

(道明寺以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、十時
愛梨です。19歳です。よろしくお願いします。」

(十時以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、藤本
里奈です。18歳です。4月から中央大学音楽部です。よろしくお願いします。」

(藤本以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、星
輝子です。15歳です。4月から中央高校です。よろしくお願いします。」

(星以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、松永
涼です。18歳です。4月から中央大学音楽部です。よろしくお願いします。」

(松永以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、大和亜子です。21歳です。よろしくお願いします。」

（大和以外 拍手）

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、中野有香です。19歳です。よろしくお願いします。」

（中野以外 拍手）

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、水本ゆかりです。15歳です。4月から中央高校です。よろしくお願いします。」

（水本以外 拍手）

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、椎名法子です。13歳です。よろしくお願いします。」

（椎名以外 拍手）

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、五十嵐響子です。15歳です。4月から中央高校です。よろしくお願いします。」

（五十嵐以外 拍手）

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、二宮飛鳥です。14歳です。よろしくお願いします。」

(二宮以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、相葉夕美です。19歳です。よろしくお願いします。」

(相葉以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、堀裕子です。16歳です。よろしくお願いします。」

(堀以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、市原仁奈です。10歳です。「CINDERELLA PROJECT」というアイドルグループに所属しています。よろしくお願いします。」

(市原以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、櫻井桃華です。12歳です。4月から央心中学校です。よろしくお願いします。」

(櫻井以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、龍崎薫です。10歳です。よろしくお願いします。」

(龍崎以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、佐々木千枝です。11歳です。よろしく願います。」

（佐々木以外 拍手）

「皆さん、初めまして。同じく、346プロダクション事務所に所属しています、千川ちひろです。26歳です。事務員兼アイドルとして活動しています。よろしく願います。」

（千川以外 拍手）

「皆さん、初めまして。中央大学音楽部3年生、高坂 穂乃果です。光輔の幼馴染で、光輔と付き合っています。μ'sというアイドルグループのリーダーを務めています。よろしく願います。」

（高坂（穂）以外 拍手）

「皆さん、初めまして。浦の星女学院高校（うらのほしじよがくいんこうこう）2年生、高海 千歌です。穂乃果と同じく、光輔の幼馴染で、光輔と付き合っています。Aqoursというアイドルグループのリーダーを務めています。4月から中央高校に転学します。よろしく願います。」

（高海（千）以外 拍手）

「皆さん、初めまして。中央大学音楽部4年生、絢瀬 絵里です。穂乃果、千歌と同じく、

光輔の幼馴染で、光輔と付き合っています。μ s というアイドルグループに所属しています。4月から央心大学生徒サポートを担当します。よろしくお願ひします。」

(絢瀬(絵) 以外 拍手)

「皆さん、初めまして。浦の星女学院高校3年生、黒澤ダイヤです。A q o u r s というアイドルグループのサブリーダーを務めています。4月から央心大学音楽部です。よろしくお願ひします。」

(黒澤(ダ) 以外 拍手)

「皆さん、初めまして。央心大学音楽部3年生、南ことりです。穂乃果ちゃん、千歌ちゃん、絵里ちゃんと同じく、光輔の幼馴染で、光輔と付き合っています。μ s というアイドルグループのサブリーダーを務めています。よろしくお願ひします。」

(南以外 拍手)

「皆さん、初めまして。浦の星女学院高校2年生の桜内梨子です。A q o u r s というアイドルグループに所属しています。4月から央心高校に転学します。よろしくお願ひします。」

(桜内以外 拍手)

「皆さん、初めまして。央心大学音楽部3年生、園田海未です。穂乃果、千歌、絵里、ことりと同じく、光輔の幼馴染で、光輔と付き合っています。μ s というアイドルグ

グループに所属しています。よろしくお願いします。」

(園田以外 拍手)

「皆さん、初めまして。浦の星女学院高校2年生の渡辺 曜です。穂乃果、千歌、絵里、ことり、海未と同じく、光輔の幼馴染で、光輔と付き合っています。Aqoursというアイドルグループに所属しています。4月から央心高校に転学します。よろしくお願ひします。」

(渡辺以外 拍手)

「皆さん、初めまして。央心大学音楽部2年生、星空 凛です。μ'sというアイドルグループに所属しています。よろしくお願ひします。」

(星空以外 拍手)

「皆さん、初めまして。浦の星女学院高校1年生の国木田 花丸です。Aqoursというアイドルグループに所属しています。4月から央心高校に転学します。よろしくお願ひします。」

(国木田以外 拍手)

「皆さん、初めまして。央心大学音楽部2年生、西木野 真姫です。μ'sというアイドルグループに所属しています。よろしくお願ひします。」

(西木野以外 拍手)

「皆さん、初めまして。浦の星女学院高校1年生の津島 善子です。A q o u r sというアイドルグループに所属しています。4月から央心高校に転学します。よろしくお願います。」

(津島以外 拍手)

「皆さん、初めまして。央心大学音楽部4年生、東條 希です。μ sというアイドルグループに所属しています。4月から央心大学生徒サポートを担当します。よろしくお願います。」

(東條以外 拍手)

「皆さん、初めまして。浦の星女学院高校3年生の小原 鞠莉です。A q o u r sというアイドルグループに所属しています。4月から央心大学音楽部です。よろしくお願います。」

(小原以外 拍手)

「皆さん、初めまして。央心大学音楽部2年生、小泉 花陽です。μ sというアイドルグループに所属しています。よろしくお願います。」

(小泉以外 拍手)

「皆さん、初めまして。浦の星女学院高校1年生の黒澤 ルビィです。A q o u r sというアイドルグループに所属しています。4月から央心高校に転学します。よろしく

お願いします。」

(黒澤(ル) 以外 拍手)

「皆さん、初めまして。 中央大学音楽部4年生、矢澤 にこです。 μ s というアイドルグループに所属しています。 4月から中央大学生徒サポートを担当します。 よろしくお願ひします。」

(矢澤以外 拍手)

「皆さん、初めまして。 浦の星女学院高校3年生の松浦 果南です。 穂乃果、千歌、絵里、ことり、海未、曜と同じく、光輔の幼馴染で、光輔と付き合っています。 A q o u r s というアイドルグループに所属しています。 4月から中央大学音楽部です。 よろしくお願ひします。」

(松浦以外 拍手)

「皆さん、初めまして。 中央大学音楽部4年生、綺羅 つばさです。 A—R I S Eというアイドルグループのリーダーを務めています。 4月から中央大学生徒サポートを担当します。 よろしくお願ひします。」

(綺羅以外 拍手)

「皆さん、初めまして。 同じく、中央大学音楽部4年生、統堂 英玲奈です。 A—R I S Eというアイドルグループに所属しています。 4月から中央大学生徒サポートを担当

します。よろしくお願いします。」

(統堂以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、中央大学音楽部4年生、優木 あんじゅです。A—R—I—S—Eというアイドルグループに所属しています。4月から中央大学生徒サポートを担当します。よろしくお願いします。」

(優木以外 拍手)

「皆さん、初めまして。中央大学音楽部1年生、高坂 雪穂です。お姉ちゃん、千歌さん、絵里さん、ことりさん、海未さん、曜さん、果南さんと同じく、光輔の幼馴染で、光輔と付き合っています。よろしくお願いします。」

(高坂(雪)以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、中央大学音楽部1年生、絢瀬 亜里沙です。お姉ちゃん、穂乃果さん、千歌さん、ことりさん、海未さん、曜さん、果南さん、雪穂ちゃんと同じく、光輔の幼馴染で、光輔と付き合っています。よろしくお願いします。」

(絢瀬(亜)以外 拍手)

「皆さん、初めまして。函館聖泉女子高等学院(はこだてせいせんじょしこうとうがく)の3年生の鹿角 聖良です。Saint Snowというアイドルグループのリーダーを務めています。4月から中央大学音楽部です。よろしくお願いします。」

(鹿角(聖) 以外 拍手)

「皆さん、初めまして。函館聖泉女子高等学院1年生の鹿角 理亞です。Saint Snowというアイドルグループに所属しています。4月から央心高校に転学します。よろしくお願ひします。」

(鹿角(理) 以外 拍手)

「皆さん、初めまして。十千万という旅館で仕事をしています、高海 志満です。23歳です。穂乃果さん、千歌、絵里さん、ことりさん、海未さん、曜さん、果南さん、雪穂さん、亜里砂さんと同じく、光輔の幼馴染で、光輔と付き合っています。4月から央心大学生徒サポーターも担当します。よろしくお願ひします。」

(高海(志) 以外 拍手)

「皆さん、初めまして。央心大学音楽部2年生、高海 美渡です。十千万という旅館で仕事もしています。姉さん、穂乃果さん、千歌、絵里さん、ことりさん、海未さん、曜さん、果南さん、雪穂さん、亜里砂さんと同じく、光輔の幼馴染で、光輔と付き合っています。よろしくお願ひします。」

(高海(美) 以外 拍手)

「皆さん、初めまして。花咲川女子学園高校(はなさきがわじょしがくえんこうこう)1年生、戸山 香澄です。光輔の幼馴染で、光輔と付き合っています。Poppin, P

artyというバンドグループのリーダーで、ギターボーカル担当です。光輔には内緒にしていたのですが、4月から央心高校に転学します。よろしくお願いします。」

(戸山(香) 以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、花咲川女子学園高校1年生、市ヶ谷 有咲です。Pop pin, Partyというバンドグループのキーボード担当です。よろしくお願いします。」

(市ヶ谷以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、花咲川女子学園高校1年生、牛込 りみです。Pop pin, Partyというバンドグループのベース担当です。よろしくお願いします。」

(牛込(り) 以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、花咲川女子学園高校1年生、花園 たえです。Pop pin, Partyというバンドグループのギター担当です。よろしくお願いします。」

(花園以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、花咲川女子学園高校1年生、山吹 沙綾です。Pop pin, Partyというバンドグループのドラム担当です。よろしくお願いします。」

(山吹以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、花咲川女子学園高校3年生、牛込 ゆりです。G l i t

ter*Greenというバンドグループのリーダーで、ギターボーカル担当です。4月から中央大学音楽部です。よろしく願います。」

(牛込(ゆ) 以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、花咲川女子学園高校3年生、鵜沢 りいです。Glitter*Greenというバンドグループのベース担当です。4月から中央大学音楽部です。よろしく願います。」

(鵜沢以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、花咲川女子学園高校3年生、鰐部 菜々です。Glitter*Greenというバンドグループのキーボード担当です。4月から中央大学音楽部です。よろしく願います。」

(鰐部以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、花咲川女子学園高校3年生、二十騎 ひなこです。Glitter*Greenというバンドグループのドラム担当です。4月から中央大学音楽部です。よろしく願います。」

(二十騎以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、花咲川女子学園高校1年生、海野 夏希です。CHISP Aというバンドグループのリーダーで、ギターボーカル担当です。よろしく願います。」

ます。」

(海野以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、花咲川女子学園高校1年生、大湖 里実です。CHISAというバンドグループのドラム担当です。よろしく願います。」

(大湖以外 拍手)

「皆さん、初めまして。羽丘女子学園高校(はおかじよしがくえんこうこう)1年生、川端 真結です。CHISAというバンドグループのキーボード担当です。よろしく願います。」

(川端以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、羽丘女子学園高校1年生、森 文華です。CHISAというバンドグループのベース担当です。よろしく願います。」

(森以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、羽丘女子学園高校2年生、湊 友希那です。Roseliaというバンドグループのリーダーで、ボーカル担当です。よろしく願います。」

(湊以外 拍手)

「皆さん、初めまして。花咲女子学園高校2年生、氷川 紗夜です。Roseliaというバンドグループのギター担当です。よろしく願います。」

(氷川(紗) 以外 拍手)

「皆さん、初めまして。羽丘女子学園高校2年生、今井 りさです。Roseliaというバンドグループのベース担当です。よろしくお願いします。」

(今井以外 拍手)

「皆さん、初めまして。羽丘女子学園中学校3年生、宇田川 あこです。Roseliaというバンドグループのドラム担当です。よろしくお願いします。」

(宇田川(あ) 以外 拍手)

「皆さん、初めまして。花咲女子学園高校2年生、白金 燐子です。Roseliaというバンドグループのキーボード担当です。よろしくお願いします。」

(白金以外 拍手)

「皆さん、初めまして。羽丘女子学園高校1年生、美竹 蘭です。Afterglowというバンドグループのギターボーカル担当です。よろしくお願いします。」

(美竹以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、羽丘女子学園高校1年生、青葉 もかです。Afterglowというバンドグループのギター担当です。よろしくお願いします。」

(青葉以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、羽丘女子学園高校1年生、上原 ひまりです。After

「r g g i o wというバンドグループのリーダーで、ベース担当です。よろしくお願ひします。」

(上原以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、羽丘女子学園高校1年生、宇田川 巴です。A f t e r g l o wというバンドグループのドラム担当です。よろしくお願ひします。」

(宇田川(巴) 以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、羽丘女子学園高校1年生、羽沢 つぐみです。A f t e r g l o wというバンドグループのキーボード担当です。よろしくお願ひします。」

(羽沢以外 拍手)

「皆さん、初めまして。花咲女子学園高校2年生、丸山 彩です。P a s t e l * P a l e t t e sというバンドグループのリーダーで、ボーカル担当です。よろしくお願ひします。」

(丸山以外 拍手)

「皆さん、初めまして。羽丘女子学園高校2年生、氷川 日菜です。P a s t e l * P a l e t t e sというバンドグループのギター担当です。よろしくお願ひします。」

(氷川(日) 以外 拍手)

「皆さん、初めまして。花咲女子学園高校2年生、白鷺 千聖です。P a s t e l * P a

lettersというバンドグループのベース担当です。よろしく願います。」
 (白鷺以外 拍手)

「皆さん、初めまして。羽丘女子学園高校2年生、大和 麻弥です。Pastel*Palettesというバンドグループのドラム担当です。よろしく願います。」

(大和以外 拍手)

「皆さん、初めまして。花咲川女子学園高校1年生、若宮 イヴです。Pastel*Palettesというバンドグループのキーボード担当です。よろしく願います。」

(若宮以外 拍手)

「皆さん、初めまして。花咲川女子学園高校1年生、弦巻 こころです。ハロー、ハッピーワールド!というバンドグループのリーダーで、ボーカル担当です。よろしく願います。」

(弦巻以外 拍手)

「皆さん、初めまして。羽丘女子学園高校2年生、瀬田 薫です。ハロー、ハッピーワールド!というバンドグループのギター担当です。よろしく願います。」

(瀬田以外 拍手)

「皆さん、初めまして。花咲川女子学園高校1年生、北沢 はぐみです。ハロー、ハッ

ピーワールド！というバンドグループのベース担当です。よろしくお願いします。」

（北沢以外 拍手）

「皆さん、初めまして。花咲女子学園高校2年生、松原 花音です。ハロー、ハッピーワールド！というバンドグループのドラム担当です。よろしくお願いします。」

（松原以外 拍手）

「皆さん、初めまして。花咲川女子学園高校1年生、奥沢 美咲です。ハロー、ハッピーワールド！というバンドグループのDJ担当です。よろしくお願いします。」

（奥沢以外 拍手）

「皆さん、初めまして。央心大学音楽部1年生、平沢 唯です。光輔の幼馴染で、光輔と付き合っています。放課後ティータイム&わかばガールズ、略して『HTT&WGS』というバンドグループのリーダーで、ギターボーカル担当です。よろしくお願いします。」

（平沢（唯）以外 拍手）

「皆さん、初めまして。同じく、央心大学音楽部1年生、秋山 澪です。放課後ティータイム&わかばガールズ、略して『HTT&WGS』というバンドグループのベース担当です。よろしくお願いします。」

（秋山以外 拍手）

「皆さん、初めまして。同じく、央心大学音楽部1年生、田井中 律です。放課後ティー

タイム&わかばガールズ、略して『H T T & W G S』というバンドグループのドラム担当です。よろしく願いします。」

(田井中以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、中央大学音楽部1年生、琴吹 紬です。放課後ティータータイム&わかばガールズ、略して『H T T & W G S』というバンドグループのキーボード担当です。よろしく願いします。」

(琴吹以外 拍手)

「皆さん、初めまして。桜ヶ丘高校(さくらがおかこうこう)3年生、中野 梓です。放課後ティータータイム&わかばガールズ、略して『H T T & W G S』というバンドグループのギターボーカル担当です。わかばガールズのリーダーも務めています。よろしく願いします。」

(中野以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、桜ヶ丘高校3年生、平沢 憂です。光輔の幼馴染で、光輔と付き合っています。放課後ティータータイム&わかばガールズ、略して『H T T & W G S』というバンドグループのギター、またはキーボード担当です。よろしく願いします。」

(平沢(憂) 以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、桜ヶ丘高校3年生、鈴木 純です。放課後ティータイム & わかばガールズ、略して『HTT&WGS』というバンドグループのベース担当です。よろしく願います。」

(鈴木以外 拍手)

「皆さん、初めまして。花咲女子学園中学校3年生、戸山 明日香です。光輔の幼馴染で、光輔と付き合っています。Master*KeynesとPeace*Smile というバンドグループのギターカル担当です。4月から央心高校です。よろしく願います。」

(戸山(明) 以外 拍手)

「皆さん、初めまして。央心大学音楽部1年生、真鍋 和です。光輔の幼馴染で、光輔と付き合っています。Master*KeynesとPeace*Smile というバンドグループのキーボード担当です。よろしく願います。」

(真鍋以外 拍手)

「皆さん、初めまして。同じく、央心大学音楽部2年生、曾我部 恵です。Master*KeynesとPeace*Smile というバンドグループのベース担当です。Peace*Smileのリーダーも務めています。よろしく願います。」

(曾我部以外 拍手)

「皆さん、初めまして。真次 凜々子です。Master*Keynesと4AW's
というバンドグループのドラム、4AW'sで活動しているときはベース担当です。よ
ろしく願います。」

(真次以外 拍手)

「皆さん、初めまして。月島 まりなです。Master*Keynesと4AW's
というバンドグループのギター担当です。よろしく願います。」

(月島以外 拍手)

「皆さん、初めまして。山中 さわ子です。Master*Keynesと4AW's
というバンドグループのリーダーで、ギターボーカル担当です。よろしく願いま
す。」

(山中以外 拍手)

「皆さん、初めまして。河口 紀美です。Master*Keynesと4AW'sと
いうバンドグループのギター、4AW'sで活動しているときはベース担当です。よろ
しく願います。」

(河口以外 拍手)

「皆さん、初めまして。保登 心愛です。光輔の幼馴染で、光輔と付き合っています。実
家がパン屋です。4月から中央高校に転学します。よろしく願います。」

(保登以外 拍手)

「皆さん、初めまして。香風 智乃です。実家が喫茶店で、その喫茶店で店員を務めています。よろしくお願ひします。」

(香風以外 拍手)

「皆さん、初めまして。天々座 理世です。智乃の喫茶店で店員を務めています。よろしくお願ひします。」

(天々座以外 拍手)

「皆さん、初めまして。宇治松 千夜です。実家が智乃ちゃんとは違う喫茶店で、その喫茶店の店員を務めています。よろしくお願ひします。」

(宇治松以外 拍手)

「皆さん、初めまして。桐間 紗路です。智乃ちゃん、千夜とは違う喫茶店で店員を務めています。よろしくお願ひします。」

(桐間以外 拍手)

「皆さん、初めまして。条河 麻耶です。智乃の親友です。よろしくお願ひします。」

(条河以外 拍手)

「皆さん、初めまして。奈津 恵です。実家がバレエ教室をやっています。私もバレエはしていました。今はやっていません。智乃ちゃんと麻耶ちゃんの親友です。よろし

くお願いします。」

(奈津以外 拍手)

「皆さん、初めまして。青山 翠です。小説家の仕事をしています。よろしくお願いします。」

(青山以外 拍手)

「皆さん、初めまして。真手 凜です。青山先生の仕事のサポート担当をしています。よろしくお願いします。」

(真手以外 拍手)

「これで全員、紹介が終わったね。ここからは友達みたいに呼びますか。」

俺が言った後、他のメンバーも頷いた。

「それで、聞きたいんだが…春香、卯月、香澄。まさか、転学するとは思わなかったぞ…」
「そりゃあ、光輔といられる時間が長くなるもん。」

俺の言ったことに、春香、卯月、香澄は当然という感じで言った。

「…確かに、大学と高校、隣同士だけどさ…」

俺は呆れるように言った。

「…香澄。マジで言っているのか？」

そう言ったのは、有咲だ。その声はさみしげだった。

「…もしかしてだが、彼女達にも言っていないのか？」

「うん。まだ、付き合っていることも言っていないからね。」

「はあ!?!マジで!?!」

香澄の言ったことに俺は驚いた。俺はアイコンタクトで彼女達に確認してみると、彼女達は頷いた。

「…それはまずくないか? しかも、家から央心高校ってそっちからだど、電車で1時間近くかかるはずだぞ…」

俺は何回か香澄の家に行ったことがあるので、央心大学の最寄り駅と香澄の家の最寄り駅を考えると、そのはずだ。

「それでも大丈夫! ギター持って行くのは大変だけど、何とかするよ!」

「…はあ…それならいいが…」

香澄の言ったことに、俺はため息をつきながら言った。

「…と言っているのだが、どうなんだ? その点?」

俺は彼女達を見て言った。

「…正直言つて、信じられねえ…香澄…どうなるんだよ…私達…」

有咲は少し怒りがこみ上げた感じで言った。

「そうだよ…香澄ちゃんがそっちに行ったら、練習はどうするの…?」

りみは心配そうに言った。

「香澄がいて、私達なんだよ。いなくなるなんて、耐えられないよ……」

たえは消え入りそうな声が言った。

「香澄。お願い。花咲川に残って欲しい。どうにかならないの？」

沙綾が困惑した状態で香澄に聞いた。

「あつ……そ、それは……」

香澄は困った顔で言った。そして、俺に振り返った。

「こういうことだ。目先の者を得ろうとして、身近の者を失うこともあるんだ。その点を考えなかったのか？」

俺は香澄に聞いた。

「……少しは考えていたけど、納得してくれると思っていたから……」

「……はあ……そんなに甘くないぜ……まさかだが、俺がどうにかしてくれると思っていたのか？」

予想通りの答えが来て、俺は呆れながら言った。

「……難しそう？」

香澄は不安げに聞いてきた。

「……まったく……出来ないってことはないけど……次があるとは思うなよ……」

俺は呆れながら言った。

「今なら、まだ間に合う。央心高校に転学する気があるなら、1週間後、転入試験がある。それが進級前、最後のチャンスだ。どうする?」

俺は彼女達に聞いた。

「…その試験、受ける。あたしも央心高校に転学するよ!」

「私も央心高校に行きたい!香澄ちゃんと一緒にバンドやっていきたいから!」

「あたしも央心高校に行きたい!香澄と一緒にバンドをやっていきたい!」

「私も央心高校に行きたい!香澄と一緒にバンドを続けたい!」

少し間を置いた後、有咲、りみ、たえ、沙綾はそう答えた。

「そのことなんだけど、あたし達もいいかしら?」

そう言ったのは、友希那だ。その他のメンバーも同じように頷いた。

「分かった。香澄。ちよつとは考えて行動してくれよ。」

「みんな…ありがとう…!そして、光輔、ごめん…」

香澄は少し涙目になりながら言った。

「はあ…まあ、いいけど。それで、次に、バンドやっていた人はパート担当の楽器を持ってくるように言っていたけど、何故だ?」

俺は香澄に聞いた。

「光輔がバンドやってたってことを唯ちゃんから聞いて、それで。」

香澄は少し気恥ずかしそうに言った。

「ああ…でも、今はあまりやっていないぞ。気が向いたときにしかやっていないんだ。鉄道のことを時間を割くことが多くなってきたからな。」

「そうなの?」

俺が少し申し訳なさそうに言うと、唯がそう聞いてきた。

「ああ。電車の写真とか音を聞く、撮るとかしている方が楽しいからな。」

「そ、そうなんだ…あれ? ってことは、ダンスもそんな感じなの?」

俺がそう言った後、穂乃果と千歌が聞いてきた。

「そうだ。趣味の時間の割合としては、鉄道が6割、野球が2割、バンド、ダンスは1割かな?」

俺は考えながら答えた。

「光輔、本当にいろいろな趣味持っているな…」

俺と親しいメンバーが感心したように言った。

「じ、自慢じゃないからな!?!ただ、趣味程度にやっているからな! 鉄道を除くが…」

俺はたどたどしく言った。

「いいじゃん。それで、光輔にお願いがあるんだけど、もう一回、ギターを弾いてくれな

い?。」

「マジで!？」

香澄の言ったことに、俺は驚いた。

「…あまり人前に見せられないもんだけどなあ…」

「それでもいいから、光輔のギターの音を聞きたいの!」

「私も久しぶりに光輔のギターの音を聞きたいなあ。」

俺は戸惑った感じで言ったが、香澄はお構いなしって感じで言った。唯ものんきそうに言った。

「…はあ…分かったよ。春希、武也、親志、和馬、紀洋、大智、清司。手伝ってくれるか?」

「OK!」

俺は仕方なく、了承した。1人だけって言うのもなんなので、春希、武也、親志、和馬、紀洋、大智、清司も手伝ってもらうことにした。

「それで、光輔。何の曲をやるんだ?」

「SMAPの『Otherside』って曲だ。出来るか?」

俺は春希、武也、親志、和馬、紀洋、大智、清司に確認した。

「OK!大丈夫だ。て言うか、あの大会の優勝曲でやるのか。」

「まあな。悪くはないんじゃないか？弾けるかどうかは分からんが、やれるだけ、やってみるか。さてと…」

春希はそう言った。俺はそう答えながら、チューニングを開始した。

「…こんな感じか。さあ、始めよう。春希、武也、親志、和馬、紀洋、大智、清司。行くぞ！」

俺は春希、武也、親志、和馬、紀洋、大智、清司に合図をした。

「OK！」

春希、武也、親志、和馬、紀洋、大智、清司はそう言い、俺達は弾き始めた。

「!？」

俺が曲の冒頭を弾き始めたとき、彼女達は驚いたのを確認した。

「イエーイ!!」

俺はそう言い、メンバーを鼓舞して、曲へ入っていった。

「…とまあ、こんな感じか。つて…」

弾き終わった後、俺は彼女達を見たのだが…

「…何で、そっちが魂抜けている?」

何故か、彼女達は魂が抜けたかのような感じで呆然としていたのだ。

「…あつ、お、終わっていったんだ…」

「…待て? 聞いていたのか?」

香澄が言ったのを俺は聞き逃さなかった。

「聞いていたけど、圧倒されて、なんて言えばいいのか…」

「…そんなに?」

俺はやや呆れた感じで言った。

「…すごい…こんなに引き込まれる感じ、初めて…」

友希那は感心したように言った。その他のメンバーもそんな感じだったようだ。

「…そうか。まあ、いいや。ところで、あんた達、バンドの目標ってあるのか? あの時の

LIVEの演奏を聴いていたけど、俺達とそんなにLIVELが変わらないはずだけど

?」

俺は話題を変えた。

「私達、Poppin' Partyはキラキラドキドキするような演奏をすること!」

「私達、ハロー、ハッピーワールド!は世界中を笑顔にする演奏をすること!」

「私達、放課後ティータイム&わかばガールズはみんなで楽しく演奏すること!そして、

ティータイムを楽しむこと！」

香澄とこころが一齐に答えた。

「香澄と唯はそれらしいな。ただ、唯。最後は目標ではない。こころはこれまたでかい夢だな…悪くはないが。他は？」

「私達、Pastel*Palettesもみんなで楽しく演奏することよ。」

「私達、Afterglowはみんなでもいつも通り、楽しくバンドをすることよ。」

「私達、Master*Keynesもみんなでも楽しく演奏することよ。」

俺がそう言った後、彩と蘭、さわ子さんはそう答えた。

「なるほど。いい目標だな。Roseliaは？」

「私達は、FUTURE WORLD FES.に出場すること。そして、そこで優勝するこよ。」

「FUTURE WORLD FES. …？あの大会か？」

友希那の言ったことに、俺は驚いた。

「ええ。バンドやっていた貴方も知っているはずよ。何故、驚いているの？」

「…知っているも何も、俺はその大会に出場して、優勝したことがある。確か、1年前だ。」

「!?」

俺の言ったことに、バンドメンバー全員、驚いた。

「1年前って…私達が出場しようとした、あの大会…!」

「ん? エントリーしていたのか? って、あつ、そういえば…」

友希那の言ったことに、俺はあることを思い出した。

「湊ってどこかで聞いたことあるなって思っていたら、あの人、友希那の父さんだったのか。確か、3年前、優勝だったな…」

そうだ。3年前、優勝したバンドに湊と言う名字が入っていた。ってことは、友希那はその人の娘なのか。

「そうだったのか…いや、あの大会はもう…思い出しはならないものだ。あれは…いかななものか…疑問を覚えた大会だった。」

「…え?」

俺の言ったことに、友希那は驚いていた。

「…合っていれば、3年前、友希那の父さんのバンド、あれがきっかけで解散に追い込まれたんだろ? でたらめも程々にしてほしいもんだ。」

「…どういふこと?」

友希那は俺に接近して聞いてきた。

「正直、あの優勝はいかなものだった。やらせの大会だったのさ…1年前、自分も似た

ようなことをやらされたからな。」

俺は苦虫を噛み潰したような感じで話を続けた。

「俺は3年前、その大会に行っていたんだ。正直、友希那の父さんのバンドが優勝すると思っていたんだ。今の俺達のバンドと同じく、何よりも音楽を、この大会を楽しんでいた。お互いに観客視点で演奏していたんだ。だが…」

「そこで、何かあったの？」

友希那は興味津々で俺に聞いてきた。

「決勝戦が始まる15分前くらいのことだ。トイレを済ませて、戻ろうとしたとき、大会運営者と審査委員が何か話をしていったんだ。それを聞いたときは驚いたよ…観客の結果関係なしに、別のバンドを優勝させようとしていたことを知った。」

「…!?そ、それは、本当なの!?!」

友希那は驚いてそう言った。

「ああ。そして、大会運営者と審査委員の思惑通り、別のバンドを無理矢理、優勝にさせた…八百長にもほどがある。」

「…そんな…」

「…改めて、聞くと、本当に信じられない大会だったな…」

俺の話したことに、友希那は愕然とした。春希ももどかしそうに言った。

「…友希那さんの父さんに、このことは伝えられなかったのですか？」

紗夜は俺に聞いてきた。

「無理だった。そもそも当時、自分と友希那の父さんは接点がなかったし、決勝戦演奏30分前は最終調整で、最終調整中は話しかけることが出来ないんだ。友希那の父さんのバンドは決勝戦最初の演奏で、練習順も最後だった。それを知ったときは既にステージにいたんだ。計算通りだったってことだ。」

「マジかよ…そんな大きな大会でそんなことがあつたなんて…」

俺の言ったことに、有咲は呆然とした感じで言った。

「後は友希那の思っているとおりでと思うが、友希那の父さんは大会運営者に責められ、自分達の理想の音楽を作ることが出来なくなり、バンドは解散し、友希那の父さんはバンドをやらなくなってしまった…」

「そんな…正直、信じられない…酷すぎます…」

「これは酷すぎます…」

「…酷すぎる…」

「正直、これは酷すぎる…」

「とても信じられない…とても許せないことだ…」

「酷いよ…人の夢を奪うなんて…」

「これはあまりにも酷すぎます…」

「音楽界を冒瀆するような行為ですね。」

「その人達の笑顔を奪ったってことね。酷すぎる…」

「あまりにも信じがたい行動だ。大会出場者を侮辱するような行為だ。」

俺の言ったことに、香澄、紗夜、あこ、蘭、巴、彩、千聖、麻弥、こころ、薫は悲しさと怒りが込み上がったように言った。

「同感だ。その後…つまり、1年前、自分はこの大会に出場して、優勝。そこで、次回大会出場権と音楽界のメジャーデビューのオファーが来たけど、即断った。こんなやらせの大会でこんなものを得たって、何も嬉しくないし、何よりも大会出場者に謝らなければならぬものだ。だが、謝罪の言葉はなかった。それが明るみに出たのは次の大会だった…」

「…その時まで隠蔽していたってことね。」

「そういうことだ。俺も大会後、大会運営者と審査委員にこのことを問いただしたのだが、追及をかわした。」

俺はもどかしそうに言った。

「ちなみに、このことは今回の別の大会運営者と審査委員の内部告発で発覚したんだ。しかも、その大会にも同じことがあったってことが分かった。当然、告発したもの以外

の当時の大会運営者と審査委員は全員、解雇。その後、当時の大会運営者と審査委員が俺の所によくやく、謝罪が来たんだ。」

「え、来たのか？」

「1年も待たせるなんて…酷すぎませんか？」

春希は驚いたように言った。イヴは悲しそうに言った。

「ああ。春希達はいなかった。実を言うと、今年の大会は俺、観客として見に行っていたんだ。大会終了後、彼らが俺に謝罪に来たことはいいんだが…今も友希那の父さんに謝罪の言葉はない。行って欲しいと頼んだが…」

「…まさか…!」

武也は何かを感じたらしく、俺は武也の思った通りのことを言った。

「そのまさかだ。『残念ながら、それは私達には関係のないことです。彼らが決めたことです。』と。」

「…!」

そういつたとき、バンドメンバー全員の怒りを感じ取った。

「さすがの俺も怒りを覚えた。謝罪をしないどころか、関係ないと切り捨てたからな。誰のせいでこんなことになったのか、まるで分かってない様子だった。」

「マジかよ!あり得なさすぎるだろ!冗談じゃないぞ!」

「酷すぎないか!? 人の人生を切り裂いてまで、謝罪の言葉なし。しかも、関係ないと切り捨てる…人としてどうなんだ!？」

「そんな! 酷すぎるよ! あり得ないよ! こんなの、許せないよ!」

「こんなこと、あつていいのか!? 人を、大会を何だと思ってるんだ!？」

「そんなの酷すぎます! 武士道に反します!」

「こんなことで笑顔を奪っていくなんて、酷すぎるよ!」

和馬、大智、香澄、巴、千聖、イヴ、こころも怒りをあらわにしていった。

「言いたいことは分かる。だから、俺はそれ以降、自分が納得いく大会に出ているんだ。小さくても、楽しめられればそれでいいって決めたんだ。」

「そうなんだ…」

俺の言ったことに、彼女達は納得した。

「それで、友希那。こんなことを話して何だけど…どうする? やっぱり、FUTURE WORLD FES. に出るのか?」

「…そうね…」

俺がそう言った後、友希那は考えた。そして、数秒後、こう言った。

「出るわ。優勝も狙う。だけど、それだけじゃない。」

「と言うと?」

「自分達が楽しめられる大会になればそれでいい。心の底から音楽を楽しめたらいいよ。うな大会にしたい。他の大会にも出たい。今後はそれも含んでいきたいわ。」

「…他のメンバーもそれでいいか？」

俺がそう聞いたとき、紗夜、りさ、あこ、燐子は頷いた。

「分かった。その時は経験者として、いろいろとアドバイスをしよう。」

「ありがとう。」

友希那はお礼を言った。

「さて、これで、俺の疑問は解決したけど…何か他にあるか？」

「あつ、それだったら、私から一ついい？」

俺がそう言った後、穂乃果、千歌がそう言った。

「光輔。大学のサークルはどうするの？」

「ああ。鉄道研究には絶対に入るつもりだ。後はどうするか、考えている。」

「そこって、アイドル部ってあるの？」

「確か、なかったはず。音楽関係なら、吹奏楽、合唱、軽音がある。何かやりたいのか？」

俺は2人に聞いてみた。

「あの…お願ひがあるんだけど、鉄道研究には入ってもいいから、もう一つサークルに入ってくれない？」

意外な問いかけだった。

「それは元々考えていた。軽音か水泳に入ろうかどうか迷っていたんだ。」

実際、趣味程度にギターをやっているから、そのつもりだったが、鉄道のことには時間を費やしたかったので、迷っていたのだ。ちなみに、水泳は長らくやってきていたスポーツの1つで（野球よりも長くやっている）、まだ続けたいと思っていたのだ。

「光輔。なら、私達の要素を一緒にしたサークルを作ってくれない？」

「はあ!？」

穂乃果と千歌の言ったことに俺は驚いた。

「全員、趣味がバラバラだぞ！これらを1つに集めたサークルって…どうやるのさ？活動目的がなんだか分からんし…」

「そこは光輔が何とかしてくれると信じているよ！」

穂乃果と千歌の発言に俺は呆れた。

「はあ…結局、そうなるのか…」

「光輔が言っていた『常識にとらわれず、新しい常識を作れ』ってことを思い出して。だから、お願い！」

「…！」

「お前ら…覚えていたのか…!？」

穂乃果と千歌の発言に俺は驚いた。俺だけじゃなく、他のメンバーも驚いていた。俺は少し迷った後、こう言った。

「…分かったよ。だけど、勘違いするなよ。確かに、今まである常識を嫌っているところもあるけど、全部の常識を嫌っているわけじゃないし、ちゃんと従っている常識もあるからな。」

「ありがと！光輔ならそう言ってくれると思ったよ！」

「はあ…次からこういうことがあると思うなよって言いたいところだったけど、敵わないなあ…」

俺は再度呆れながら言った。

「だが、いろいろとあるぞ。大体、サークル名なんて、どうするんだ？それに、さつきもいったが、目的は？」

「それなら、決めてあるんだ！」

穂乃果と千歌だけではなく、香澄、唯も答えた。

「香澄と唯まで考えていたのか？で、何だ？」

「それは、『多趣味』サークル！」

「た、多趣味サークル!?!」

穂乃果、千歌、香澄、唯の答えたことに、俺達は驚いた。

「文字通り、多くの趣味を持つているメンバーが集まっているサークルよ！目的は多趣味で人との交流を深めようってことよ！」

「…つまり、いろいろなサークルに所属したい人にとっては、このサークル一つでいろいろなことが出来るってことか。」

穂乃果、千歌、香澄、唯の言ったことに、俺はそう解釈した。

「そう。これなら、光輔も一つのサークルで十分でしょ？そして、私達という時間も増えるし！」

「いや、高校は部だし、大学はサークルだから、一緒ではないだろう。そもそも一緒に出来るのか？」

「そこも光輔がどうにかしてくれると信じているよ！」

「いやいや！それは無茶だ！活動時間が全然違うから！」

それはさすがに無茶だ。部活動とサークルは活動時間が全然違うし、そもそも、メリハリが違う。

「あつ、そうだった…」

穂乃果、千歌、香澄、唯はしよんぼりした。

「時間割によるけど、大学は朝に授業ないってことがあるから、その時間も活動していることもある。まあ、そっちの放課後ならどうにかなるが…」

「だったら、放課後、一緒に活動しよ！」

穂乃果、千歌、香澄、唯は予想通りのことを言ってきた。

「分かったよ。その時間があるならばね。だが、まずはそのサークルを作る趣旨を立てねばならん。」

「そのサークルが出来たら、真っ先に入るよ！」

「言うと思ったわ！」

俺は素早く突っ込んだ。

「あの…そのサークルなんだけど…私達も入っていい？」

そう聞いてきたのは、友希那だ。他のメンバーも同じように頷いた。

「いいけど…活動内容なんて、ほぼ自由だぞ。納得のいく練習が出来るとは限らない。それでもいいの？」

「それでも構わないわ。そこは光輔に任せるわ。」

友希那はそう答えた。他のメンバーも同様に頷いた。

「…分かった。しかし、真っ先に入るといふとは思わなかったな…何か理由があるのか？」

俺は友希那に聞いた。すると、友希那は顔を赤くして、もじもじし始めた。友希那以外に蘭、彩、こころも何故かもじもじしていた。その瞬間、俺は気づいた。

「…へ？まさか…？」

まさかと思ひ、俺は彼女達に聞いた。そういや、友希那を始め、蘭、彩、こころは真つ先に俺の意見に賛同していたなあ…

「そ、そのまさかよ…光輔のことが好きなの…」

………

「えっ!？」

友希那、蘭、彩、こころの言ったことに、その4人を除く彼女達は驚いた。俺ももちろん驚いて、自分の予想通りに口があんぐり開いたままになった。

〜次回に続く〜

アイドル&バンドメンバーの告白、波乱の恋

「…何となくそんな気がしていたが、まさか、言うとは思わなかったなあ…」

俺は少しため息をつきながらそう言った。実際、俺は彼女達が何となく俺に恋心を感じていることに気づいていた。内心、俺は一体、何人の彼女を持つことになるんだろうなあと考えていたのはここだけの話。

「何かまずいことでもあるの?」

蘭が俺に聞いてきた。

「あれ?分かってているはずんだけど…俺、一応、他にも彼女いるけど…って。」

俺は蘭にそう答えた後、視線を感じたので振り向くと、香澄達が少し頬を膨らませているのに気づいた。

「むう…光輔。少しモテすぎてない?」

「そ、そんなことあるか!」

香澄の言ったことに俺は反論した。だが、意外なところから相手の援護射撃が飛んできた。

「いえ、曾田さん…いえ、光輔さん。モテるのは事実ですよ。」

紗夜が何故か顔を真つ赤にしながら言った。

「はっ？何故に顔を赤くしながら言っている？紗夜？つて、え？」

紗夜にそう言った後、妙な違和感に気づいた。

「…待て。他にも好意を持っている人がいるな…」

小さい声でそう言い、俺はバンドメンバーをチエックした。

「…ざっと、後7人は好意を持っているな。」

確認した後、俺は小声でそう言った。

「ん？光輔。どうした？」

俺の様子が気になった修司が小声で話してきた。

「ん？ああ…なんか俺を気にしている人がいてな…ざっと7人いるんだよな…」

俺は修司に小声でそう言った。

「7人？誰？」

修司は小声で聞いた。

「有咲、紗夜、燐子、ひまり、千聖、花音、美咲だな…何かしら、俺のことを気にしてる感じがする。」

「…あく。確かに。ちよいちよい光輔のことを見ているな。もしかしたら、その可能性もあるかもしれない。」

修司は俺に納得した。

「…光輔さん？どうかしました？」

千聖が気になる様子で聞いてきた。

「あつ。いや。何でもない。こっちの話だ。」

俺はそう答えた。しかし、このことで少し冷や汗が出たな…

「…で、だ。一応、蘭たちの言ったことは理解できていないわけではない。だが、俺、一応、他にも彼女いるぞ。それでもか？」

俺は彼女達に聞いた。

「…戸山さんが光輔に好意を持っていたのは分かっていたわ。だけど、戸山さんから光輔のことを聞いているうちに、興味が出てきた。そして、演奏を聴いて、音楽以外にも興味が出てきた。それが貴方だったのよ。私はたとえ、戸山さんと付き合っても、構わないわ。戸山さんより、その好意を超えてみるから。」

「私もよ。光輔の演奏を聴いて、好意が変わったわ。香澄から光輔のことはいろいろ聞いていたわ。その時に興味があったのは、湊先輩と一緒に。私も湊さんや香澄と付き合っている、構わないし、私もその好意は超えてみせる。」

「私も光輔の歌を聴いて、好意が変わった。そして、香澄ちゃんに光輔のことはいろいろと聞いていた。それも含めて興味は出てきたわ。もちろん、私も香澄ちゃんや友希那さ

ん、蘭ちゃんが光輔と付き合っているも構わないよ。でも。その好意は私も負けないよ。」

「私もだよ。私も光輔の演奏を聴いて、好意に変わったわ。私も光輔のことは香澄から聞いていたわ。もちろん、あなたの歌を聴いて、笑顔になったし、興味もわいたわ。もちろん、香澄や友希那、蘭、彩にも好意では負けないわ。もちろん、みんなに負けないからね。」

彼女達はそれぞれ決意のあるような感じで言った。

「…そうか。彼女達からの言葉、全くの曇りもないな。」

俺は彼女達をしばらく見てそう言った。

「…光輔？もしかして…」

香澄はやや不安げな顔で俺に聞いてきた。

「何かまずいか？」

俺は香澄に言った。

「ううん。やっぱり光輔、モテモテじゃん。妬いちゃうな。」

「うぐつ…」

香澄の言ったことに俺は反論できなかった。それどころか、春香、卯月、穂乃果、雪穂、ことり、海未、絵里、亜里砂、千歌、美渡、志満、曜、果南、明日香、唯、憂、和、

心愛も同じように頷いていた。

「いやいや！待って待って！お前らまで頷くと、さすがに立場がない！」

俺はあたふたした。さすがに彼女達まで納得されると…

「さすがだな。俺も人のことは言えないけど。」

修司はからかいつつ、同情するような感じで言った。

「…認めたくないものだ…」

俺は呟くように言った。

「で、だ。友希那達以外で、他にも気になるのだが…」

俺は先程思った疑問をぶつけた。

「有咲、紗夜、燐子、ひまり、千聖、花音、美咲。話している間に俺をちらちら見ていたが…何だ？」

「えっ!？」

そう問いかけると、彼女達は動揺した。

「あつ、あの…こんなこと聞くのも何ですけど…本当に…(う)によ(う)によ(う)」

「紗夜。最後の方、なんて言った？」

「…モテますね。私も好きなのに…どうしよう…」

「…へ？」

最後に言った言葉を俺は聞き逃さなかった。

「紗夜。あなたもだったの?というか、紗夜も乙女なんだね。」

「そ、それを言ったら、友希那さんもそうでしょ!?!」

「まあ、私もそうだけど…(苦笑)」

友希那の言ったことに紗夜は顔を真っ赤にして反論した。

「妹の日菜はどうなの?」

俺は日菜に聞いた。

「びっくりしたよ。お姉ちゃんが恋するなんてね。でも、いいんじゃない?そういうの。お姉ちゃんの思いはあたしも応援するよ!」

「言っていた通り、明るい人だな。」

日菜は喜んでそう言った。日菜のことは香澄から彩を経由して聞いていた。

「それを考えると、燐子もそうだったんだね。燐子は逆に他の人に好まれそうだけどね…」

「私も思ったわ。白金さんまで光輔さんのことが好きなんて…油断できないかしら?」

友希那は疑問を、紗夜は少しからかうように言った。

「そ、そんな…!」

燐子はこれに関して、戸惑ったように言った。

「だけど、それが事実だなんて言う証拠だな。悪くはないけど…」

「よ、よかった…」

俺がそう答えると、隣子は頬を赤らめて答えた。

「千聖はこの2人と同じことか？」

俺は千聖に確認した。恐らく、俺に1番食いついていたのは彼女だった。

「え、ええ…」

「…やはりそうか。今言ったメンバーの中では1番見ていたからな。」

「えっ? そうだっけ?」

俺の言ったことに千聖は少しごまかしを含むように言った。

「花音、俺も含めて、千聖もちらちら見ていたけど、気にしていたか?」

「えっ!?!」

俺の急な質問に花音は戸惑って言った。

「う、うん…千聖ちゃん。結構見ていたよ。」

「えっ!?!花音まで!?!それだったら、花音も結構見ていたでしょ!?!」

「ふえっ!?!そ、それはそうだけど〜」

千聖と花音はお互い、押しつけ合うようにやりとりしていた。どっちもどっちなんだけどなあ…

「まあ、いいや。それが分かっただけで十分だ。美咲はどうだ？」
「えっ？あたし？あたしは…えっと…」

美咲は少し考えて、こう答えた。

「正直、好きです。でも、さつきも言っていました、光輔さん、かなり彼女いますよね？そこにあたしも入っても構わないのですか？」

「別に構わないけど。」

俺は何のためらいもなく答えた。

「すごい度胸ですね…うらやましいです…」

「うくん…うらやましいことなのか？」

美咲の言ったことに俺は疑問を持った。

「何か自分の信念ってあるんですか？」

「い、意外なこと聞くな…」

美咲の言ったことに俺は驚いた。

「あまり良いものではないけど…『自分を貫け。常識にあまりとらわれるな。変えらる常識は変えてしまえ。』なんだよな…」

俺の言ったことに、彼女達は絶句した。

「ほらな。あまりいいものじゃないだろう？」

俺は彼女達にそう言った。だけど、意外なことに賛同したのは、香澄、紗夜だった。

「いいんじゃない？悪くないことだと思おうよ。」

「ええ。悪くないと思いますよ。」

「マ、マジか…」

意外な答えが返ってきたことに俺は少しためらった。

「ま、まあ、そこはおいといて、ひまりは？先程言ったメンバーと同意見か？」

「わ、私？」

俺はひまりに投げかけた。

「私も同じ。光輔のことが好きだよ。蘭ちゃんも好きなのは驚いたけど、それでも、蘭

ちゃんに負けない恋はあるから！」

「ひまり。ずいぶんと言うじゃない。」

ひまりの言ったことに蘭が挑発するように言った。

「えっ?!蘭ちゃん？嫉妬？」

「ち、違うから！私は…」

「嘘嘘。冗談だって。私も蘭ちゃんと同じくらい恋したいから。光輔は他にも好きな人いるし。」

ひまりと蘭のやりとりに俺は少しひやひやした。ちよつと一触即発だったぞ…2つ

の意味で。

「…あれだけ言つといて、意外だったのは有咲なんだよなく。有咲が好意を持っているのは驚いた。」

「えっ? そうなの?」

俺の言つたことに有咲は驚いた。

「そ、そりゃあ、わ、私だつて、恋するし…?」

「…何故、疑問系になる?」

有咲の片言な一言に俺は若干不安になる。

「…」

それを悟つたのか、有咲は黙ってしまった。

「むう…有咲も狙つていたんだ」

香澄は少し不満そうに有咲にそう言つた。

「なっ!?! い、いいじゃないか! 香澄が好きな人、私だつて気になつていたんだから!」

有咲はそれに対して顔を真っ赤にして反論した。

「…マジかあ…」

有咲の答えに俺は困惑した。

「ん? 光輔。乗り気じゃないな。どうした?」

修司が俺の感じていることに気づいたのか、声を掛けてきた。

「ああ…実はなあ…」

俺は修司に耳打ちした。

「有咲…正直、苦手なんだよな…」

「…マジで？」

俺の言ったことに修司は驚いていた。

「ああ…胸の性でもあるが、性格的にも苦手だな…キツイ感じがする…」

「ああ。俺も何となくそんな気がする。香澄に対しても当たりがキツイような気がする。」

俺の言ったことに修司は納得した。ちなみに、俺は胸が大きい女の子は苦手だ。理由は腕組んだときに胸が当たるのだが、その感触があまり好きではないのと、場合によってはセクハラに見られることがある。正直、俺はそれが嫌なのだ。なお、胸を当ててきた女の子は容赦なく胸にパンチを食らわす（正直、その行動自体が相手から見ればセクハラだと思うが、俺は正当防衛だと思っっている）。

大声では言えないことだが、胸の大きさを許せるのはB80（バストサイズ80cm）までだ。例えとしてバンドメンバーのボーカルメンバーの胸を比べると、友希那、唯はOKだが、蘭、彩、こころはOUT。蘭以上に大きいとキツイ。なお、俺以外の男子は

女の子の胸に対してあまりなんとも思わない。

「…光輔？」

俺の様子に気づいた有咲が心配そうに声を掛けてきた。

「ん？何だ？」

俺は有咲に聞いた。

「あ、あのさあ…あたしのこと、どうなの？」

「…ずいぶんとド直球に聞いてくるな」

俺は戸惑った。さっきのことを考えると、返答に困るんだよなあ…

「えつと…正直、苦手なんだよな…俺が考えている性格と合わないってこともあるが…」

「えつ…？」

俺の言ったことに有咲は驚いた。まあ、そのような反応するとは思っていたけど、俺

は俺で後半のことが言いにくい…

「…香澄、唯、春香、卯月、穂乃果、千歌、心愛は分かっていると思う。俺がかなり気にしているところがあるって。代わりに説明してくれると助かる…」

俺は香澄、唯、春香、卯月、穂乃果、千歌、心愛に説明を投げた。正直、こういう話は彼女達がしてくれると助かる…

「私が説明してもいい？」

そう言ったのは香澄と唯を除く彼女達だ。

「任せる。」

「任せるよ〜」

俺と香澄、唯はそう返答した。

「分かったわ。えっと、光輔、胸が大きい女の子が苦手なの。私達は慣れているからいいけど、胸が光輔の手に当たったときに、光輔、驚いてすぐに胸にパンチしてくるから。それくらい苦手なのよ…」

春香、卯月、穂乃果、千歌、心愛はそう説明した。ちなみに、幼馴染達は別に胸が当たっても平気だが、スキンシップ等が過激だとさすがに制裁加える。

「えっ!? そうなの!? ちなみに、誰まで平気なの?」

ひまりは驚いて、そう質問してきた。

「えっと、大ききだつと…これは光輔、さすがに説明してほしいけど。」

千歌が俺にこの話題を投げた。

「それくらいならいい。大ききは、幼馴染なら穂乃果で結構ギリギリ。千歌自体が少しキツイ…80くらいだよな?」

俺は千歌に確認した。

「私は82よ。」

「だよな。穂乃果は？」

「78だよ。」

「穂乃果は大丈夫だ。簡単に言うくと、80超えたらアウト。さすがに許容範囲外で、触れた瞬間、即パンチ食らわすな…」

俺は頭をかいてそう言った。千歌は超えているけど、慣れたので問題はない。あと、幼馴染で同様に該当するのは絵里、曜、果南だ。幼馴染で1番大きいのは絵里で88だ。慣れているので大丈夫だが、幼馴染でなければ完全に距離置いていた…

「…マジかあ…」

有咲は少し落胆した。見ただけで分かったけど、有咲は完全に許容範囲外だ。

「えっ…他にもダメなのいる？」

蘭は俺に聞いてきた。

「…バンドグループごとに分けて言っていた方がいい？」

俺は彼女達に確認した。彼女達は全員頷いた。

「…分かった。まず、Poppin, Partyから。有咲だけOUT。後は大丈夫なんだけど…たえと沙綾がギリギリくさいんだよな…りみは余裕でSAFE。次にRoselia。燐子とりさがOUT。て言うか、燐子とこの後話すひまりって、バンドメンバーの中なら1番胸大きいよね？見た瞬間、距離置きたい衝動が出ているんだよな…」

後は大丈夫だが、紗夜はギリギリくさい：A f t e r g l o w はひまりと蘭、もかがO U T、巴とつぐみは大丈夫だが、つぐみがギリギリくさい：P a s t l e * P a l e t t e s は正直、全員O U T：かも。彩でもギリギリO U T、ハロハピはこころ、花音がO U T、後は大丈夫だけど、美咲がギリギリかも：」

俺は彼女達を見てそう言った。

「そ、そうなんだ：」

該当した女子達は哑然とした感じで言った。

「だけど、慣れている人もいるんでしょ？慣れれば問題ないんじゃないの？」

千聖がそう言ったけど、俺は焦りながら言った。

「待って！それはあかん！確かに慣れれば問題ないんだけど、そっちから慣れようとしている辺り、完全にあんたらにセクハラしろ！みたいなことじゃないか！出来るか！」

「そうかしら？こういうのも悪くないと思うけど？私は別にいいけど。」

千聖はそう返してきた。

「：何が狙いだ？」

こう返してきたことを怪しんだ俺は千聖に聞いた。

「あら？言つたじゃない？『自分を貫け。常識にあまりとらわれるな。変えられる常識は変えてしまえ。』、『常識にとらわれず、新しい常識を作れ』と。」

「…それをそこで言う…?と言つても、それは変えにくいだろう…あくまでも変えられる可能性があることを俺は言っているんだよな…」

「だけど、私達がそれを許可したら?」

「…逆にされたいの?」

俺はおそるおそる聞いた。

「ええ。光輔が望むなら、いつでも。」

「…本意なのか、そうじゃないのか、よく分からん…」

千聖は俺をもてあそぶかのように言った。読み合いに持つて行こうとしているのなら、そうはいかないぞ…

「ふふ。それはどうかしら?」

「…」

どう返答したらいいのか迷っていたら…

グイツ!!

「うお?!」

勢いよく襟元を引っ張られた。引っ張られた方向を見ると…

「…むう〜」

香澄がほっぺを膨らませ、あからさまに不満の抗議を示していた。

「な、なんだ？」

俺はおそるおそる聞いた。

「光輔。ちよつと酷いよ。なんか白鷺先輩にいろいろ惑わされて、私達のこと置いていない？」

「ぐっ…」

香澄に痛いところと突かれた…

「やっぱりそうなんだ…それなら…」

香澄はそう言うのと、前に来て…

「うお!？」

香澄が突然、抱きついてきた。それもかなり強めに…つてまさか!

「ぐえー!ちよつ!がずみ!ギブギブ!」

香澄は首の辺りを思いっきり強く締めてきた。しかも胸まで押しつけてきたから、俺にとつては拷問のような感覚…香澄。これ、マジギレだ。意識吹っ飛ぶ…

「…」

香澄は無言のままさらに力を強めてきた。待つてくれ…さすがにやばい…振り解きたいんだけど、足で手を完全に固定されているから、殴つて解くのが辛い…間に合うか?

「戸山さん。そのくらいにしてくれ。光輔がさすがにやばい顔になつとる…」

春希が苦笑いしながら香澄に言った。香澄は仕方なさそうに解いた。ふう…助かった…

「すまない…ありがとう…」

「大丈夫か？」

春希はそう問いかけた。

「何とか…マジギレすると、今みたいに拷問をかましてくるからマジでやばい…」

「…だいぶ、力強いんだな。」

春希は驚いた感じで言った。

「実際、何回か逝きかけたよ…」

「マジかよ（笑）」

俺の言ったことに、男子陣は苦笑いするしかなかった。

「むう…今回はこれくらいにしてあげるけど、次はこうはいかないよ。」

香澄はまだ不満そうだった。

「…そんなに納得出来ない？」

俺は香澄に聞いた。

「納得出来ないよ！置いていこうとしないでよ！」

香澄は不満げに言った。

「…昔から変わらん…」

俺はため息をつきながら言った。実際、香澄は俺に対して納得いかないことがあると、駄々をこねるみたいになら不満を上げるからな…

「…」

その光景を見ていた彼女達は呆然としていた。

「あつ…何か置いてけぼりになっていたな。すまない…」

俺は彼女達に謝った。

「えっ!?う、ううん。何か試したみたいでごめんなさい…」

千聖はすぐに謝ったけど…何故か顔が赤いぞ…

「香澄。光輔にいつもこうしているの?」

蘭が香澄に聞いてきた。

「うん。いつもってわけじゃないけど、ときどきやるよ。」

「ときどきじゃないだろう…よくする方だろう…あれは…」

「…むっ。」

俺がそう言った瞬間、香澄がにらんできた。

「な、なんだ…?」

「何かさりげなく酷いこと言われた気がする。」

「事実だからしょうがないだろう…」

「…」

俺がそういったとき、香澄が近づいてきたが…

「…そう簡単に同じ手を食らうと思うなよ!」

俺は手を瞬間的に握りしめ、その拳をまつすぐ…

ドコッ!

「うひゃあ!」

香澄の胸のど真ん中に食らわせた。何故かは知らないが、本当に正確にそこに当たる

よなあ…

「…お見事。」

男子陣一同からそう言われた。

「ひ、酷いよ〜!それはないよ〜!」

香澄は涙目で猛抗議してきた。

「締め付けられて死ぬよりマシだ。こっちは命の危険を感じたから正当防衛だ。」

俺は平然とした感じで言った。

「…なんか、ずるい。」

「…へ？」

蘭が言った一言に俺は哑然とした。

「香澄。1人占めはするいよ。あたしだって、光輔のこと、好きなのに。」

「うん。香澄ちゃんだけなんて、何かずるいな」

「香澄だけって言うのも、つまらないわ。みんなのものなのに。」

「戸山さんだけって言うのも、何かね。」

蘭、彩、こころ、友希那の言ったことに、俺含めて、香澄もきよんとしていた。

「え？どうして、そう思うの？」

俺と香澄は揃って聞いた。

「それは、1人占めしているからよ。」

友希那、蘭、彩、こころが一斉にそう言った。

「だけど、香澄達だけって言うのも私達からしてみれば…ちよつとね…」

有咲がそう言うのと、紗夜、燐子、ひまり、千聖、花音、美咲も同様に頷いた。

「…そこで納得されると反応に困るのだが…」

「…むっ。」

俺の言ったことに、春香、卯月、穂乃果、雪穂、ことり、海未、絵里、亜里砂、千歌、美渡、志満、曜、果南、明日香、唯、憂、和、心愛が反応した。

「そこだけで何かいろいろと話しているみたいだけど、私達を忘れていない?」

春香、卯月、穂乃果、雪穂、ことり、海未、絵里、亜里砂、千歌、美渡、志満、曜、果南、明日香、唯、憂、和、心愛が不満そうに言った。

「忘れてるわけではないぞ。いろいろ言われてそっちに手が回らんだだけだ。」

俺は彼女達にそう言った。しかし、彼女達はそう言われても憚然としていた。

「…何かそっちも納得出来ない感じがしますが…」

俺はおそるおそる聞いた。

「もちろん。私達を忘れていたような感じがしていたからね」

彼女達は意味深ありげな感じで言った。

「光輔。そういうえば、春香ちゃん達も光輔と付き合っていると聞いていたけど…今、私達も付き合うことになったら、何人いるの?」

香澄は俺に聞いてきた。

「えつと…ちよつと待て…間違つてなければ、29人いるけど、それって…」

29人は自分でも正直驚きだ。貴明より超えているぞ…(ちなみに、貴明は24人)あと1人で30人じゃん…

「29人!」

これには俺以外のメンバーも驚きを隠せない。

「余裕で俺を超えているんじゃないか…すげえな…」

貴明は脱帽したように言った。

「だけど、まだ彼女達の中から名前が出ていない人達もいるぞ。その人達が貴明に流れてきてもおかしくはないからな。もちろん、それ以外の人達もだ。俺も人のことは言えないけどさ…」

「あゝ…あり得るなゝ」

俺の言ったことに男子全員納得した。

「光輔。意地悪な質問していいか？」

浩之が意味ありげな感じで聞いてきた。

「…察したけど、一応、聞こう。何だ？」

「その29人の中で、誰が1番いいんだ？」

「…度ストレートに聞いてきたなゝ」

予想通りだった。この中から1番選べって…どんな拷問だよ…

「そこはノーコメント。これ言ったら、いろいろまずい。」

「…まあ、そうだな。」

俺の言ったことに浩之は何かを感じたらしく、納得した。

「しっかし、こうなったとなれば…他の人達が誰が好きなのか、気になるようなものだな

「

和樹が興味ありげな感じで言った。

「…その様子だと、和樹自身、気になっている人いるんじゃないか？」

俺は和樹に聞いてみた。

「…まあ、気になる人がいないって言えば嘘になるな。」

和樹はさもあげなく言った。

「ほお…その気になる人って言うのは？」

俺は再度、和樹に聞いてみた。

「まあ、それは後でな。それよりも…」

和樹は周りを気にしてこう言った。

「今からどうする？やるべきことはやったんじゃないか？」

「あく…そうだな…」

俺はそれを言われて、少し考えた。やるべきことはやったからな…

「そうしたら、中心の転学試験が1週間後って言ったから…その時間に充てる方がいいし、()までとするか。」

俺はそう言った。

「そうだね。」

彼女達も賛同した。

「しっかし、彼女達全員が中心に来ることになるとはな……こりや楽しみじゃないか？」

冬弥が嬉しそうに言った。

「まあな。ただ、受からなかったら意味はないぞ。まあ、全員が受かってくれることを祈るさ。」

「そうだな。」

俺の言ったことに男子全員賛同した。

「うん！待っててね！」

香澄は力強くそう言った。彼女達も頷いた。

「それじゃあ、俺達は行くわ。何かあったら、連絡はしてくれ。」

俺はそう言って、男子達と共に練習場を後にした。

「そういえば、どうする？」

俺は彼らに聞いた。

「ん？何がだ？」

彼らは何のことか分かってなかったみたいだ。

「あく…説明不足ですまない。そっちも彼女達とのデートがあるじゃないか。いつにするんだ？」

「あゝ…」

「そう言われ、彼らは悩んだが…」

「俺は一応、決めたよ。」

「1人、そう答えた。」

「おつ、決めていたのか。春希。」

「ああ。とりあえず、来週大丈夫か聞いてみるよ。」

「了解した。頑張れよ。」

「俺は春希にそう答えた。」

「先陣は春希か。悔いのないようにデートして来いよ。」

「冬弥が励ますように言った。」

「次、誰になるか分からないけど、期待はしておくよ。」

「悔いなく、楽しんでこいよ。」

「春希なら上手くやれるから大丈夫。頑張れ。」

「和樹、浩之、貴明も同じように言った。」

「何かあったら、サポートはするけど、基本、そっちに任せるよ。」

「一応、影ながら見守るけど、応援しているから頑張れ。」

「もしもの時はしっかり対応します。自分を信じて頑張ってください。」

武也、親志、孝宏はついて行くみたいだが、影ながら応援することにしたみたいだ。

「付いてくるのか…ありがたいけど、何とか自力で頑張ってみよう。」

春希は少し面倒くさい感じで頭をかいたが、しっかりと受け止めたようだ。

「春希のデートが終わったら、次は俺が行くとするか。俺もそれを参考にして頑張っていきたい。自力でやるところもあるけど。」

そう言ったのは、和馬だった。

「なら、俺も一緒にいいか？」

そう答えたのは大智だった。

「ダブルデートって事か…行き先同じになりそうな感じかな？」

「多分。大丈夫か？」

「ああ。構わないよ。」

大智の言ったことに和馬は了承した。

「そうしたら、サポートは俺達が付こう。」

これに孝明、紀洋、秀彦、清司がそう答えた。

「おつ、じゃあ、何かあったら頼むわ。」

和馬と大智はそう答えた。

「じゃあ、その2人が終えたら、俺が行こうかな…」

冬弥はそう答えた。

「となると、サポートは彰が付くかな？」

「ええ。その時はサポートに付きます。」

俺の言ったことに彰は当然のように答えた。

「となると…後は必然的になるかな？」

俺はある可能性にたどり着いた。

「冬弥から順に和樹、浩之、貴明、九郎と亮が同時デート、で、茂、市生、真、修司、司、昌晴、諒一が別々の所で同時デートで、大志、雄蔵、鶴彦、蒂磨、雅史、雄二、ガトー、久太郎、幸太郎、麻耶、清詞、陽太、浩一、圭助、幸大、清貴がサポートに入ることでもいいのかな？」

俺がそう言うのと、言われたメンバー全員頷いた。

「了解。じゃあ、春希。改めて、来週頑張れ。後に繋がるから、それも期待しておく。」

「いろいろ大変なことになりそうだけど、頑張っていくよ。」

俺達は笑いながら、帰路につくのだった。

（続く）